

今日的視点でいえば、やはり土嚢状のもので端を抑えて版築をおこなったことは確実である。

**2種の土嚢** そこには最大で0.3m以上の長さを計る塊が見られ、おそらくその倍ほどの土嚢が用いられていたと考えられる。しかし、2種の土嚢を使用していた可能性もある。すなわち、一番外を抑えるのに0.5m以上の土嚢をもちい、そのすぐ内側にあたかも詰め物のように0.4mほどの薄い土嚢も使ったように観察できるところがある。

③墓道 (Fig. 7・16, PL. 5・9-1~3)

墓道は第2トレーナーでその西半をほとんど掘り上げており、東の壁では墓道の埋土の断面を

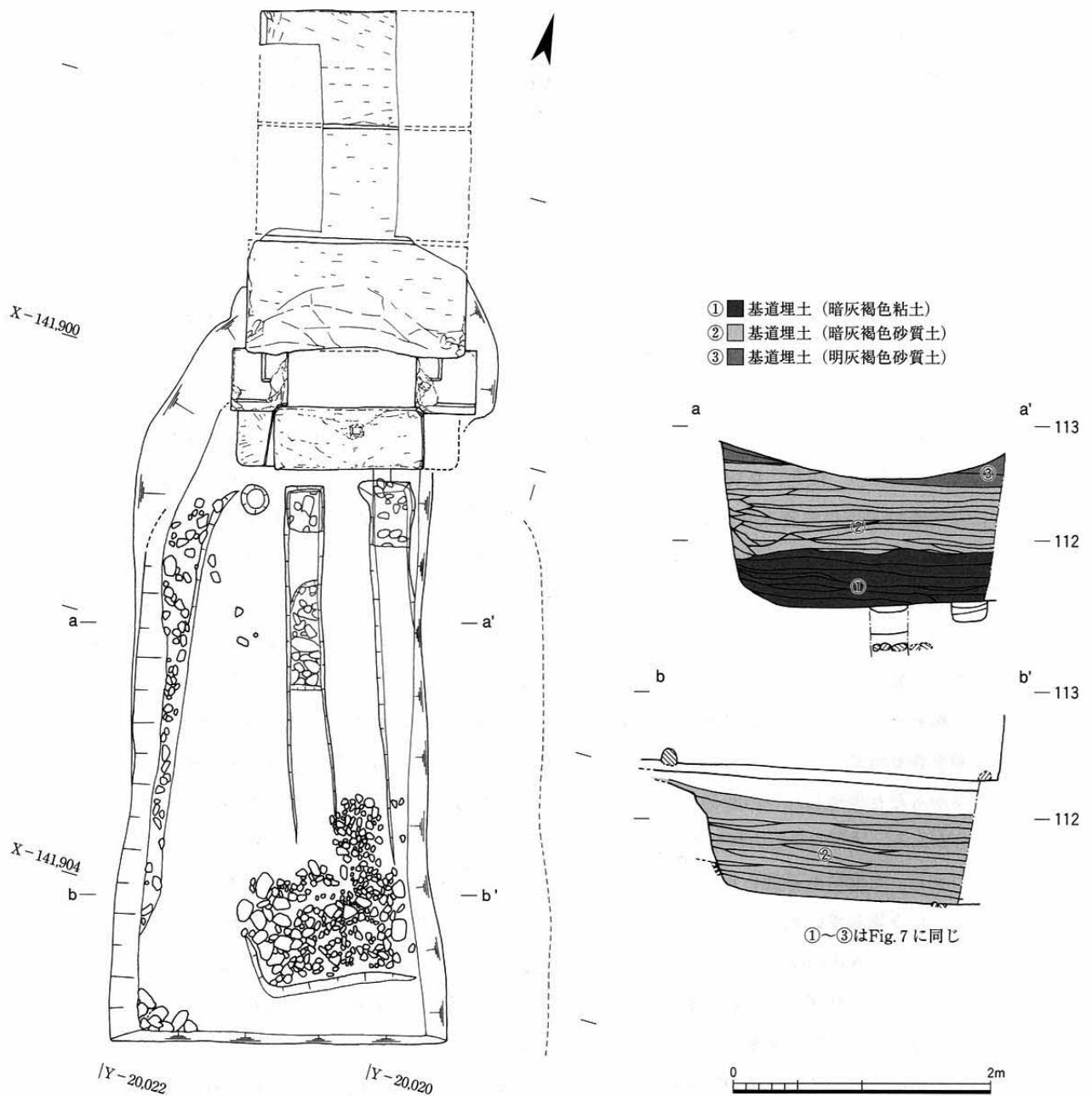


Fig. 16 石のカラト古墳 墓道および石燈籠 1:50

残しているが、西では墓道の西壁を直接検出している。検出範囲は長さ4.4mである。

墓道の形状は平行する東西の壁が石櫛前面に急速にすばまり、石櫛両側壁前端に取りつくようになっている。中軸で折り返した場合、墓道が広がったところでの幅は上面で約3.1m、底面で約2.2m、それより南ではさらに緩やかに広がっていく。墓道の傾斜は南に10%と比較的緩いものである。

この墓道面上の遺構としては、西側コロレールの抜き取り跡最北端のわきに上面径20cm、深さ同じく20cmほどの柱穴が1ヶ所だけみつかった。東側の対称位置にもその存在が予測され、墓前祭に関わる遺構とみられる。そして、石櫛前面から2.5m南へ離れた墓道面に東西1.2m、南北1.5mの範囲にわたって小石を凸字形ないしL字形に1層敷き詰めた遺構が検出された。

凸字形になろうがL字形になろうが、古墳の中軸上にあたる部分が石櫛の方へ0.5mほど突出している。

これも墓前祭に関する遺構とみて間違いないが、礫敷の周囲では何ら特別な遺物はみつかっていない。その位置は下方部テラスの下、墓道出口付近にあたる。西寄りには大きめの河原石が多用され、中寄りは小さめの石が使われている。コロレールの抜き取り跡は、この範囲では、下へ続いている様子であったが、先に述べたように抜いたあとに埋め戻して墓道を整えているため、敷石検出面では明確にその抜き取り跡は見えない。

Fig. 7 の墓道東壁のセクションから、墓道の埋め戻しは扉石閉塞後、大きく3段階の工程を経ておこなっていることが窺われる。まず、細かい単位の版築層の①が墓道外側に向かってかなりの傾斜をもって積まれる。これは粘土質で端を土囊で抑えることはしていない。これに続いて、下方部墳丘コア部分の端とともに墓道壁際も土囊で抑えながら版築をおこなって石櫛扉石と墓道内を②の版築でほぼ埋める。最後に上円部に相当する開口部分を③で埋め戻し墳丘コアの成形を完全に終えるという工程がわかる。①と②は灰色、褐色の粘土各層の境に灰色砂が入り込む層の版築であるが、③は明灰褐色砂質土で、小バラス、粘土ブロックの混じる互層となっている。

なお、須恵器皿 (Fig. 21-1) がこの墓道の埋土①あるいは②から採集されている。

#### ④石櫛 (Fig. 17~19, PL. 10~12)

石櫛は墳丘中央に位置し、主軸は北で西に約13度48分振れている。二上山で産出する凝灰岩製の切石による組み合せ式石櫛で、ここでは横口式石櫛と称する。石櫛の内法規模は東側壁で2.59m、西側壁で2.60m、幅は床面中央で1.03m、天井部で1.04m、高さは東側石、西側石それぞれ中央で1.065mである。天井部は屋根形に削り込まれていて、0.1mほど上げられている。床面は北側が高く、南に向かって緩やかに下降し、比高は2.3cmを計る。天井石外側の目地には灰白色粘土で目張りしている。

石櫛各部は計16石で構成されている。ただし、このうち盗掘によって最南端の天井石は失われている。床面を構成する石は4石からなる。後述する天井石同様、隣接する石と接する側面は相欠きとしているらしく、目地からそれぞれ0.23cmのところでその跡が確認できる。それによると南側の床石から順次北側へ4枚敷き並べていったと考えられる。

床石の長辺は推定で1.7m、床石のうち短辺の長さがわかるのは、内側の2石で、南から2石目のものが0.89m、3石目のものが0.88mである。東側壁を構成する各石は南から下辺、上辺の

墓道の形状

柱 穴

礫 敷

墓 道  
埋 戻 し

須 惠 器 皿

横 口 式 石 櫛

計 16 石

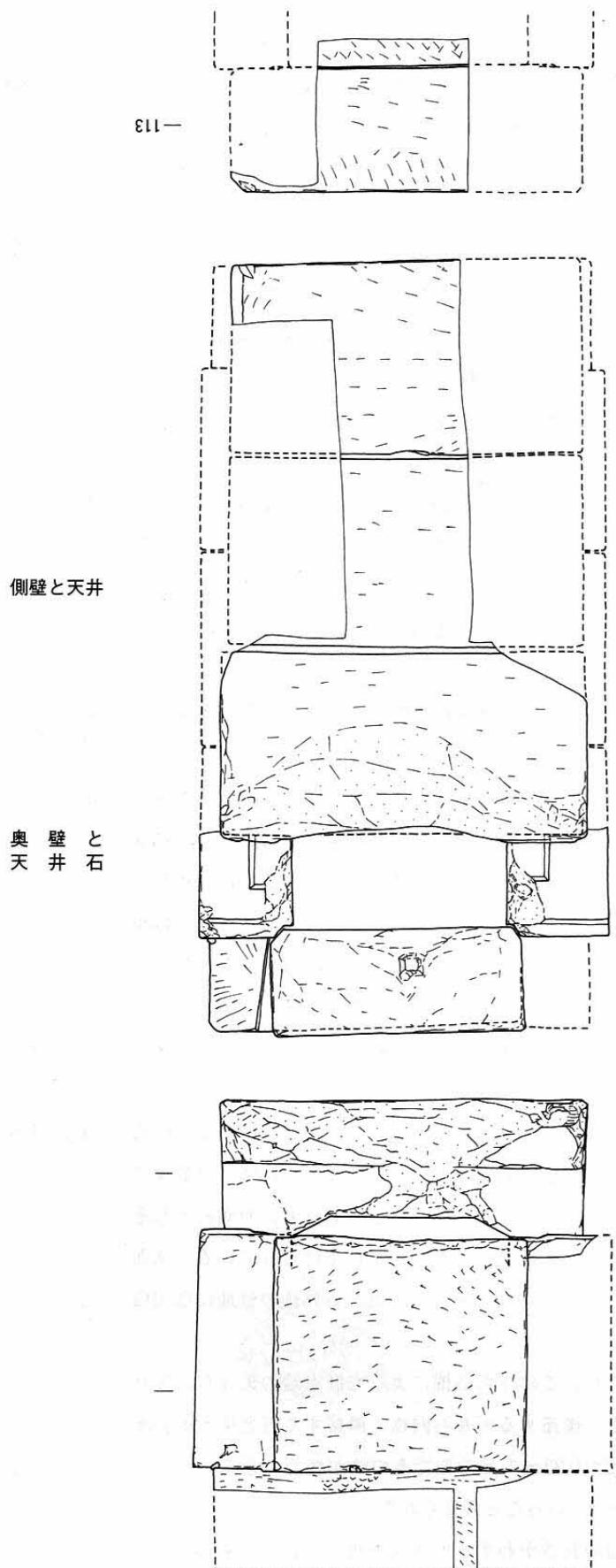


Fig. 17 石のカラト古墳 石槨外面実測図 1:30

順に記すと、長さは1石目が0.82m、0.85m、2石目が0.88m、0.88m、3石目が0.89m、0.89m、西側壁は1石目が0.86m、0.87m、2石目が0.88m、0.88m、3石目が0.86m、0.86mであり、東側石南端のみやや小さいが、0.87m平均で作られている。

最南端の床石の厚みは、扉石をはめ込むために1段下げたところで0.45mを計る。側石はそれが載る床石のへりを1段削りこみ、対する側石下端もその段に応じるように内壁側角を落とし、側石内壁と床石上面とが隙間なく組み上がるよう工夫されている。側石に相欠きがあったかどうかは明らかでないが、おそらく奥壁を設置して順に前へそろえていったと考えられる。側壁と天井石とはいわゆる逆印籠蓋の方法によって固定されるようになっている。つまり、側石の上面を20cmほど、内側が1cm低くなるようにし、そこにはまるようて天井部は側面から15cmのところで段を作り出している。また、側壁南端部分は8cmの幅で約1cm落としているが、これは失われてしまった南端の天井石がそこで安定するようにしたもので、そこより南にどの程度天井石が張り出していたかは定かでない。

石槨前面では、扉石を載せやすいように床石上面を前方ほど広く1段落としている。これは側壁に対する削り込みよりもさらに深い。扉石は長辺1.3m、短辺1.06mで、底面と上面は平らであるが、両側

石に接する範囲のみ斜めに削り込んでいる。これに対応して、最南端の側壁石は内側を鉤の手に削ってあり、そこに扉石をはめ込むようになっている。なお、扉石と床石の間には小石をいくつかかませて安定を図っている。また、扉石上面に上場で10cm、下場で5cmほどの小さな方形の凹みがあるが用途は不明である。おそらく、盗掘後の際かその後に加えられた傷であろう。

天井石は南から2石目のもので長辺1.7m、短辺0.87m～0.92mを計る。天井石どうしは床石同様相欠きによって接合を強化しており、上面から0.28～0.30m付近で相欠きが確かめられる。相欠きの具合からやはり南から架けていったように見える。失われている南端の天井石が仮に一番北の天井石と同じ短辺長をもつならば、扉石をはめない状態ではほぼ南半分が側石の南端よりはみ出ることになる。そのためにも南から天井石をかけ始めて、2石目の相欠きによって転げないように抑えたと解釈できよう。天井石どうしの組合せは北の2石間の接合があまりきれいでない(PL. 11-1)。

天井石の幅は下面で測ると奥から順に0.87m、0.87m、0.88mで、最南端も同様の幅の天井石であった場合、扉石がちょうど完全におさまることになる。先に述べたように天井石内面は側石の接するところから屋根形に削り込み、10cm高さを上げている。狭くなった天井内面の幅は0.66～0.68mである。

天井石の外側目地には灰白色粘土が詰めてある。また、奥から2番目の天井石の上に薄く広く粘土が覆っていることが観察されるように、本来、天井全体を薄く粘土が覆っていたと見てよい。

それぞれの石の表面には基本的に塗やチョウナの痕跡が残っているが、荒削りのままのところと比較的丁寧に仕上げているところがある。たとえば北端の天井石の後方側面は上方約20cmが荒削り、下方35cmが丁寧な仕上げとなっている(PL. 12-3)。石室内部は水磨きがなされ平滑な面を呈しているが、部分的に壁の上部と天井部は風化してはがれているところがある。外面に残る塗やチョウナ痕からは工具の刃の幅が5cmのものと6cmのものとがあることが確認される。奥壁裏側、扉石南側も明瞭に工具痕跡が残る仕上げとなっていて、石櫛内面についてのみ周到な配慮がなされていることがわかる。ただし、関連する終末期古墳にみられる漆喰の塗布は壁面で確認できないばかりか、目地にも詰まっていたなかった。また、組み合わせる場所をあらかじめ示すような計画線をつけた痕跡もみつからなかった。

こうして組み上げられた石櫛の形態は、石櫛内面が天井を家形に仕上げていること、そして扉石で閉塞した場合、扉石左右側面が側石の前方でかなりむき出しになることなどが、大きな特徴で、いずれの特徴も法量は異なるがマルコ山古墳のそれと類似する。

石櫛内部には大量の土砂や礫が流入していた。開口部ほど厚く堆積していたのではなく、ほぼ水平、どちらかと言えば奥壁側が厚く堆積していた。埋土は上から礫を含む腐植土、下方ほど礫を多く含む明黄褐色土と続くが、このように礫が多いのは、開口部から石を投げ込むことが地元の人々の間でさかんにおこなわれたことを示しているのだろうか。その下に、北側に茶褐色土、南に黄褐色砂質土が端ほど高く堆積し、もっとも下層に黄褐色砂質土、灰褐色砂質土が薄く堆積していた。

奥壁寄りの茶褐色土からは、Fig. 21-4に掲げたような土師器皿が破片だがかなりの数出土しており、それらは主に灯明皿として使われたと見られる。近世になって盗掘にあったか、あ

## 天井石

## 石材表面の加工

## 石櫛内土

## 第Ⅱ章 石のカラト古墳

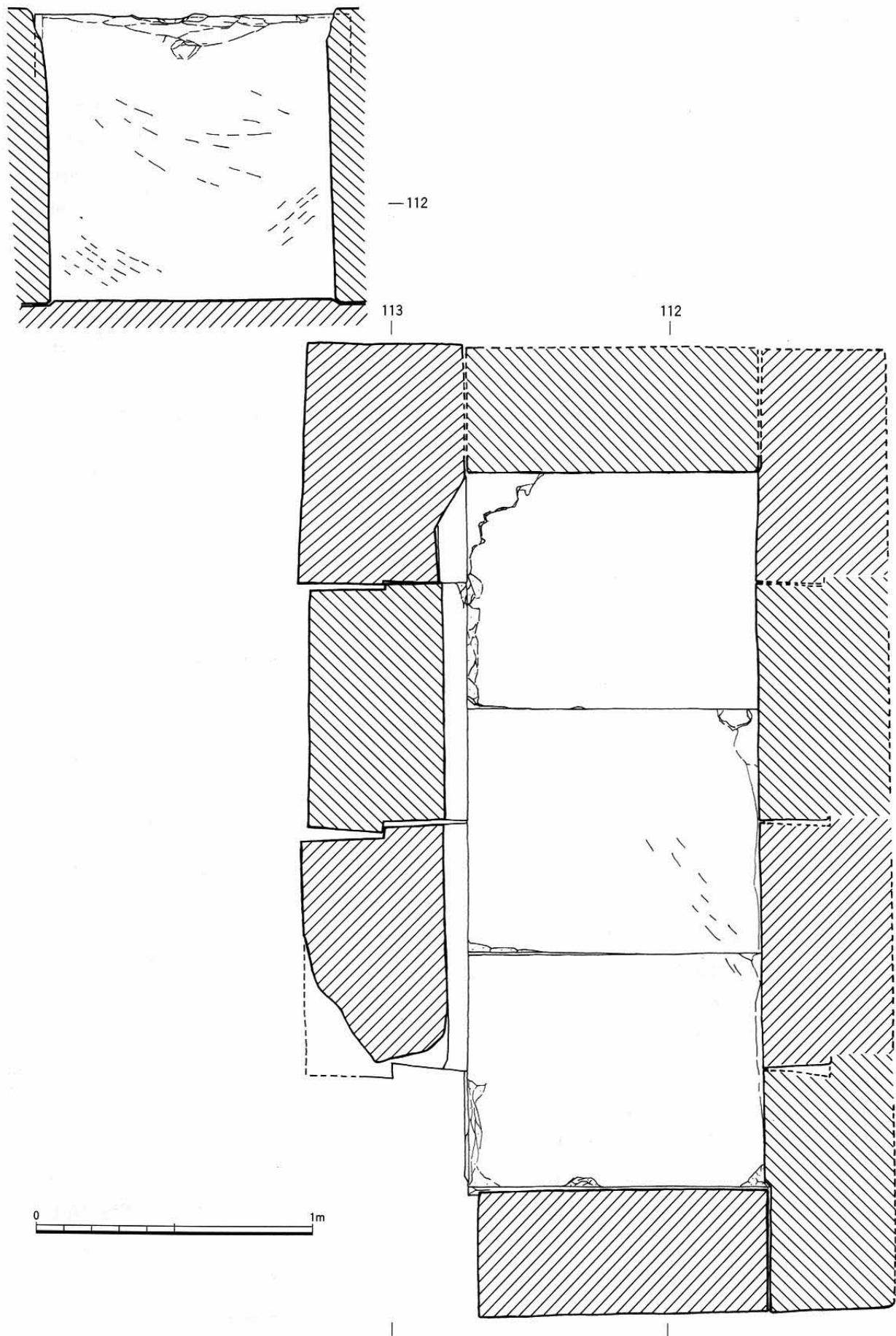
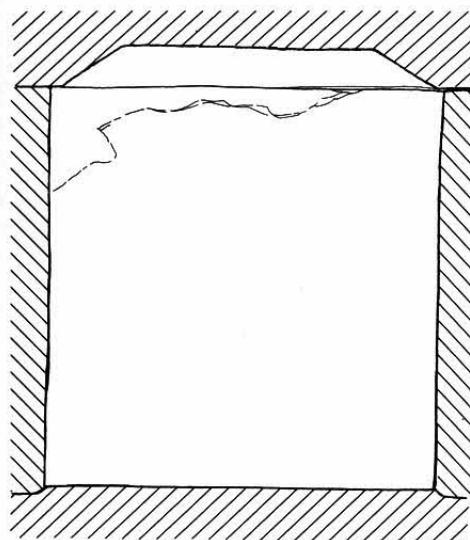
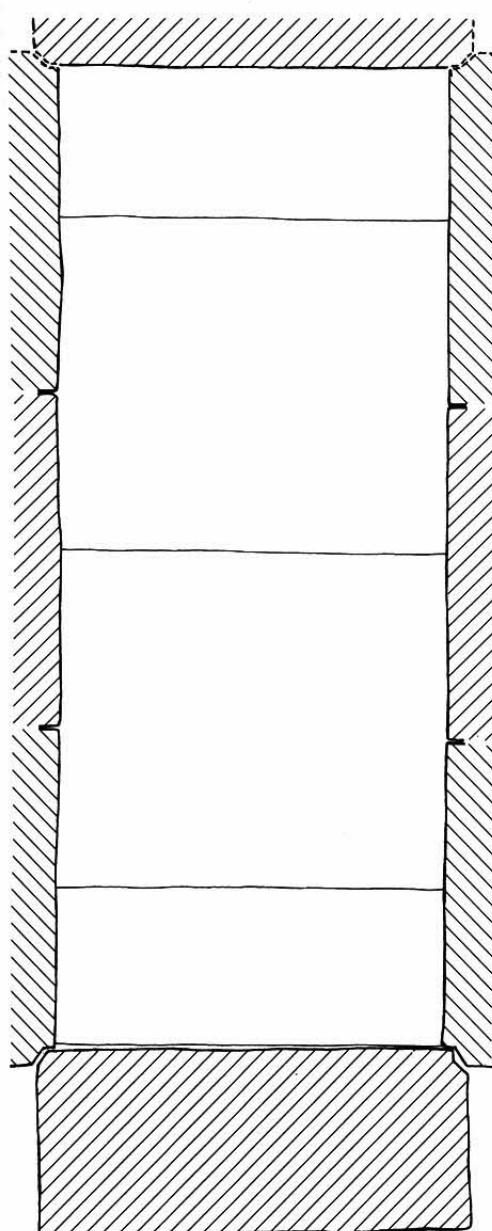


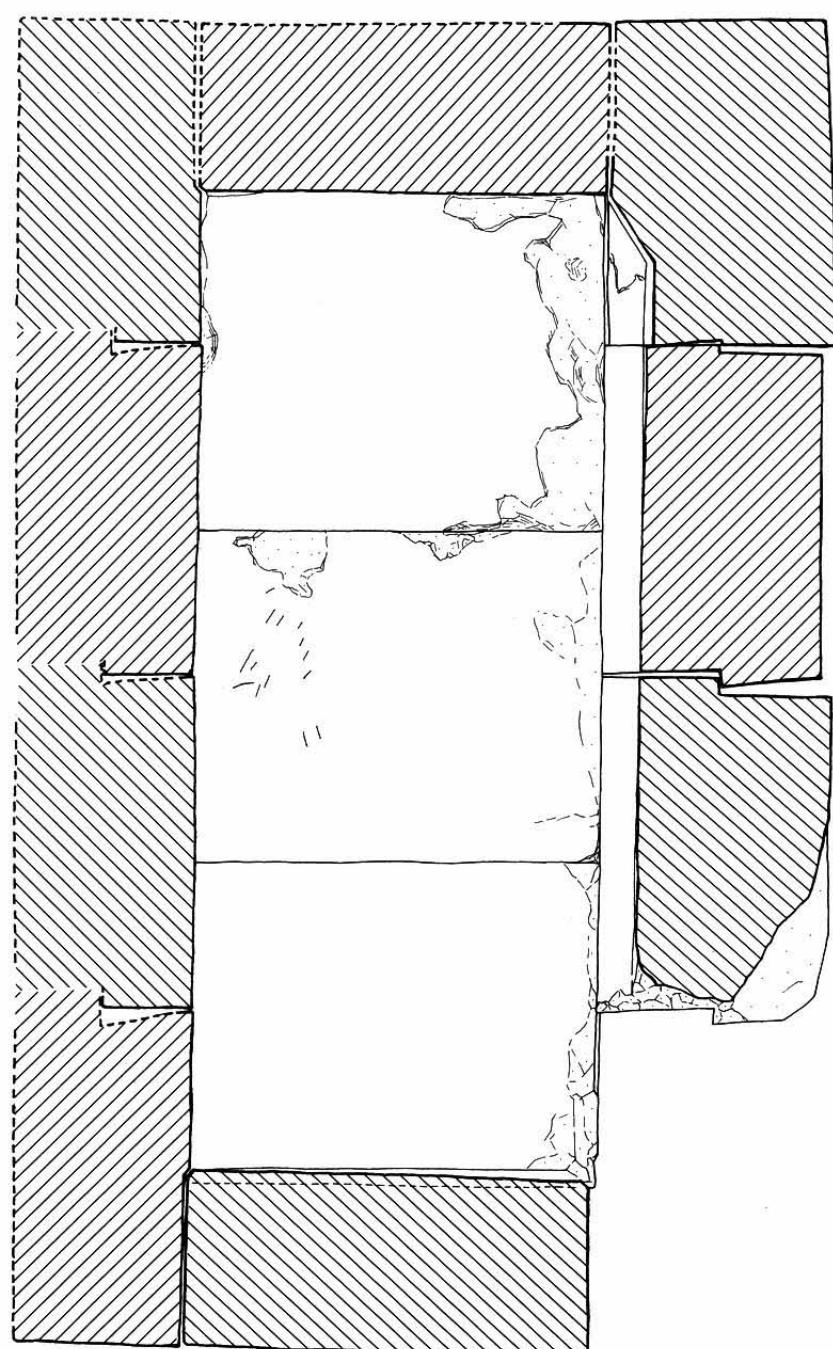
Fig. 18 石のカラト古墳 石槨内部実測図 1:20



—112

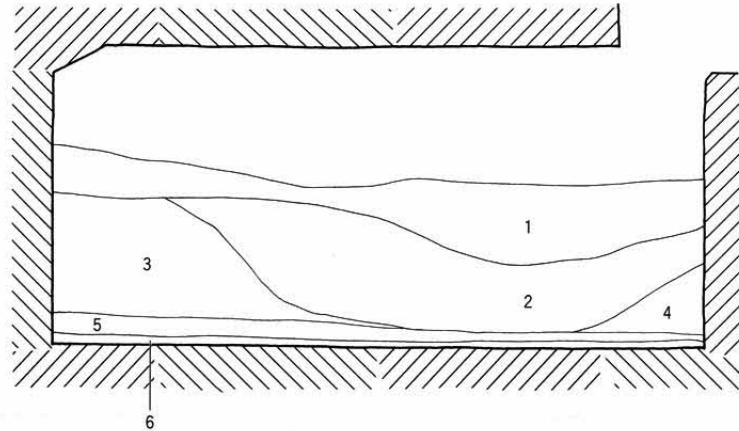


112—



113—

113 —



1 黒色腐植土 2 明黄褐色土 瓢・パラス大量に含む  
3 茶褐色土 瓢含む（墓道の版築土か） 4 黄褐色砂質土（パラスなし）  
5 黄褐色砂質土（黄褐色土ブロック・瓢混じり） 6 灰褐色砂質土

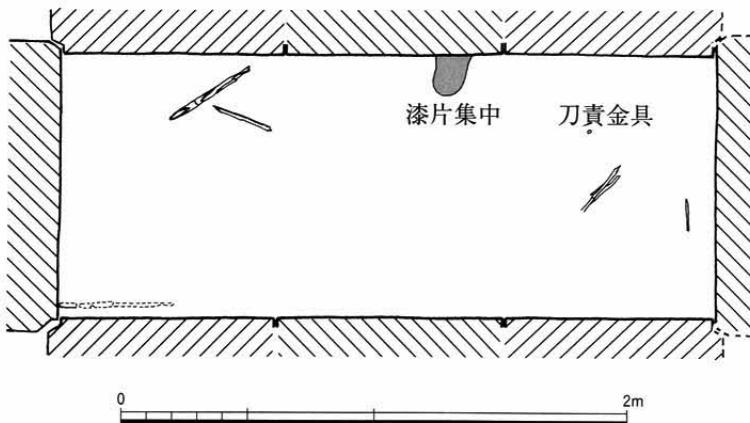


Fig. 19 石のカラト古墳 石槨内堆積土断面図・平面図 1:30

るいはすでに盗掘されていたあと、近世にそこが何らかのかたちで利用されたのだろう。

床面で検出できた本来の副葬品としては、唯一扉石から0.5mほど北に行ったところでみつけた刀の責金具があるだけで、これもその出土状況から本来置かれた位置を大きく動かされていると思われる。このほか床面近くの砂質土中から棺の一部とみられる漆塗製品の破片が東壁付近でやや集中して出土している。それ以外の遺物は、水洗選別によって流入土の中からみつかったものである。それらの中には金箔片も含まれていた。

なお、Fig. 19平面図に見る棒状のものは竹の根などの植物の痕跡である。

## B 出土遺物 (Fig. 20・21、巻頭図版 3、PL. 13)

出土品のうち、自然科学的分析は第V章で報告する。

**大刀装具 (Fig. 20-1~3)** 鞘尻金具と責金具、そして柄の部材が残っている。

銀装 大刀

2 が鞘尻金具で銀製、おそらく蠅付け法を用いて薄い袋状に成形している。側面形は先端が丸みをもつ長方形で、端部は幅 2 mm の面をもち側面との間に明瞭な稜（鎬）を作っている。現状では内部に鉄刀の切っ先が詰まっている、口には責金具が 1 個接着している。この責金具まで含めて長さ 3.5 cm あり、厚みは銀本体部分では最大 1.0 cm である。この責金具に接するか、わずかに隙間をあけて厚みのある革状の残存物が金具の側面に貼り付いている、佩表や佩裏の広い側面では 1.9 cm の間隔をあけて直線的に途切れています。この革状の残存物によって挟まれたところには何か別のものが貼り付けられていたと見られる。しかし、何ら接着剤などの痕跡は認められない。

むき出しになっている銀の表面は、側面では縦方向の刷痕が観察され、中央付近はやや金色を呈する。また、端面との稜付近はやすりによると見られる細かい刷痕が付いている。

責金具は 2 の鞘尻金具に付いているもの以外に 1 の単独のものがある。1 は、石櫛床面で検出したものである。倒卵形で、長径 3.5 cm、短径 1.8 cm、側面からみた幅 0.35 cm に作られている。表面は稜をもち、対して、内面は平らで、両者の間にわずかに 1 mm にみたない面があり、そこにやすりがけの痕跡が明瞭に残る。

もう 1 点の鞘尻の約金として 2 に見るものは長径 2.9 cm、短径 1.1 cm、幅 0.3 cm で、1 に比べて稜がよりはっきりしている。

3 は直線的な部材だが、責金具と同じ断面形で長さ 4.0 cm、幅 2.8 mm、厚さ 1.4 mm の細長いものである。一端は斜めに薄くつぶして端とし、反対の一端は別材に接続すべく相欠き状にしてある。当該期の大刀装具の中で、このような直線的な部材を探すと、正倉院宝物の中に黄金莊大刀第 1 号（中倉 8）が鞘を白鮫皮で包んで佩裏中心線で金板金を施して扼を形成しているのが参考になる。本例も扼の部材として利用されたと考えられるであろう（正倉院 1977）。全面に丁寧なやすり仕上げがなされる。

これらの装具はいずれも銀製で、同一の大刀の装具であったと見られよう。古墳時代の伝統的大刀とは異なるいわゆる唐様の大刀の装具に属する。中でも東大寺に伝わる銅漆作大刀第 10 号（中倉 8）や黒作大刀第 13 号（同）の類に鞘尻金具の形制は似る。1 の責金具は格段のデザインをもたないので鞘口か把の責金具（約金）かのどちらかであろう。

黒作大刀と比べて本個体は、完全銀装で作られていることから、装飾性が高いということができよう。出土している金箔がこれにともなうことはまず考えがたいが、鞘尻金具両側面に貼り付けてあった別の装飾の存在を考えればやはりかなりの儀仗的性格をもっているものと言えよう。

**金製玉 (Fig. 20-4)** 直径 8.8 mm、重さ 6.37 g、黄味の強い金色を呈し、光沢は鈍い。表面はところどころ黒く汚れ、細かい傷が無数に走る。完全な正球形に近いが、若干いびつで、1ヶ所に径約 1 mm ほどの円形の窪みないし平坦面が観察される。これはおそらくその部位に別の工具が当たった跡とみられる。

玉

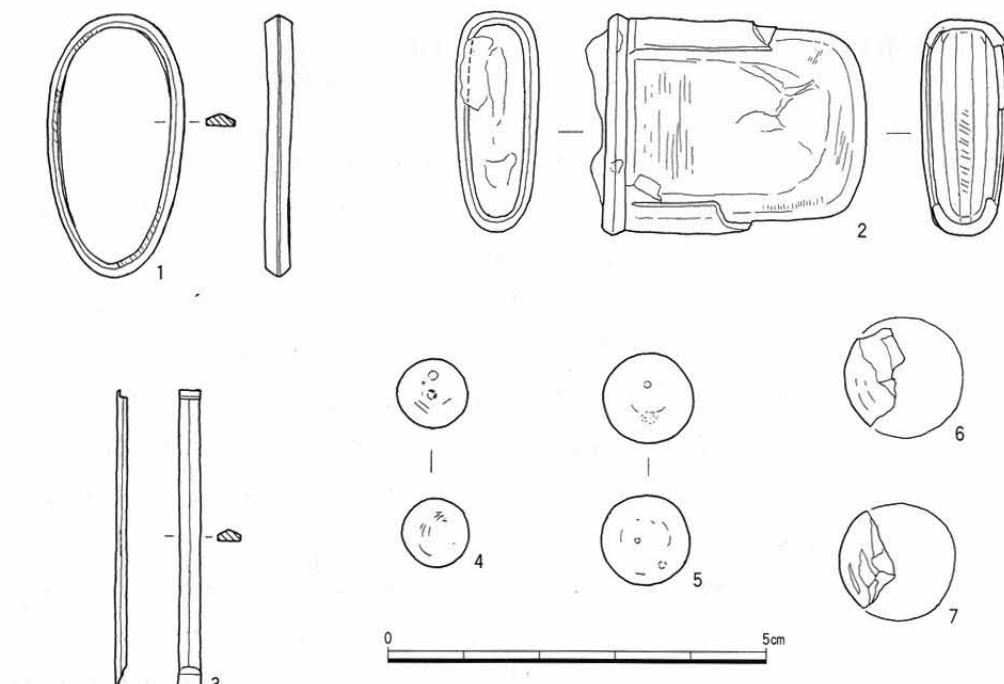


Fig. 20 石のカラト古墳 石櫛内出土遺物 1:1

**銀製玉** (Fig. 20-5) 直径11.8mm、重さ9.1g、表面は錆のためか黒色化が進んでいるが、まだ白銀色がきれいに見えるところもある。正球形ではないが、たたきながら球形に仕上げている感じがある。金製玉同様、数ヶ所に径1mmに満たない円形の窪みがある。これも工具の当たった痕跡と思われる。

**琥珀玉** (Fig. 20-6・7) 図化できるものはこの2点である。赤みを帯びた茶褐色を呈し、5片の断片となっているが、同一個体になるかどうかはわからない。1片をのぞき4点ともすべて球面を残すものの、紐孔の有無はわからない。直径1.9cmに復元できる。

**金箔** (卷頭図版3-3) いずれもくしゃくしゃになったもので最大のものでも $5 \times 2$ mmである。石櫛内堆積土を水洗して採取したものであり、石櫛内での分布の粗密はわからない。他の材質のものについていた痕跡や、顔料などの付着は今では観察できない。

**漆片** (PL. 13-3) いずれも細かな破片で最大のものでも1辺1cmに満たない。石櫛内の東壁に比較的集中してみつかった。非常に薄い何かから剥がれたような状態で、内面に布目痕を残すものと本地のようなものを残すものがある。また、片面に水銀朱が付着する残片もわずかではあるが存在する。こうした状況から、厚く漆で布を重ね合わせた夾絹棺というよりも本体は木か何かで、その表面に布を張ってその上から漆を塗り重ねたような棺の存在が推定され、その表面の漆膜が残ったものと考えられる。朱のついた断片があることから、ことさら棺以外の製品にともなう可能性を追究する必要はないであろう。もちろん朱のついた面は棺内面ということになる。

**須恵器** (Fig. 21) 1が墓道埋土に入っていた須恵器皿Cである。口径10.5cm、高さ2.5cmを計る小型の皿である。口縁端部を外側に引き出す。底部外面はヘラ切り後ナデ調整で整える。

2と3が第2トレンチの墳丘南裾外側の堆積土から出土した。2が須恵器皿Bの蓋で復元口

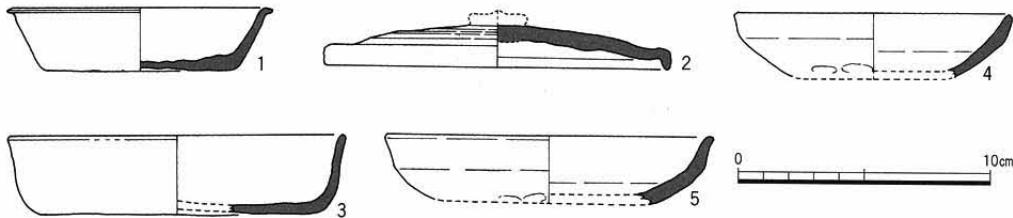


Fig. 21 石のカラト古墳 出土土器 1:3

径16.6cm、つまみは残っていない。3は須恵器皿Aで残りは悪い。復元口径13.5cm、高さ3.1cmである。底部外面はヘラ切り後ナデ調整を施す。

古墳に関係する可能性のあるものとしてはこれ以外に、土師器細片があるが形はわからない。

4が石槨内の茶褐色土から出土した土師器皿の中で、比較的形のわかるものである。復元口径10.8cm、胎土は白褐色で焼成は良好。近世前半、17世紀頃のもので、灯明皿として利用されたものであろう。比較的まとまって出土しているので、石槨の盗掘時ではなく何らかの目的ですでに開いていた空間を利用した時期を示すものであろう。

5が第2トレンチの暗茶褐色粘質土から出土した土師器皿で、復元口径13.0cmを計る。口縁部付近を幅広くヨコナデするもので、底部外面にはユビオサエの痕が残る。茶褐色で焼成は普通。11世紀頃のものと思われ、この時期に最初の盗掘がおこなわれた可能性を示唆する。

1は年代を限定することの難しい須恵器皿である。いっぽう2と3は奈良時代前半に下るものだが、墳丘外での出土であり古墳築造時期を示すものではない。

#### 参考文献

- 飛鳥資料館1979『飛鳥時代の古墳』飛鳥資料館図録第6冊
- 梅原末治1925『相楽村ノ方形墳』『京都府史蹟勝地調査会報告』6
- 江浦洋編1998『蔵塚古墳』(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第24集
- 大阪府立近つ飛鳥博物館2003『壁画古墳の流れ』大阪府立近つ飛鳥博物館図録31
- 金子裕之2004「都城における山陵－藤原・平城京と喪葬制－」『文化の多様性と比較考古学』考古学研究会50周年記念論文集
- 上林史郎2003「後・終末期古墳における墳丘内暗渠」『関西大学考古学研究室開設五拾周年記念 考古学論叢』関西大学考古学研究室
- 京都府教育委員会1979『奈良山－Ⅲ 平城ニュータウン予定地内遺跡調査概報』
- 正倉院事務所編1977『正倉院の大刀外装』
- 高橋克壽2002『古墳の葺石』『文化財論叢Ⅲ』奈良文化財研究所創立50周年記念論文集
- 塚原二郎2004『東京都武藏府中熊野神社古墳の調査』『考古学研究』51-2
- 坪井清足1948「生駒山脈に於ける古墳の地理的分布」『生駒山脈－その地理と歴史を語る－』積善館
- 長江正一1920「京都府相楽郡相楽村の方形墳」考古学雑誌11-1
- 沼津市教育委員会1990『清水柳北遺跡発掘調査報告書その2』
- 右島和夫・土生田純之・曹永鉉・吉井秀夫2003『古墳構築の復元的研究』雄山閣

# 第Ⅲ章 音乗谷古墳

## 1 古墳の立地 (Fig. 1・22、PL. 14-1)

丘陵先端に  
立 地

音乗谷古墳は微視的に見ると、北に谷を擁し、東北へ張り出す奈良山丘陵の支丘陵の先端部に位置していて、周辺ではかなり目立つ位置にある。眼下に皿池を臨み、丘陵裾からの比高はわずか5mほどである。

そのすぐ南の東向き斜面には音如ヶ谷瓦窯（第9号地点）があり、さらに南の歌姫西瓦窯（第12号地点）とともに、今日、一体で整備がなされている。それ以外に須恵器窯が第10号地点などで見つかっているが、古墳はこの一帯では確認されていない。ただし、音如ヶ谷瓦窯跡のSK17から出土した円筒埴輪（Fig. 80）は後述するように音乗谷古墳の埴輪とは型式学的特長を異にするものであるため、音乗谷古墳以外の古墳、あるいは埴輪窯跡が近くにあった可能性も捨てきれない。今のところ古墳が確認できるもっとも近いエリアは後述の第13号地点・第15号地点のある奈良山丘陵東部ということになる。距離にして1.2kmほど離れている。

## 2 発掘調査の経過

### A 発掘区の設定と調査の経過 (Fig. 23)

1972年10月初めに音如ヶ谷瓦窯跡の南西に位置する奈良県側歌姫地区の第10号地点で、須恵器の窯跡を調査した後に、1972年10月12日から須恵器窯跡と同じ丘陵の北端に位置する本古墳を調査することになった。

墳丘は竹の土取りによって相当削り取られていたが、まず北東側の墳丘崖面を削って盛土の状態を確認するとともに、測量調査ならびにテストピットを墳丘の乗る尾根をまたぐ形であけることから開始した。その際に、南側裾から多数の埴輪が出土したため、範囲を広げて発掘した結果、掘割り状の遺構が掘り上がった。この時、その掘割り内の南西側に赤く焼けている部分があることが注意された。

地区割り

掘割り部分に統いて、古墳本体の調査を実施した。まず墳丘を南部、西部、北部、東部に4分割し、それぞれA区、B区、C区、D区と名前をつけた。それらの境界の中心をX30、Y30とし、XY座標によって地点を表現する方法とともに、2mずつ北東—南西方向のX軸にアルファベットを、北西—南東方向のY軸に数字をつけ、その併記によって地点を呼び分ける方法も用いた。

掘割りの  
調査

まずA、C区の表土から剥いでいった。調査が進むにつれ、C地区の中で、墳頂と思われるところから円筒埴輪と形象埴輪が良好なかたちで出土した。いっぽう、A区では掘割り内に見つけた焼けあとのある土坑は、掘割りが埋まる中で掘り込まれたものであることが知られた。

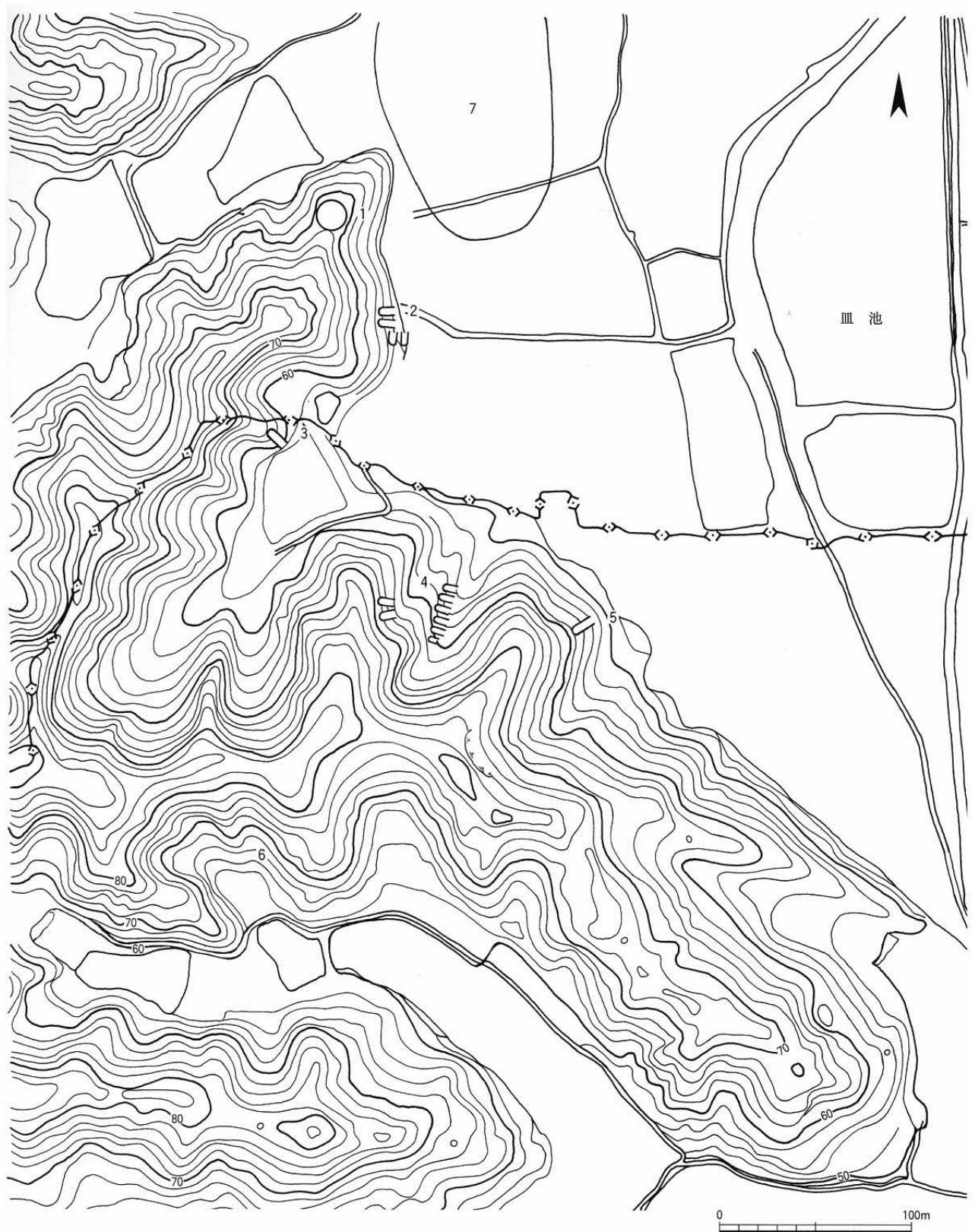


Fig. 22 音乘谷古墳 付近遺跡分布図 1:3000

1. 第20号地点 (音乘谷古墳)    2. 第9号地点 (音如ヶ谷瓦窯)    3. 第10号地点  
 4. 第12号地点 (歌姫西瓦窯)    5. 第11号地点    6. 第18号地点    7. 大畠遺跡

この間、A区の掘割りから引き続き埴輪が多数出土した。円筒埴輪のほかに人物、動物、玉杖、双脚輪状文形埴輪などの豊富な資料が得られ、それに続く南東斜面からは円筒埴輪のほかに蓋形埴輪や須恵器片も出土した。

## 埋葬施設の調査

続いて、D区の調査とともに埋葬施設の本格的調査が10月26日より開始された。D区でも埴輪の集中域を確認している。埋葬施設は徹底的な破壊にあってはいたが、平面検出により、墓擴とともに石室の裏込めの粘土が残っていることがわかった。このことから、埋葬施設は横穴式石室だったとしても羨道から玄室にかけて段がつく特異なものであろうと考えられた。

埋葬施設内部を掘り下げるにあたって墓擴にあわせて畔を切り直し、四分法により進めたが、やがて盜掘で床面の大半まで攪乱されていることがわかった。床は本来バラス敷きで、それが残っているところでは鉄鎌など若干の遺物を検出した。

この段階で11月4日にいったん作業を止め、12月18日より再開した。そこでは、埋葬施設南側に排水溝を確認し、残存する部分を全て検出した。最後に排水溝と盛土、墳丘構築関係などを調べ、はじめてこの石室に石材が使用されていたことが判明した。調査面積は125m<sup>2</sup>。

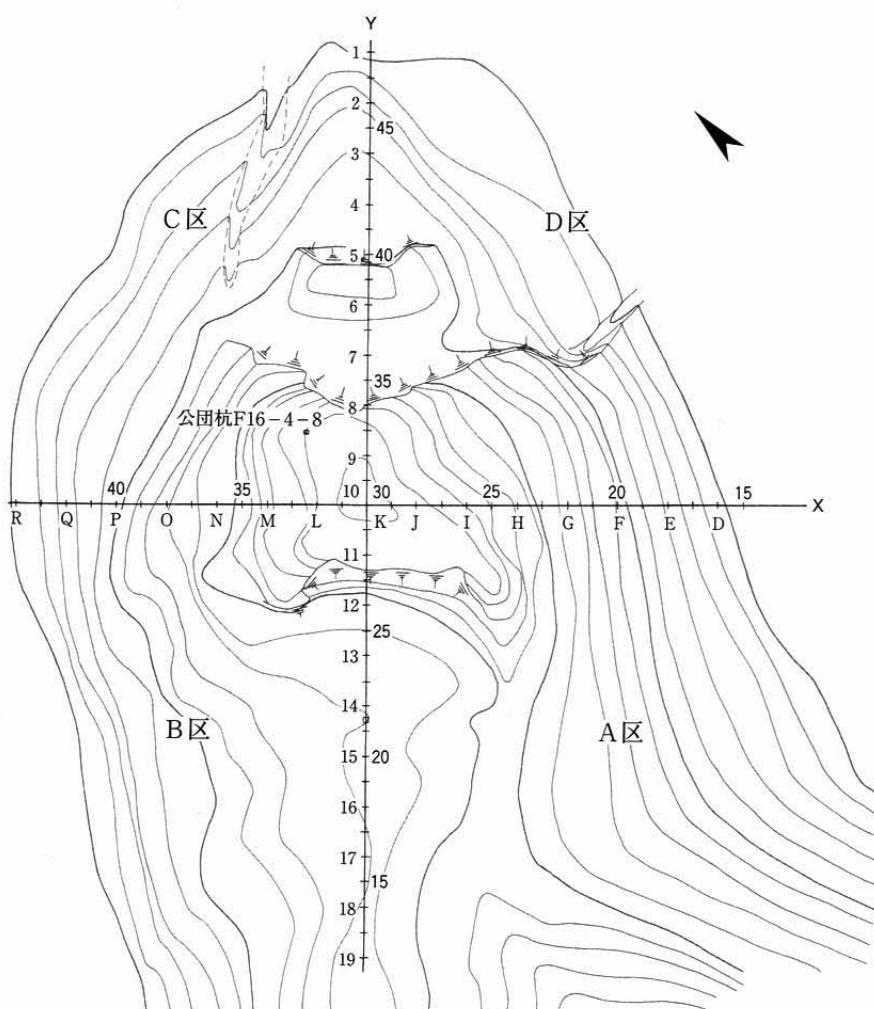


Fig. 23 音乘谷古墳 調査区地区割り図 1:300

## B 調査日誌

1972年10月12日（木）晴れ

丘陵先端部にある音乗谷古墳の調査にとりかかる。作業は墳丘の下草集め、竹林によって削られている封土断面の清掃。断面の清掃作業中、封土から埴輪片を多数発見。

10月13日（金）晴れ

壺掘り、古墳北東竹林側の断面を削る作業開始。墳丘裾と西南尾根上テスティットから多数の埴輪片が出土した。西南尾根上テスティットを拡大したところ堀と考えられる溝を検出し、人物・動物・双脚輪状文・玉杖を含む埴輪片が多数出土。掘割りの西南側が焼けていたが性格は不明。溝上面から須恵器高杯脚片出土。断面観察の結果、約3mの盛土をした古墳であることが判明した（後に訂正）。なお、テスティット中から甕腹片が出土したが性格は不明。

10月14日（土）晴れ

音乗谷の調査対象地の地区割り。10月6日の発掘開始以来、「K」区としていた府県境から古墳までの間を「K」と「L」に分ける。

10月16日（月）晴れ

壺掘りピットを開ける。4POJの測量を開始し、約半分を終了。

10月17日（火）曇り

丘陵の陵部、伐採と壺掘り開始。本日で終了。測量済み部分から木の根抜き。

10月18日（水）晴れ

測量完了。2班に分かれA・C地区の表土剥ぎ開始。C地区から円筒埴輪3・形象埴輪1が出土した。

10月19日（木）雨

雨天のため作業中止。測量図のトレース。

10月20日（金）曇り

4POJ-A区、封土を30cmほど掘り下げると、主体部と思われる部分の輪郭が現れた。外側に良質でない粘土、内側に封土表面を覆っている黄褐色土が見られるのは、黄褐色土が落ち込んでいるためと思われる。一昨日はC区で主体部の一部が顔を出したが、そのときの判断よりも大きく広がることがわかった。またAI17を中心に、焼けた3cm程度の壁をもつ遺構を検出。90×60cm四方程度の長方形プランをもつことが判明し、掘割りに沿って延びるのではないかという予想ははずれた。南西側の壁は焼けが顕著。この遺構は掘割り埋土（黄褐色土）の上から切り込んでいる。C区において盛土と地山の境界を検出。60.00mセンターとほぼ一致する（後に訂正）。地山は小円礫混じりの砂質土（砂礫層）である。盛土の端、墳端とは速断できないが一応の目安はついた。

10月21日（土）晴れ

本日はA地区の調査のみ。測量のため墳頂部に打った基準杭を主体部調査の必要上、東南（Kライン上）に移した。調査をAI17の掘割りに集中。焼け壁の検出された遺構を残し掘りあげた。AI17での深さは地山上面から1m程度であるが、AJ17では次第に浅くなっている。地形の関係からであろう。したがってこの掘割りは北西方面にはこれ以上遺構として残されておらず、南東方向にはまだ延長すると考える（いくつかのテスティットにその一部が確認できている）。遺物としてAI・AJ17の埋土中から発見された埴輪片がある。10月13日に同地点から出土した玉杖形埴輪と同様の破片も含まれる。本日の調査でA区の地山の地形が凹凸の著しいものであることが判明したが、人為のものであるかは不明。

10月23日（月）

A区墳丘裾から排土開始。

10月24日（火）晴れ

A区墳丘斜面の排土。AF・AG14～15に落込み。

10月25日（水）晴れ

A区墳丘東南斜面の排土。埴輪片採取。墳端はまだ未掘である。AI17の掘割りが南東方面へ続くことを確認するため、AH17・18埋土の排土をおこなう。約90%掘りあげる。AI17と同様AH17においても埴輪片が多く、溝底近くに不規則に落ち込んでいる。出土遺物はAH17ではトロ箱2杯分の埴輪が出土。円筒のほか、玉杖やAI17出土品と同一個体の動物を含む形象埴輪がある。また、砥石と思われる石製品（後に否定される）も出土している。東南斜面は円筒や蓋形などトロ箱1/2杯分の埴輪と、甕か器台と見られる須恵器1片が出土。

10月26日（木）晴れ

A区東南側墳端の検出をおこないつつあるが、まだ確実にはつかめず。山土が堆積し、かなり深い。C・D区にかかる崖面のセクションで地山と盛土の境をつかむことが必要。A区の溝はAF17で曲がる。主体部輪郭を出すため40cm幅の畔を残し、プランの検出にかかる。粘土の内側から測って4.7mの墓廣である。DJ7で円筒埴輪を検出。

発掘の進行方法に変更あり。明日から主体部の発掘にかかり、11月4日までに完了。11月6日から阿弥陀淨土院と77次宮内の二手に分かれる。阿弥陀淨土院終了（12月5日）後、音乗谷古墳の墳形調査と須恵器窯の実測。宮内の調査はそのまま続行。以上のような段取りとなった。

10月27日（金）雨のち晴れ

雨のため午前は作業中止。午後からDJ8にヤグラを組み、四分法による発掘の進行状況を撮影。

ヤリカタ測量の貫板の墨打ちと杭打ちをおこなう。

明日は①35mmモノクローム写真撮影。②ヤリカタの貫板打ち。③現在掘ったところまで、封土のセクションとり。④主体部の畔をはずす。⑤主体部の図面をとる。そして主体部の発掘。

10月28日（土）晴れ

ヤリカタの貫板打ち後、X=30.000、Y=30.000のラインで主体部畔のセクションをとる。畔をはずした後、佃氏による写真撮影。主体部中心と考える点を基準に十文字に水糸を張り、四分法によって主体部の発掘を開始。粘土の内側から始める。主体部をI～IVに分け、その中から取り上げる遺物はx軸とy軸からの距離によって求めるこことした。I (+x, -y)、II (-x, -y)、III (-x, +y)、IV (+x, +y)。主体部のみに用いたこのx軸、y軸は、ヤリカタ測量に用いたX軸、Y軸とは逆となる。II・IVを数cm掘り下げたところ、落ち込んだと思われる埴輪片が出土。

10月29日（日）晴れ

昨日のII・IV区の掘り下げにより主体部内側に褐色土の部分が認められ、中央がさらに低くなっていることが予想された。同様の状況を確認するためI・III区を発掘したところ、褐色土の上に粘土があり、あと数cm掘り下げればこれがなくなつて褐色土が現れると思われる。この粘土は棺の上の粘土が落ち込んでいるのであろうか。遺物は須恵器片・埴輪片が、粘土の内側傾斜面に貼り付いて出土した。この現象は花崗岩の礫についても同様（特にI・II区において）であるが、花崗岩の性格はまだ不明。

10月30日（月）

昨日の予想どおり、中央の粘土は暗黄褐色土上に数cmの厚さで乗っていた。この粘土を掘りあげ暗黄褐色土の掘り込みを調査。しかし遺物は須恵器や埴輪小片のみであった。よって、主体部の底まで掘りつくした可能性もあるが、それにしては性格のわかる遺物や遺構が出ないため様子がおかしいとも考える。調査員一同これで終わりかと落胆す。しかしこれ以下の土層にもさらに須恵器・埴輪片の混入が認められたため、主体部が盗掘にあっていることが判明。よってこのプランが盗掘で偶然に主体部の掘形のような形状をなしたものであることがわかった。須恵器片には杯・長脚二段透かしの高杯・器台があり、6世紀前半と見られる。盗掘時期を示す遺物は発見されず。

10月31日（火）

盗掘の程度を確認するためI区を掘り下げる。ここでは主体部下の粘土にまで盗掘が及んでいた。III・IV区において主体部の棺下に敷いたと考えられる小円礫（黒色の河原石）を検出。これも盗掘時の攪乱によりごく一部を残すのみ。出土遺物は鉄鎌約20本、須恵器片、鍍金を一部に残した辻金

具らしきものの破片4。

11月1日（水）晴れ

昨日に続きII区を掘り進める。畔をとり主体部底面および盜掘面全体を検出。昨日、礫床として検出したものが原位置かどうか疑わしいため、実測後さらに掘り下げて駄目押しすることに。

11月2日（木）晴れ

主体部、C・D区埴輪、A区の溝、溝内の特殊ピットの実測をおこなう。主体部はセクションとレベル取りの仕事を除いて終了。特殊ピットの焼け壁については熱残留磁気の測定を依頼することになっている。

11月4日（土）曇り

礫床の遺物を取り上げる途中、辻金具の中心部の丸い部分を発見。作業終了。シートをかぶせ、主体部と溝の部分を12月まで保護する。

12月18日（月）晴れ

作業再開。墳丘断ち割り開始。南に南北方向の排水施設。

12月22日（金）

玉石排水溝の構造と盛土と地山の境について検討。堀の東側で埴輪を検出したため、傾斜に沿つて掘り進める。

排水溝は両側に長めの石を近接して並べその上に偏平な蓋石を乗せたもので、底に石はない。粘土層中に作られており、掘形は確認できず。この粘土層が盛土か地山か議論を呼んだ。盛土については、排水溝の設置された灰色粘土層までを盛土とする説と、その上の層より盛土とする説に分かれた。前者については排水溝が粘土層中にあり掘形がみつかないこと、花崗岩を含んでいることを理由とする。また後者は、掘形がみつかることを同じ粘土で埋めたからと判断したため。議論の結果、灰色粘土層を地山とする。

12月23日（土）雨

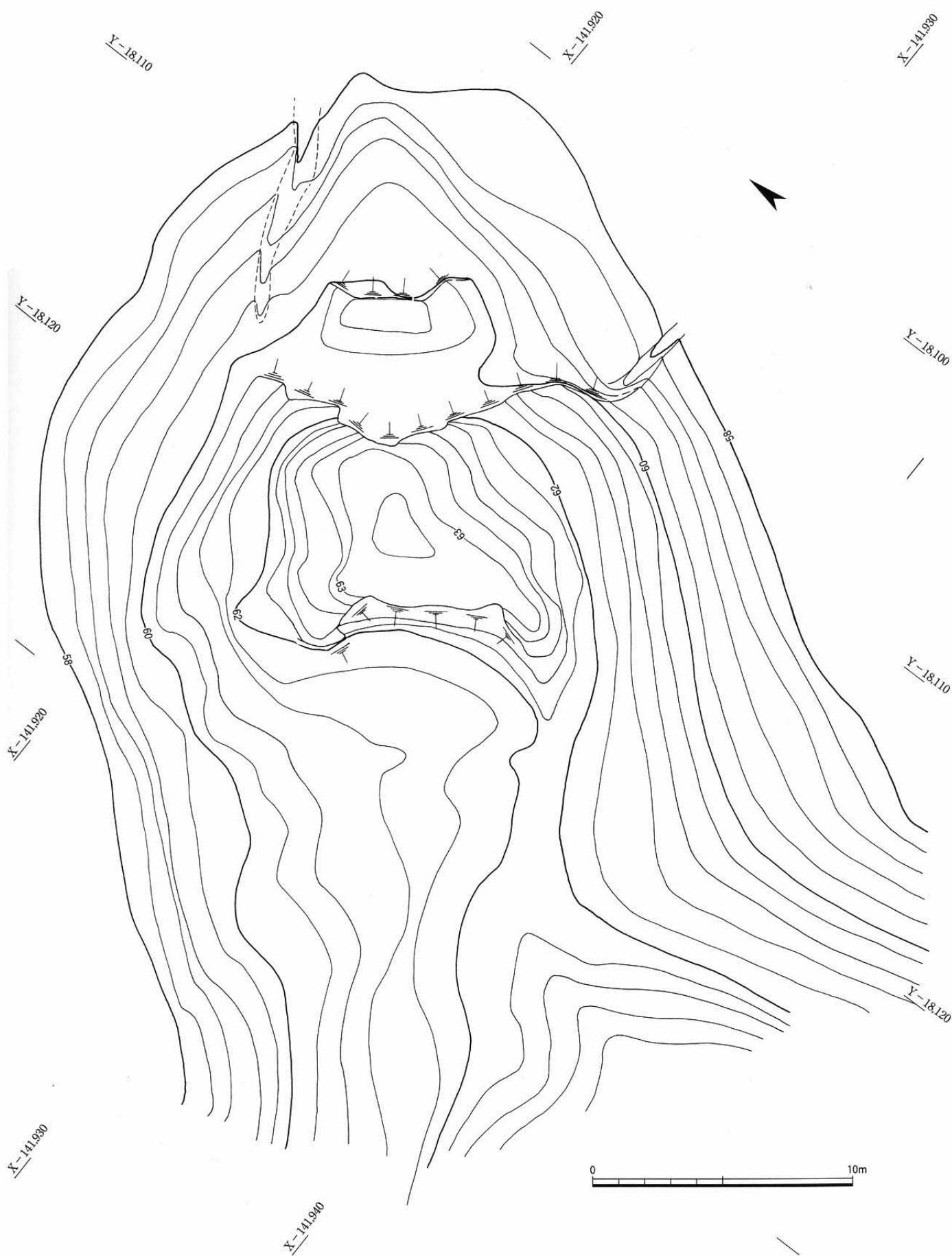
雨のため作業中止。全員77次へ。

12月26日（火）晴れ

礫床下での排水溝石組みの構造を確認するため、石の一部を取りはずす。排水溝は北辺まで続き、花崗岩の礫の部分で止まっていた。このため花崗岩の広がりを追って拡張した結果、コの字形のように取巻いていることを突き止め、この古墳が石室を持っていたことが判明した。青灰色粘土層中に花崗岩を含んでいることも解決した。石室が横穴式か堅穴式かは残存部からでは直ちに結論を出せない。また、石室が終わると考えられる部分から排水溝に蓋石がかぶせられている。

12月27日（水）晴れ

埋め戻し完了。



### 3 発掘調査の成果

#### A 音乗谷古墳の現況 (Fig. 24)

墳丘北半は  
残存良好

音乗谷古墳は、昭和39年の分布調査の際には実は確認できなかったのだが、その後埴輪が発見され、古墳であることがはじめて明らかとなった。調査前は測量図に見るよう、北半で東西にやや円形の等高線がきれいに回るように見える箇所以外は、原形を留めておらず、後世の改変が著しいことが知られ、中でも南西からの墳丘の削り取りが大々的におこなわれている。

調査前の墳頂最高所のレベルは63.382mで、北東側の大きく削られた場所の外側の高まりは60.970m、南西側の削られずに残ったところで62.140mをはかる。したがって、側面より見ると、墳頂部の高まりは尾根の付け根側にそれほど低くならず、相当削平された姿に見える。

もちろん、この部分、すなわち古墳から続く南西側背後の丘陵との間に、古墳造営にともなうカットがなされていることは容易に想像された。調査前にはその削り出しの状況はわかりにくく、どちらかといえば円墳を思わせるような状況であった。西側の等高線の回り込みは標高60mのラインまでは何とか認められるが、東側ではほとんどわからない。かりに62mの等高線がもっとも内側に入り込むところをとると、墳形は長橢円形になってしまうため、調査による解明が強く期待された。

#### B 遺構 (Fig. 25、PL. 14-2～PL. 17)

発掘はすべて人力によった。検出された遺構はA区の掘割りと火を受けた土坑、墳丘と埋葬施設である。墳丘には埴輪を並べるが、葺石はない。以下、順に述べる。

##### (1) 掘割り (Fig. 26)

掘 割 り

はじめのテストピットの壺掘りによって埴輪が集中して出土したことから、それを順次広げていくと、古墳を背後の丘陵から切り離す掘割り状地形が明らかになった。この掘割りは上幅で約4m、下幅は長方形土坑のために掘りきれておらず正確にはわからないが、1m以上の比較的フラットな底をもっている。本古墳出土の埴輪の多くは下から2層目の暗黄褐色土層から出土した。

底は尾根線上が馬の背状にもっとも高く、X=30のY軸の通る位置では断面に掘割りは現れていない (Fig. 34)。そして、掘割りは円弧を描くのではなく、尾根筋に直交するように直線的に続いていることから、この掘割りが円墳を削り出したものではないことがわかる。

埴輪は特にA区H17やA区I17付近で掘割り内埋土の暗黄褐色土層からまとまって出土しており、その中でも馬形埴輪の残存率が良好であった。地形から見て、それらがもともとあった場所は狭い西側の尾根上というよりも古墳側と見た方が自然である。先にも述べたように古墳の南西側はひどく削り取られていて、本来の形はまったくわからない。しかし、掘割りから見つかった数多くの形象埴輪と掘割りの形状とを考えると、本墳には南西側に造り出し状の短い前方部があり、その上面に多数の形象埴輪が並べられていたと考えるのが妥当である。

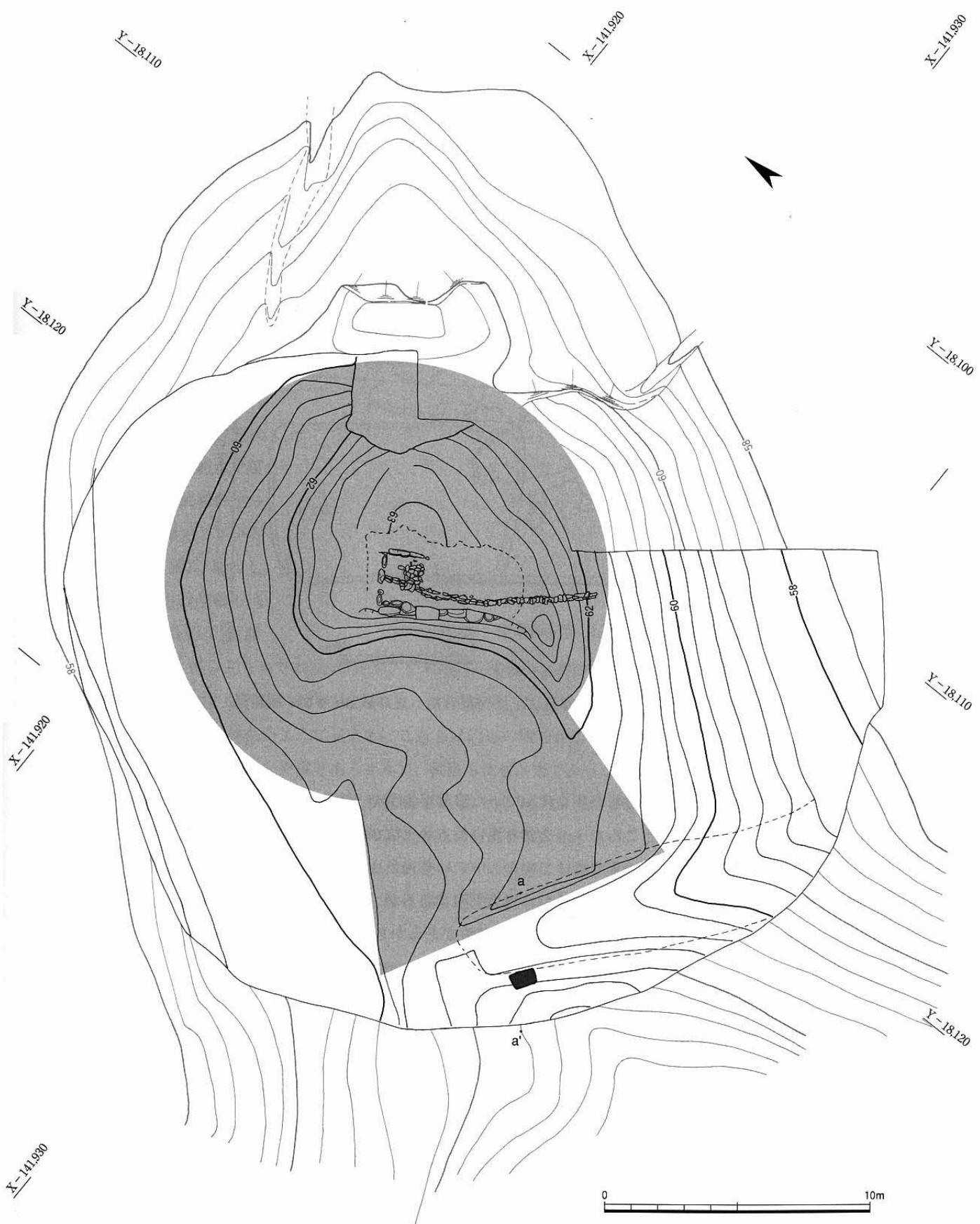


Fig. 25 音乗谷古墳 遺構配置図 1:200

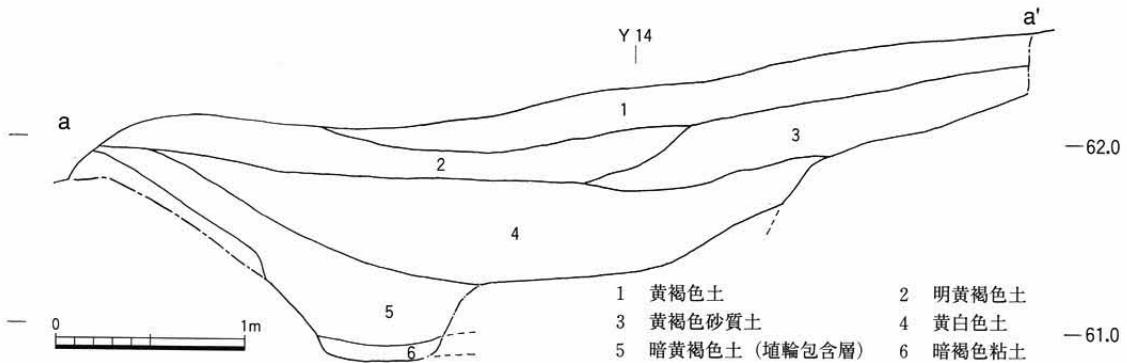


Fig. 26 音乗谷古墳 墓丘南側掘割り断面図 1:40

掘割りの底内側に前方部端を求める、北西の60mの等高線が後円部裾とほぼ重なると見て古墳を復元すると全長約22m、後円部径約17mの帆立貝形古墳あるいは造り出し付円墳と見ることができる(Fig. 25)。高さは残存部までで3.4mになる。

/X<sub>26</sub>

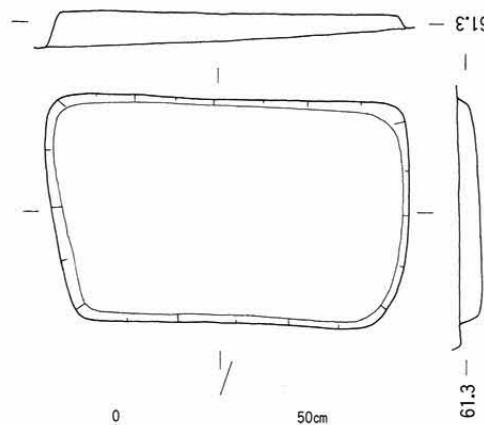


Fig. 27 音乗谷古墳 長方形土坑平面・断面図 1:20

### (2) 長方形土坑 (Fig. 27、PL. 15-2)

#### 焼けた土坑

ところで、掘割り中に、埴輪を多く含んでいた暗黄褐色土を上面から切り込んで、長軸95cm、短軸60cm、もっとも深いところで9cmを測る浅い長方形土坑が検出されている。壁が焼けており、とくに南西辺が厚さ3cmまで焼けていた。中には黄褐色土が詰まっていたが、平らな底の方には木炭が入っていた。出土遺物はなく用途不明であるが、層位から明らかに古墳築造後のものであることが知られる。火葬遺構などの可能性があるかもしれない。

### (3) 墓丘 (Fig. 28・29、PL. 15-3～4)

#### 短い前方部

崩落土を剥いだ結果、Fig. 25のように墓丘西側は比較的きれいに等高線が円形にめぐり、墓丘裾の削り出しの様子がはっきり確認できた。それによると、標高60mの等高線付近が墓丘裾となることが明らかである。その外側には掘割りはない。

しかし、南の掘割りがかなり高い位置で止まっているため、実際の墓丘裾は南に向かって徐々にレベルを上げていったと見られる。標高60.2mの等高線がくびれ部状の形状を見せており、そこから南が前方部と考えることができよう。その場合、前方部の長さは約6.5m、幅は約12mとなる。

埴輪は掘割り部分に続く平野部側東南斜面でも比較的多く出土している。しかし、それらは

いずれも原位置にあるものでない。ほぼ原位置で埴輪が検出できたのは、墳頂縁辺の2地点であった。そのうちもっとも良好なのは、C区のX 33、Y 33付近、公団杭F16-4-8のすぐ西で検出されたもので、円筒埴輪2本と玉杖形埴輪が絡んで墳丘上の黄褐色土中より出土している(Fig. 28)。検出した高さは埴輪の高いところで標高

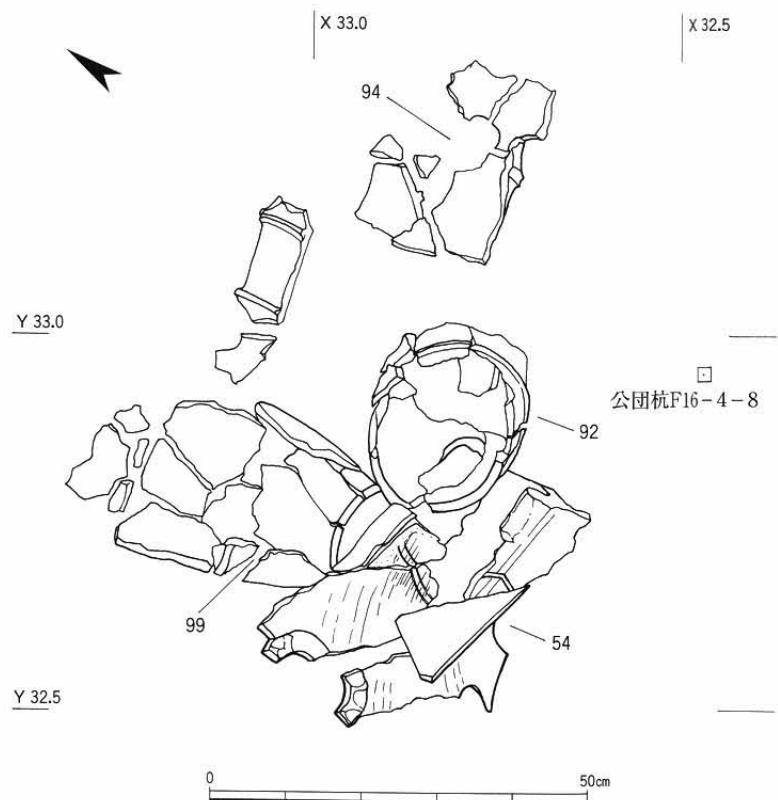


Fig. 28 音乗谷古墳 C区埴輪 1:10

62.8m、低いところで62.5mである。2本の円筒埴輪の基部が比較的よく残っていて、そのうちの1本(Fig. 55-92、PL. 34-92)は立った状態で出土しており、もう1本(Fig. 55-99、PL. 35-99)が外側に倒れたように見える。これらは円形の墳頂縁辺を取り巻くように配列された円筒埴輪列を構成していた隣りあう2本で、間隔も比較的密であったことがわかる。

これに覆い被さるように玉杖形埴輪(Fig. 49-54、PL. 29-54)が出土したが、破片の中に基部をまったく交えていないことからもとの樹立位置を推定しがたい。しかし、玉杖形埴輪の倒れ方から判断すれば、円筒埴輪列中、あるいはその内側にかなり間隔をあけながら樹立されていたであろうと思われる。いずれにしても墳頂に玉杖形埴輪が樹立されていたことが確実に知られる稀有な検出例といえる。

また、C区集中域で出土した円筒埴輪は後に述べるが、ヘラ記号、調整、形態などの比較から同一人が作ったと考えてほぼ間違いないものが多く含まれている。

C区ほど良好ではないが、D区においても比較的埴輪がまとまって出土したところがある(Fig. 29)。X 28、Y 35付近である。これは2本分の基部(Fig. 55-97・98、PL. 34-97)が埴輪列の関係を保ったまま墳丘裾側へ倒れた状態を見せており、それらのさらに外側に大きく動かされた埴輪が散らばって出土した(Fig. 55-93・95)。どの固体も残存率が高く、原位置をそれほど動いていないと見られるものの、基部の残る2個体も、本来これより少し南にずれたところにあったと思われる。検出した高さは62.1m~62.4mとC区に比べて若干低い。

ここで見つかった埴輪にもC区出土のものと同工のものがある。

これら墳頂の2地点がほぼ円筒埴輪列の位置をある程度留めているとすると、墳頂の平坦面

## C区埴輪

玉杖形埴輪  
墳頂出土

## D区埴輪

墳頂の円筒  
埴輪列

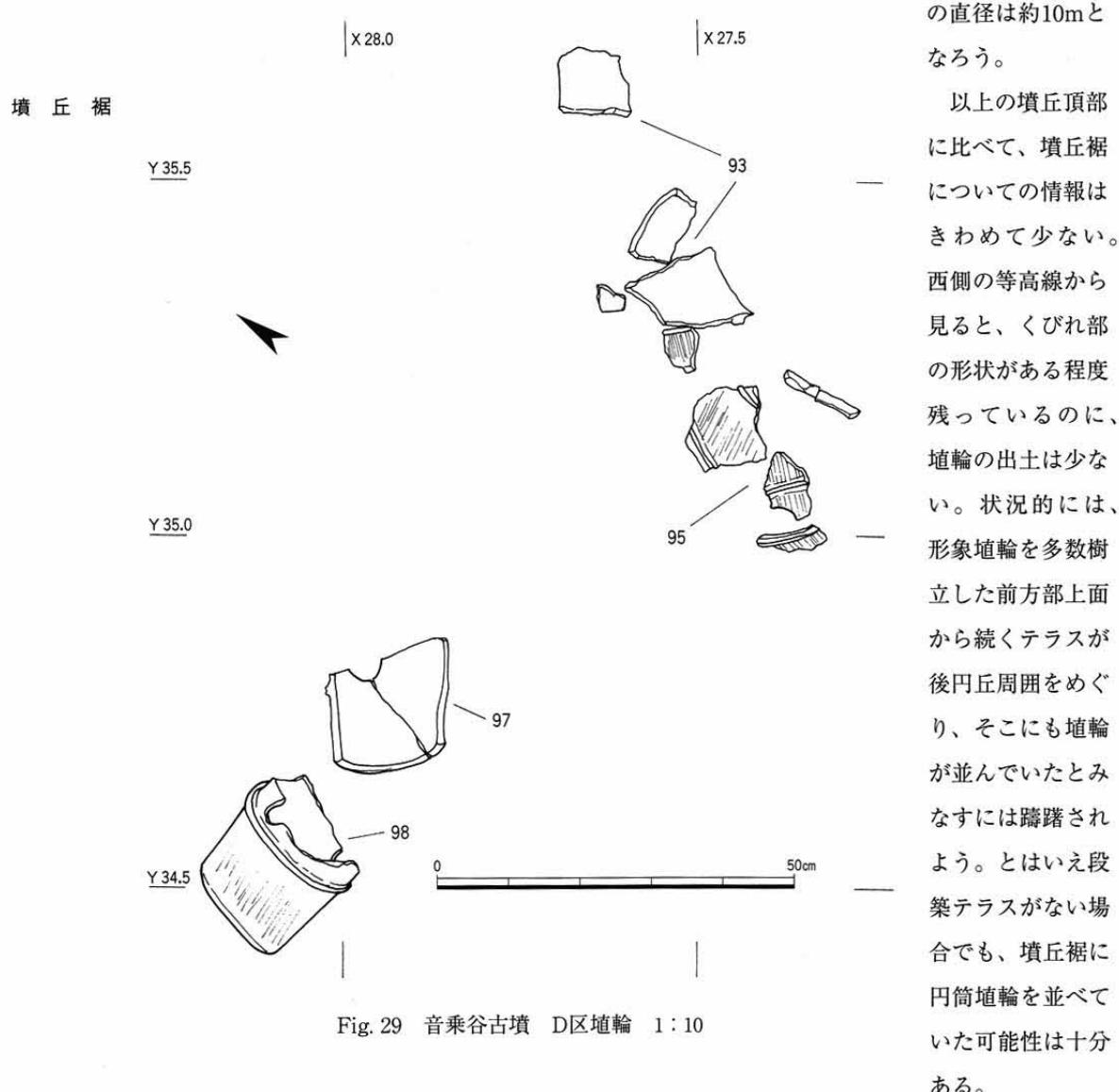


Fig. 29 音乘谷古墳 D区埴輪 1:10

の直径は約10mとなる。以上の墳丘頂部に比べて、墳丘裾についての情報はきわめて少ない。西側の等高線から見ると、くびれ部の形状がある程度残っているのに、埴輪の出土は少ない。状況的には、形象埴輪を多数樹立した前方部上面から続くテラスが後円丘周囲をめぐり、そこにも埴輪が並んでいたとみなすには躊躇される。とはいへ段築テラスがない場合でも、墳丘裾に円筒埴輪を並べていた可能性は十分ある。

#### (4) 埋葬施設の調査

##### ① 石室 (Fig. 30, PL. 16)

**破壊された石室** 表土を剥いでいくと、長軸約3.0m、短軸約1.5mの範囲で粘土が不整長方形に取り囲んでいる範囲がみつかった。これは石材の抜き取り後に残った裏込め土が残存したものであるが、発掘初期の段階では個々の石材の痕跡はみつけられていない。その内部には褐色土、そして粘土の順で摺鉢状の堆積が見られ、褐色土の中から花崗岩の礫多数が須恵器や埴輪の破片とともに出土した。このような所見より、早いうちから石室であったことが予測された。

これらの攪乱土や花崗岩を取り除いたところ、3cm大の礫を敷き詰めた床面が北西側で1mほどの広がりをもって現れた。これが本来の埋葬施設の残存部分であり、それ以外の部分は礫敷面より下にまで攪乱が及んでいた。

この礫敷面のあいまに拳大の平たい石がいくつか見えるが、調査を進める中で小円礫を取り除いたところ、その下にも平たい石が広がっていることがわかった。おそらく全面がこの2層

構造の床面であつたと思われる。ただし、後述するように本古墳では追葬があった可能性もあるから、小円礫は追葬の段階で敷き直したものかもしれない。いくつかの遺物はこの礫敷の目地から出土している。

石室壁体については床面検出時の認識が甘く、石材の残存や抜き取り跡をみつけたのは排水溝の検出時であった。残っていた石材は奥壁寄りに長さ60cm~80cmのものが認められるほかは、ほとんどすべて抜かれていた。しかし、それらの抜き取り跡から見ると、いずれも長くとも80cm、

幅が15cmないし20cmほどの厚みのない石材を多数用いて築造したものであったことがわかる。裏込めの控えも深くない。これは定型的な畿内の横穴式石室には見られない特質である。むしろ竪穴系の石室と見た方が妥当にも思えるが、追葬の状況を考えるとやはり横穴式石室に属するものであったとみなさざるをえない。

## ② 排水溝 (Fig. 31・32, PL. 16-3・4)

奥壁からくの字に緩やかに湾曲しながら南東方向へ排水溝が延びている。全長8mほど伸び、排水溝の先は途切れているが、地形の状態からすると本来そのくらいで墳丘東南斜面に開口したであろうと考えられる。末端は墳丘想定範囲端にほぼ一致している (Fig. 25)。

排水溝の構造は、掘形がみつけにくかったが、溝を灰色粘土の地山に掘って、その中に底石を置かず、薄くて細長い石を2列に立て並べ、そこを水が流れるようにしてある。注意される

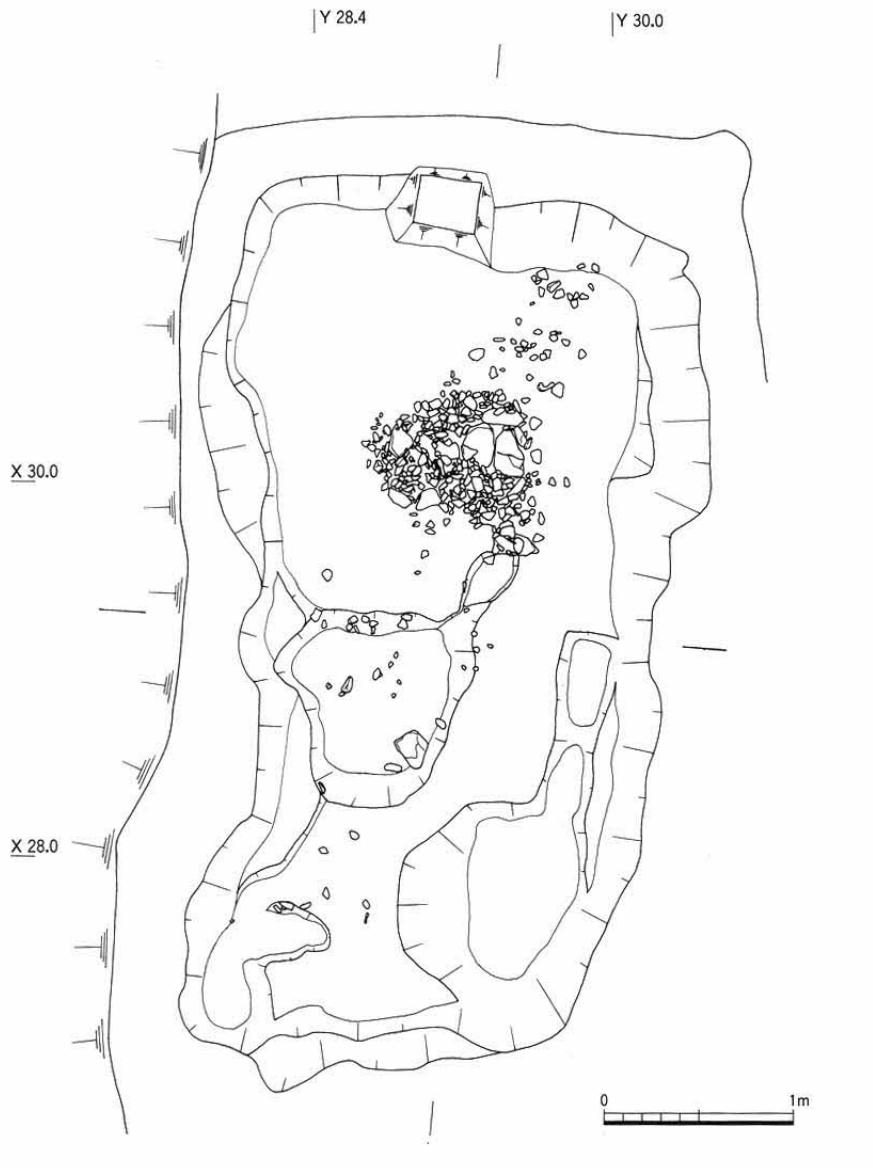


Fig. 30 音乘谷古墳 石室床面検出状況 1:40

小さい石材

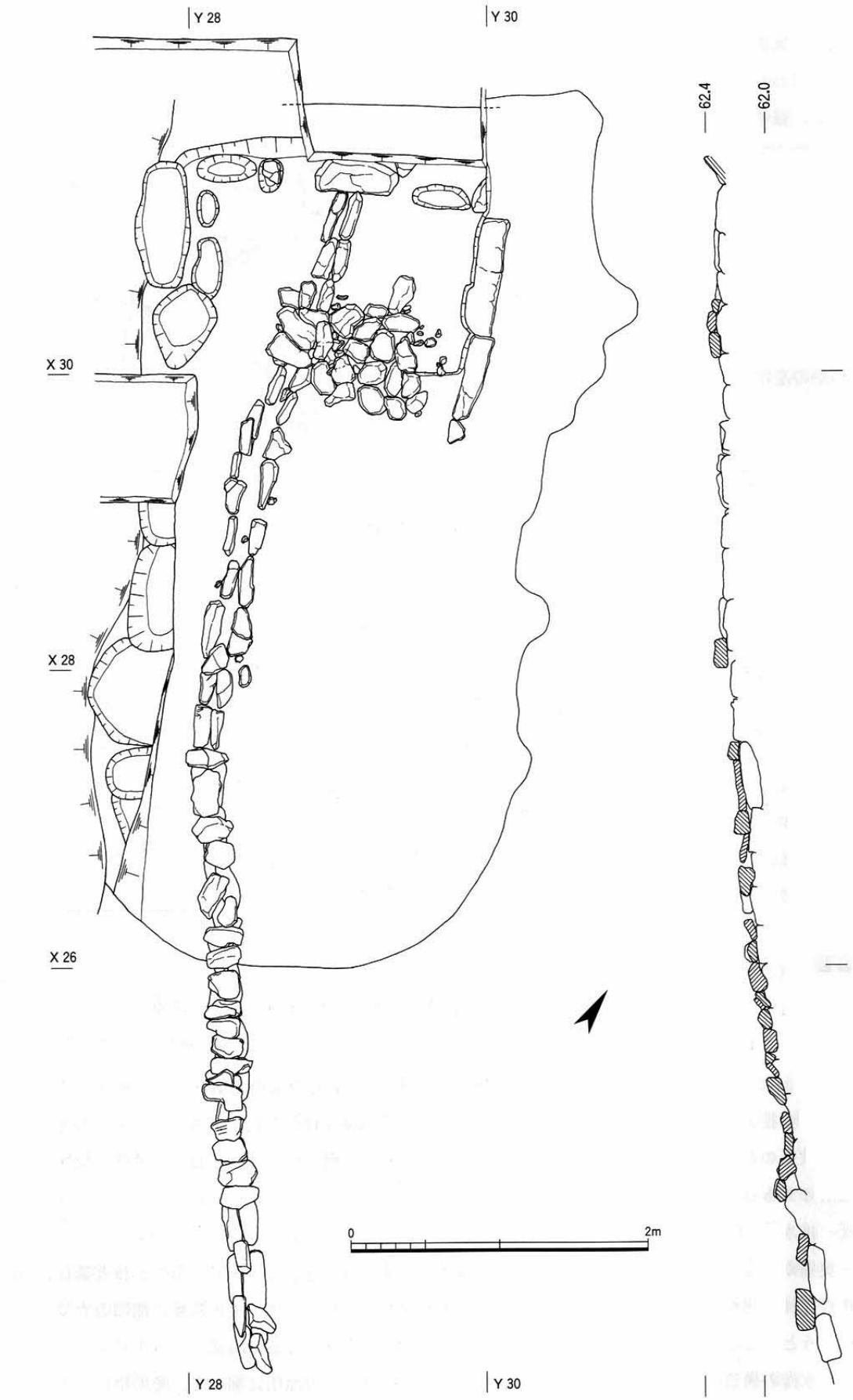


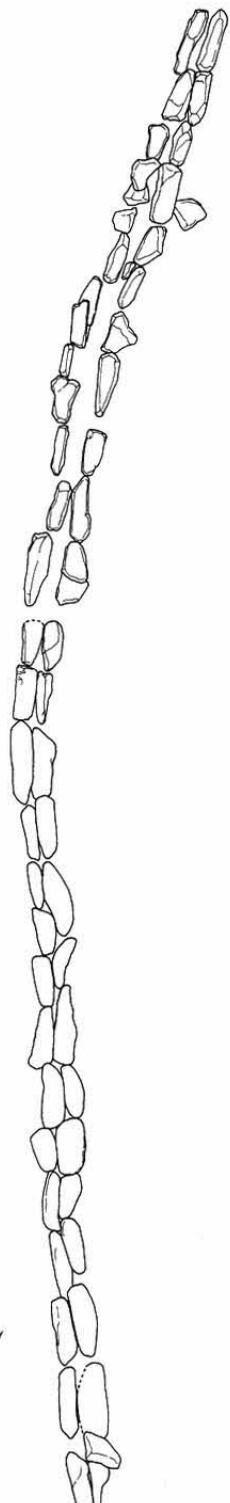
Fig. 31 音乘谷古墳 石室排水溝平面・断面図 1:40

Y 28 Y 29

X 30

X 28

X 26



のが排水溝の蓋石の残り方である。奥壁から3.8mのところから南は平たい石で門構えのように覆うのだが、それより北西側はそれが見られない。先に述べたように、蓋石と一体化した石室底面の平たい石が小円礫とともに、盗掘の際に剥がされた結果とみられよう。排水溝の蓋石のない範囲が本来の石室内部と見られるのである。

よく見ると、蓋石の途切れるところで排水溝が屈折していることがわかり、石室の南壁はちょうどその位置にあたると推察できるのである。また、傾斜もほぼこの位置で石室内の緩やかな傾斜が角度をもって降下するものになる。これにより石室の長さは内法で3.7m、奥壁沿いでの幅は1.7mという数値が求められる。

### ③ 副葬品の出土状況 (Fig. 33)

主体部関係の遺物のほとんどが、盗掘坑の埋土の中から出土している。図にはレベルは無視してそれらの平面的な分布状況を示した。

これらのうち、床面の礫面上で出土したものだけがもともとの位置を保っている可能性があるが、それらにしても追葬や盗掘などによって動かされている可能性を否定できない。なお、須恵器片については遺憾ながら出土後、整理途中の混乱により厳密な位置の特定ができなくなった。

礫残存部で目立つのが辻金具の各部破片と鉄鎌である。このうち、辻金具に組み合う馬具関係遺物が南にそれほど離れず出土しているので、東側側壁付近に馬具を置いていた可能性がある。また、管玉の出土しているのが、奥壁に接する東側壁際であることは、被葬者が奥壁に頭を向けた姿勢で埋葬されていたか、奥壁に沿って東側に頭を置いて埋葬されていたかのいずれかであることを推測させる。そして先に復元した石室幅が1.7mであることからすると、遺体は奥壁に頭を向けて埋葬されたと考えた方がよいであろう。

なお、副葬遺物には棺釘や鎌はまったく認められないでの、それらを使わない棺が用いられたと思われる。また、刀剣類、工具類も、鉄鎌と同様に各所から出土していてもとの位置を知りえない。

石室南壁

底面上遺物

被葬者頭位

Fig. 32 音乗谷古墳 排水溝蓋石除去後 1:40

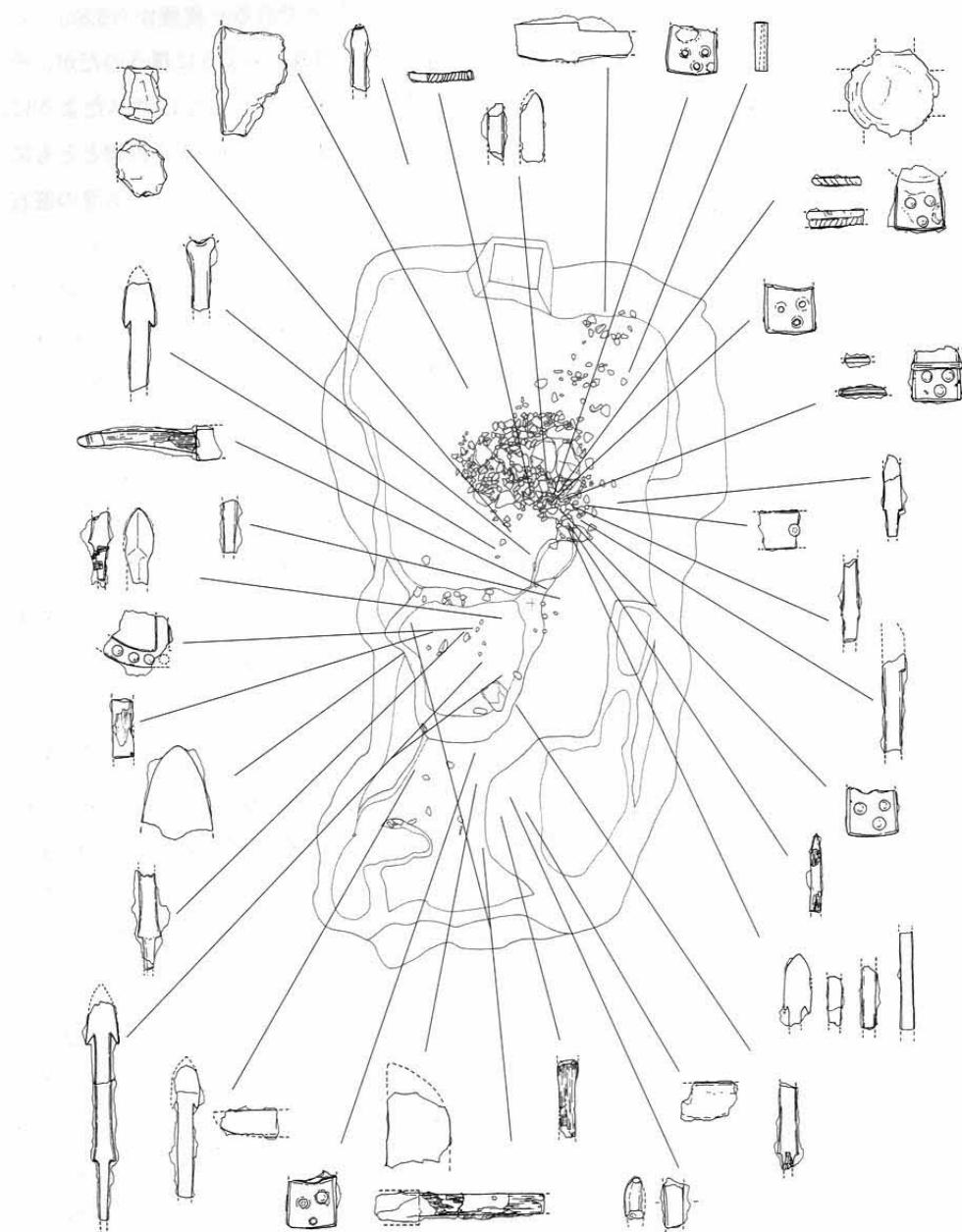


Fig. 33 音乗谷古墳 石室内副葬品出土位置図（遺構1：50 遺物1：3）

## ④埋葬施設の推定 (Fig. 34)

墳頂埴輪列  
の低さ

先に述べた墳頂の円筒埴輪列の検出高は62.5m前後であった。すると、石室床面のレベルが62.3~62.4mくらいであることはどのように考えられるだろうか。

もし、前者が古墳築造時の墳頂埴輪列の姿をよく留めているとすると、このレベルの近さは、そこに十分な高さをもった横穴式石室が存在していたことを想定できる余地を失わせる。その意味で、からうじて残っている石室石材はいずれも小ぶりのものを横長に使ったものであり、いわゆる通有の横穴式石室に見られる構造と異なることと相通じる。そして、すでに述べた墓壙が排水溝方向においても閉じていることなどを考え合わせると、堅穴式ないし堅穴系の埋葬

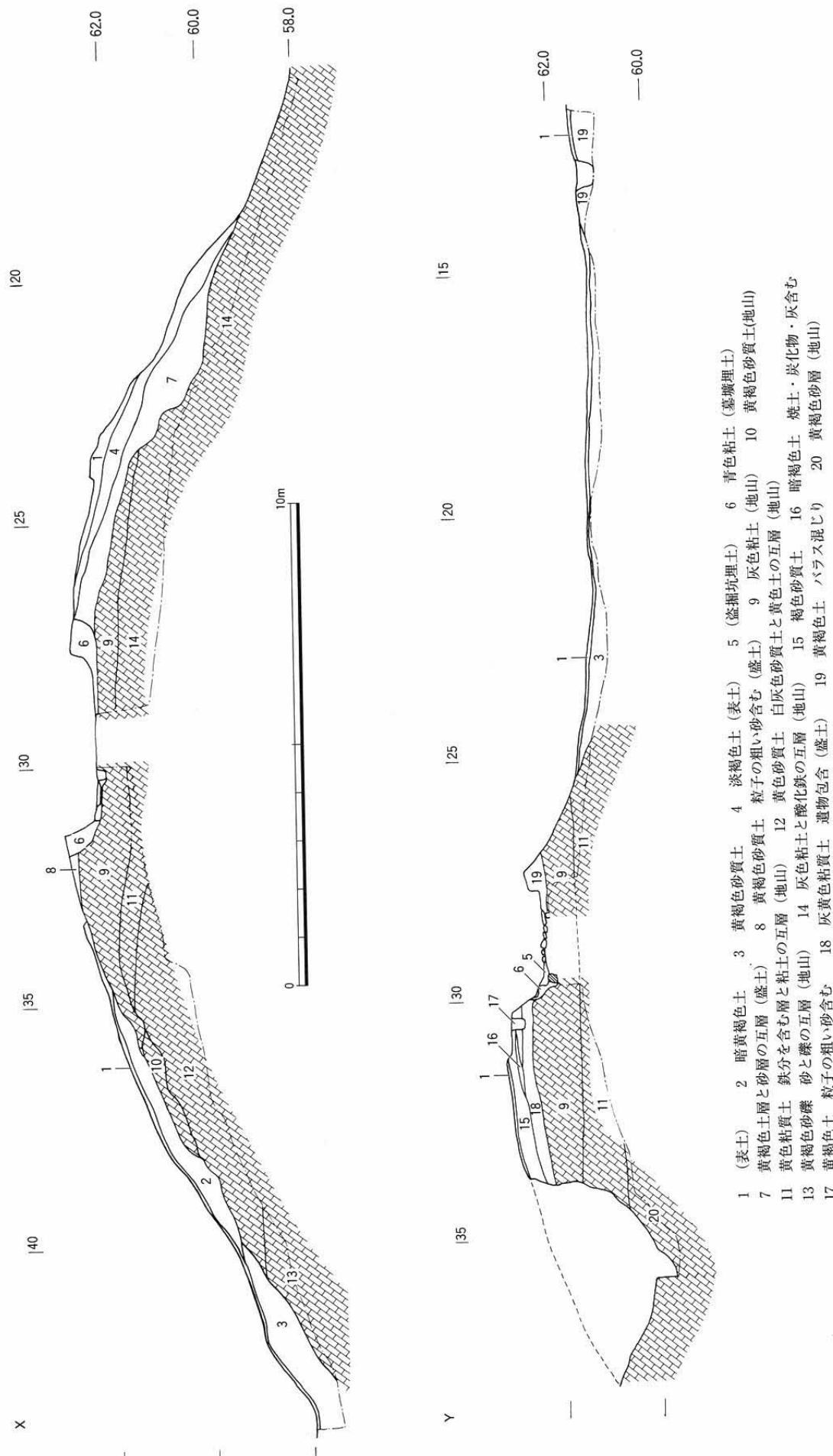


Fig. 34 音乗谷古墳 墳丘断面図 1:120

施設を強く推定させる。

厳密に調査した範囲内で墓壙がどのレベルから切り込まれたかについては確定できないが、墳丘断面図にあるように盛土をある程度盛った段階に墓壙が掘削されていることがわかる。なお、断面図に見るように基底石を据えるところはさらに1段深く掘り下げている（6層）。

しかし、このように理解したとしても、削平されている石室高を数十cm、さらにそれを覆う盛土をさらに数十cmとすると、やはり本来の墳頂は埴輪検出面より1m前後は高くなくてはならない。直径10m前後の墳頂で石室上方と埴輪列の間にこの比高を解消することは特異な壇構造を想定しない限ります不可能であろう。

いっぽう、埴輪列は中間段に並べられたものだったとすることも、全体の墳丘形態から見て不可能である。

しかし、後述の須恵器に新旧の2時期に大別されるものがあることは確実である。新しい須恵器の混在は、横穴式石室への追葬を想定させ、底面の二重の疊敷があったことが思い起こされる。上の考察から、堅固で高さのある石室が存在したとは考えられないが、丈が低いとはいえ横から出入りすることの可能な石室が築かれていたと想定しておきたい。

排水溝が整っていることからしても、横穴式石室の1種であったと思われ、羨道ないし墓道は南東に段をもって上がっていくようなものであったと考えたい。

総じて音乗谷古墳は小丘陵の自然地形を利用して、少ない切土と盛土によって墳丘を完成させた古墳であったと評価できる。南掘割りを掘削した際の土は主として前方部の成形に用いられたのであろう。

## C 出土遺物 (Fig. 35~60、PL. 18~38)

出土した遺物には、埴輪と副葬品として納められた須恵器や金属器、玉類がある。

### (1) 墓 輪

#### ①形象埴輪

**馬形埴輪 1** (Fig. 35~37、PL. 18~20) 1は本古墳でもっとも注目される馬形埴輪である。完形に復元でき、全長97.5cm、全高59.1cmを計る。全体的には通有の飾り馬に見えるが、鎧の表現がなく、そのかわり右体側に限って板状の足掛け装置が表現されているのが大きな特徴である。  
横坐り馬

音乗谷古墳から出土した形象埴輪のうちもっとも残りのよいもので、A区の掘割りの中から出土した。復元にあたっては、できるだけ接合関係を確かめながら位置を決めていったが、左後脚を除く脚3本と尻尾、それに顔については厳密には胴本体にはつながっていない。また、脚の長さも推定である。首の立ち上がり角度が緩く、かつ顔の側面が大きいため、側面観は猪にも似た印象を与えていた。いっぽう、胴部はかなり長く造形の巧みさを感じさせる。

馬装は、面繫と尻繫からなり、胸繫はない。面繫は先端にf字形鏡板を付けるものである。馬装表現低いが幅の広い帯を鼻の上と目の後ろに回して、それを耳の後ろから延びる帯に伏鉢形辻金具を使って固定している。このうち、目の側の辻金具は責金具まで表現してある。また、f字形鏡板は頭部左側に付けられるものの一部分が残っていただけだが、頭部右側にも剥離した痕跡が残っている。鏡板の残存部から、それが周縁を1段厚くしてそこに密に粘土粒を貼り付けて鏡を表現した写実的なものであったことが知られる。

このf字形鏡板に取り付く手綱はほとんどわむことなくタテガミと鞍の前輪が接するところまで延びている。その断面形は三繫の帯とは区別され、細くて高さがある。タテガミは前輪上端に弧を描いて収束してくることがわかるが、前方の形状はわからない。また、前輪上端から再び跳ね上がるよう見えるのは、手綱の延長表現があったことを示すのだろう。

鞍の前輪、後輪は相似形で、後輪の方がやや大きく作られている。側面が垂直に立ち、弧状の上縁との境が角をもつ。その表裏には鞍金具その他の装飾を何ら付けない。

騎乗する部分は粘土を厚く貼り足して鞍襍を表しているが、下縁は前輪、後輪の下端とほぼ同じ位置までしか及ばない。この右側の鞍襍の下から2本の吊紐が垂れ、それに下げられる形で足掛け板が表現されている (PL. 20-左下)。本個体はその板の表現は突帶状に退化しており、足掛け板本来の形状からかなりデフォルメされていると判断できる。なお、本例は左体側を大きく失っているが、鞍襍の剥離部分から下に続く部分に同種の足掛け装置がないことは明らかである。この足掛け装置が載っているのが障泥であり、馬の体側のもっとも横に張り出たところから下向きに板状の粘土を貼り付けて表現している。前方は馬の前脚の後方に当てて接着を強化しているのに対して、後方は隅を四角く欠いた形で後脚から離れて作られている。

尻繫は背中の中央に載せられた雲珠を中心に展開し、幅のある突帶で表現されている (PL. 20-上)。雲珠は12脚のようであるが、多くの脚が剥離しており、正確にはわからない。後輪の付け根から雲珠へと延びた2条の帯は、本来は別の帯であるはずの尻尾の下を回りこむ長い帯と一連で作られている。杏葉は雲珠の左右および後方に計3個吊り下げられている。

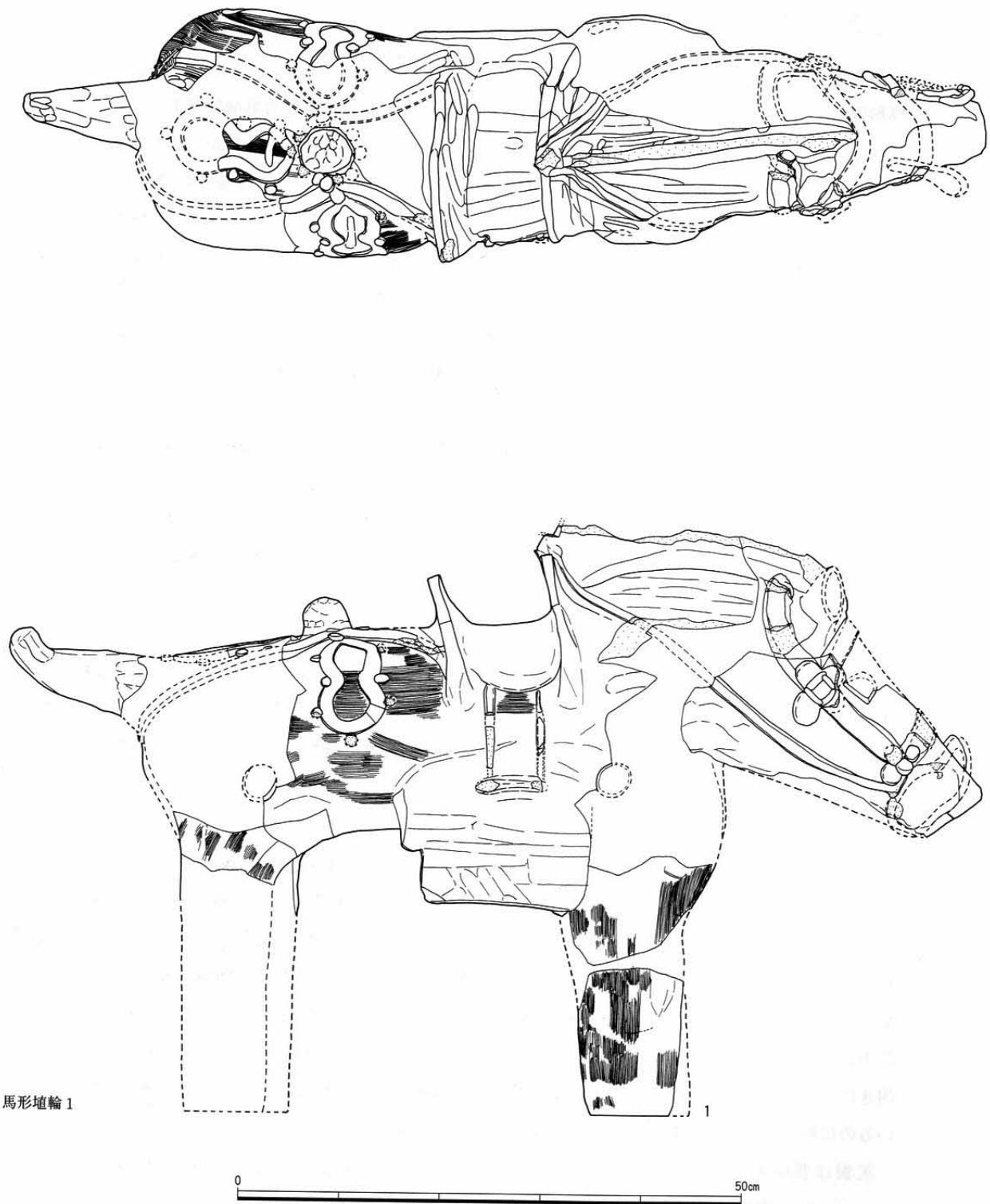


Fig. 35 音乘谷古墳 馬形埴輪 (1) 1:6

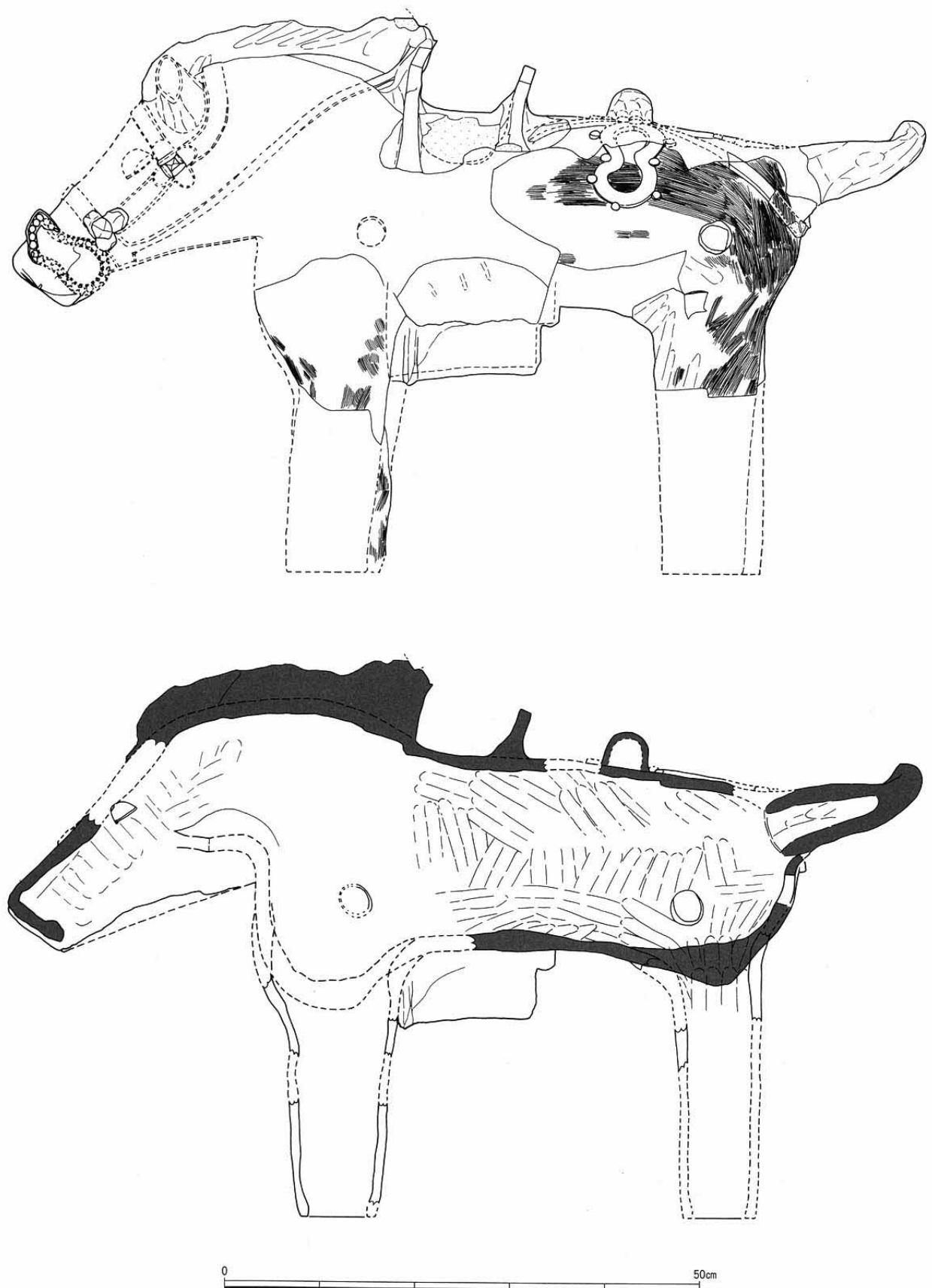


Fig. 36 音乗谷古墳 馬形埴輪 (2) 1:6

## 成形方法

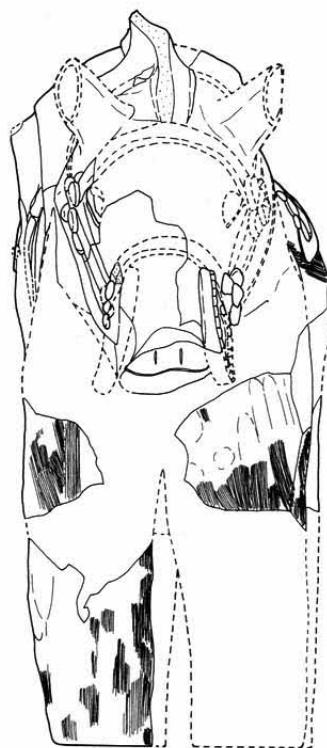


Fig. 37 音乗谷古墳 馬形埴輪 (3)  
1 : 6

雲珠は伏鉢を有する型式を中空の半球形粘土を貼り付けることで表現し、脚はボタン状の粘土を貼り付けるだけで表している。杏葉は瓢箪形の輪郭を粘土紐で表し、周囲に計7個のボタン状粘土を配したものである。ボタン状粘土が紐の上部でなく輪郭に接して貼り付けられていることから、これは鈴を表現したものであり、瓢箪形も本来剣菱形杏葉の表現であったと思われる。埴輪の表現だけからすると、垂下のための革帶ではなく、雲珠脚に直接取り付けてい見えるよう見える。

尻尾は先端を小さく上に折り返す表現となっているだけである。中空に作り、基部を柄状に尻に差し込むように固定している。

脚は粘土紐の積み上げで成形したもので、後ろ左脚付け根に見る擬口縁状の部分 (PL. 20-右下) から見ると、まず脚を4本作っておいてから胴部をその間に渡すように作っていたことが知られる。胴部を渡す前に前後2本ずつ股間で固定する作業がおこなわれたことが窺える。胴部は内面に何ら成形の痕跡が残らないほど、丁寧にナデを施して

あり、成形の具体的な手順についてはわからない。ただし、下部は縦方向のナデが顕著なので、両足付け根から徐々に中央に向かって腹部を延ばしていったことが想像でき、それより上位はナデが垂直に近くなるので今度は横方向に積み上げていって、その後ナデの方向から判断して背は尻側から閉じていったものと思われる。

その過程で尻尾が取り付けられる最後部は円形に開放された状態にしておき、背部完成後、尻尾付け根を差し込むようにして塞いだのであろう。

首側は背部と同時に胸を上に延ばしていき、下から40cmほどのところで、前方へ折り曲げて15cmほど水平に延ばし、その両側面を頭部の接合に使用している。

## 頭部の固定

頭部は内面に鼻筋方向に直交するナデが明瞭に残っていることから、粘土紐を重ねて板状にしたものをU字形に折り曲げて顔の大枠を作りそれを首と胸延長部に固定するように作っているものと思われる。鼻先の部分は粘土板で塞ぐようにして作られている。このような成形のために、頭部の下面是開放されたままになっている。

こうして全体を成形した後、馬装やタテガミ、あるいは耳や目の表現を加えたと見られる。目は削り抜きによる表現で、右目の下半分のみ残る。鼻の穴と口はヘラで線を刻むだけである。なお、脚上部の胴部側面に開けられた4個の円形透かしや尻尾の下の小さい透かしはいつ開けられて、何に用いられたかはわからない。

最終的な調整は、脚部や胴部にはよくハケメが残っているが、主として鞍の部分や障泥、あるいは背や頭部はナデが丁寧に施されている。焼成は堅緻なところと甘いところがともにあり、色調はややピンクがかったベージュ色である。赤色顔料は塗布されていないと判断する。

**馬形埴輪 2** (Fig. 38・39, PL. 21-上) 鞍の表現をもちながら、三輪構造を備えておらず、手綱のみ表現した馬である。脚部は同定できるものがなく、頭部もほとんど残っていなかったが、胴部が比較的残っていたために復元した。全長95.7cm、全高69.5cmである。

手綱と鞍の  
みの馬

胴部は馬形埴輪1や馬形埴輪3とは異なり腹側が四角く張る特徴がある。その分、胴部の断面はつぶれた感じになる。胴部の外表は側面に目の粗い横方向のハケメが残るが、腹部と背面は丁寧に横方向のナデが施されている。その上に鞍の前輪と後輪が直接取り付けられている。ともに側面が垂直で、上方の輪郭との間に角をもつ。胴部体側には馬形埴輪1同様、円孔が左右2個ずつ開けられていることがからうじてわかる。タテガミは半月形の形状で、後方の先端は鞍には届かず首に収束する。タテガミ前端の形状についてはまったくわからない。

頭部の成形は、馬形埴輪1同様、胸の上部を延長した部分を頸の内側に当てるようにして固定している(PL. 23-右下)。その状態を見やすいように頭部の半分は復元していない。頸は表側に段をつけて強調してある。頭部及びタテガミはユビナデによる丁寧な仕上げとなっている。

この頭部に見られる馬装は、鞍を除くと手綱が1条残るだけである。手綱の断面形は台形で

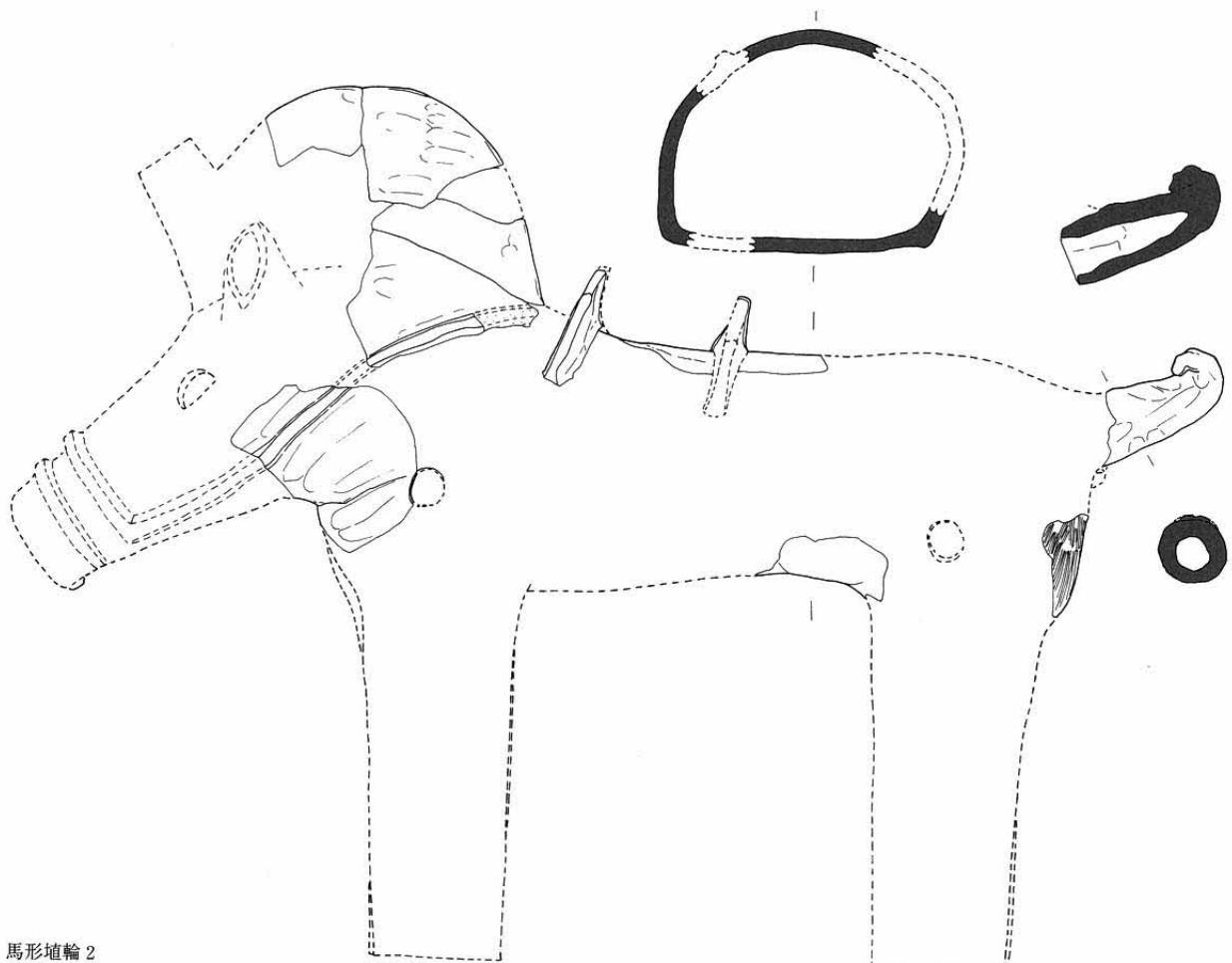


Fig. 38 音乗谷古墳 馬形埴輪 (4) 1:6

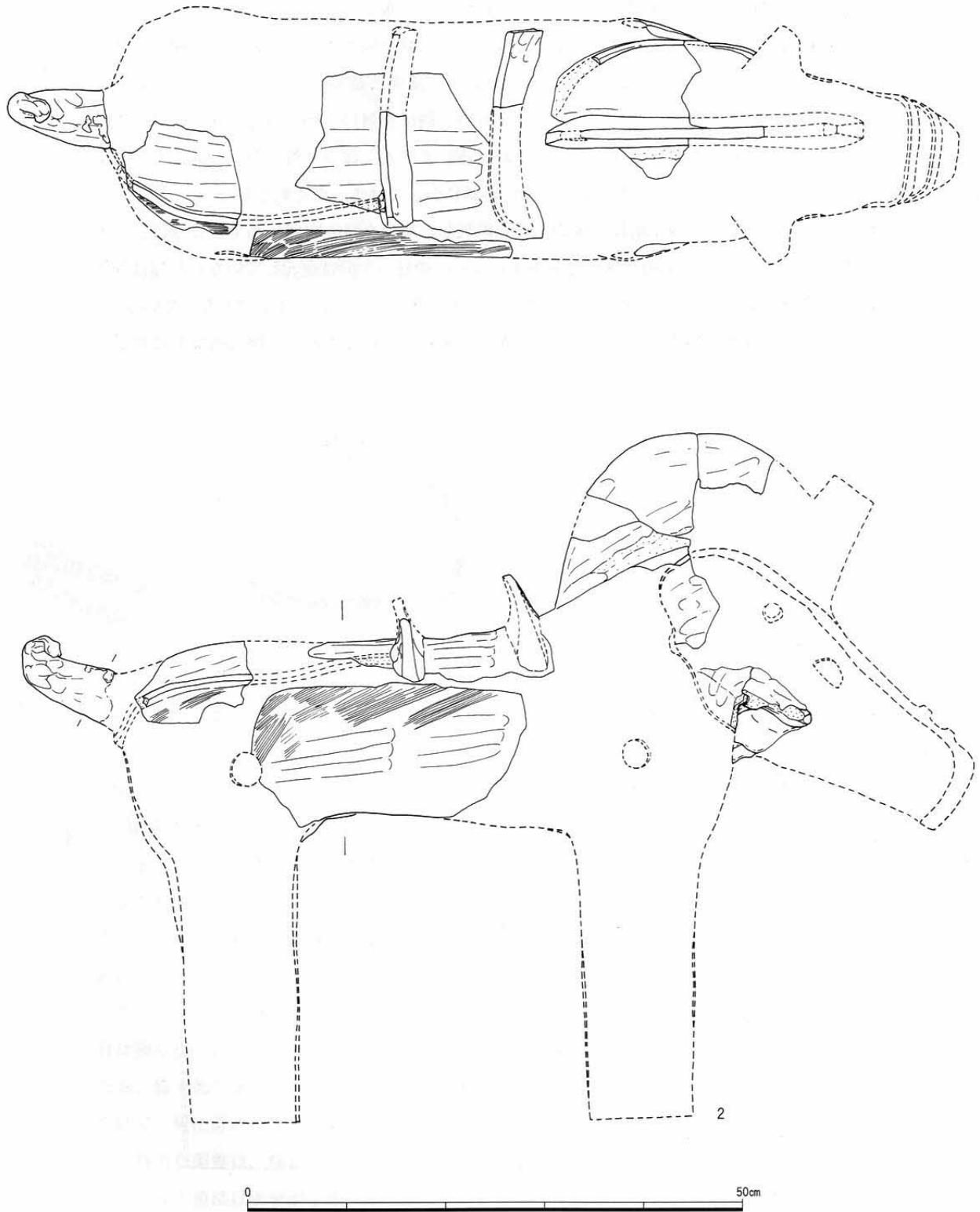


Fig. 39 音乘谷古墳 馬形埴輪 (5) 1:6

比較的細く作られている。口元の構造は馬形埴輪3をもとに復元したが、手綱はそこから左側面を前輪中央に向かって延び、さらにその延長が鞍を越えたところから再び始まり、胴部右側上面を通って尻尾の下へと回りこんで止まるかたちに復元できる。鞍の前輪と後輪の間には何も表現されていない。

尻尾は、馬形埴輪1同様、先端のみ折り返した中空の作りで、やはり柄状にした基部を差し込んで胴部に固定している。

色調は白っぽいベージュ色で、焼成はやや甘い。

**馬形埴輪3** (Fig. 40・41, PL. 21-下) 鞍の表現はないが、馬形埴輪2と同様に左口元から後方に向かって手綱が1本延びている馬である。やはり脚部の遺存度は悪く、すべて復元である。これに対して、胴部上半の残りは比較的よい。ただし、タテガミは残っていない。復元した部分をすべて含め全長は97.0cm、全高は67.7cmを計る。

手綱の馬  
のみ

頭部は左側面がほぼ残っており、手綱とそれを止めるための2条の帯が表現されている。手綱と口元の帯とは直接つながったように表現され、鏡板や轡に似た特別な構造を要さなかったことが知られる。結びつける程度だった構造を反映しているのだろうか。

この頭部はほかの馬形埴輪と比べてやや細長く作られているが、これも下面が開放されるように背と胸の延長に固定し、鼻先だけ塞ぐというものになっている。目は輪郭が少し盛り上がるようすに削り抜いたあとで整えられているが、鼻の穴と口はへらで刻むだけの表現である。口の切り込みはしっかりと側面にまで及んでいる。また、頸の部分が立体的に表現されており、以上の特色から馬形埴輪3の顔のつくりは総じて写実的であると言えよう。

手綱は頭部左側面から背中を斜めに横切り尻の右側へ及ぶもので、断面は方形に近い。鞍がない分、背を通して手綱が右後方まで途切れずに表現されている。

胴部は残存部から考えると、かなり長くなると思われる。全体に表面の肌荒れが目立つが、頭部は丁寧なナデによって仕上げられているのに対して、胴部は尻にかけて横方向のハケメが顕著に残っていることが指摘できる。体側の円孔は残っていない。

最も豪華な馬

色調は黄味を帯びたベージュ色で、焼成は甘い。

**馬形埴輪4** (Fig. 42・43-14・15, PL. 22) 馬形埴輪1と並ぶ飾り馬である。A区の掘割りから各部の破片が比較的まとまって出土したが、完形に復元するには躊躇された。

頭部付近の破片を図上で合成し、頭部右側面を作ったものがFig. 42-4である。タテガミは断面がT字形になるように端部の両側に粘土を貼り足して作られ、両側面には線刻を密に施してある。そして、先端には大きく棒状に束ねた表現が付くことが知られる。

4以外に頭絡を残す破片を2点図示した。これらはいずれも左側面の破片と思われる。5は手綱と面繫の表現であり、すぐ左側に鏡板が接続するものと思われる。6は左側面の目元付近の面繫と見られる。それには直交する頭絡が辻金具で留められている様子が写されているが、辻金具の伏鉢部と脚部の間に責金具を表す細い粘土紐を付けてあることがわかる。轡や鏡板の特徴はよくわからないが、1に劣らず写実的な表現が採られていることが知られよう。ただし、面繫の帶は手綱とあまり差がないように見える。

この馬にもなう鞍は、断片が残るだけで全形は推測しにくい。鞍橋の7は前輪か後輪かわからぬが1.2cmの厚みをもち、弧状の上縁が比較的スムーズに側縁へと移ることがわかる。い

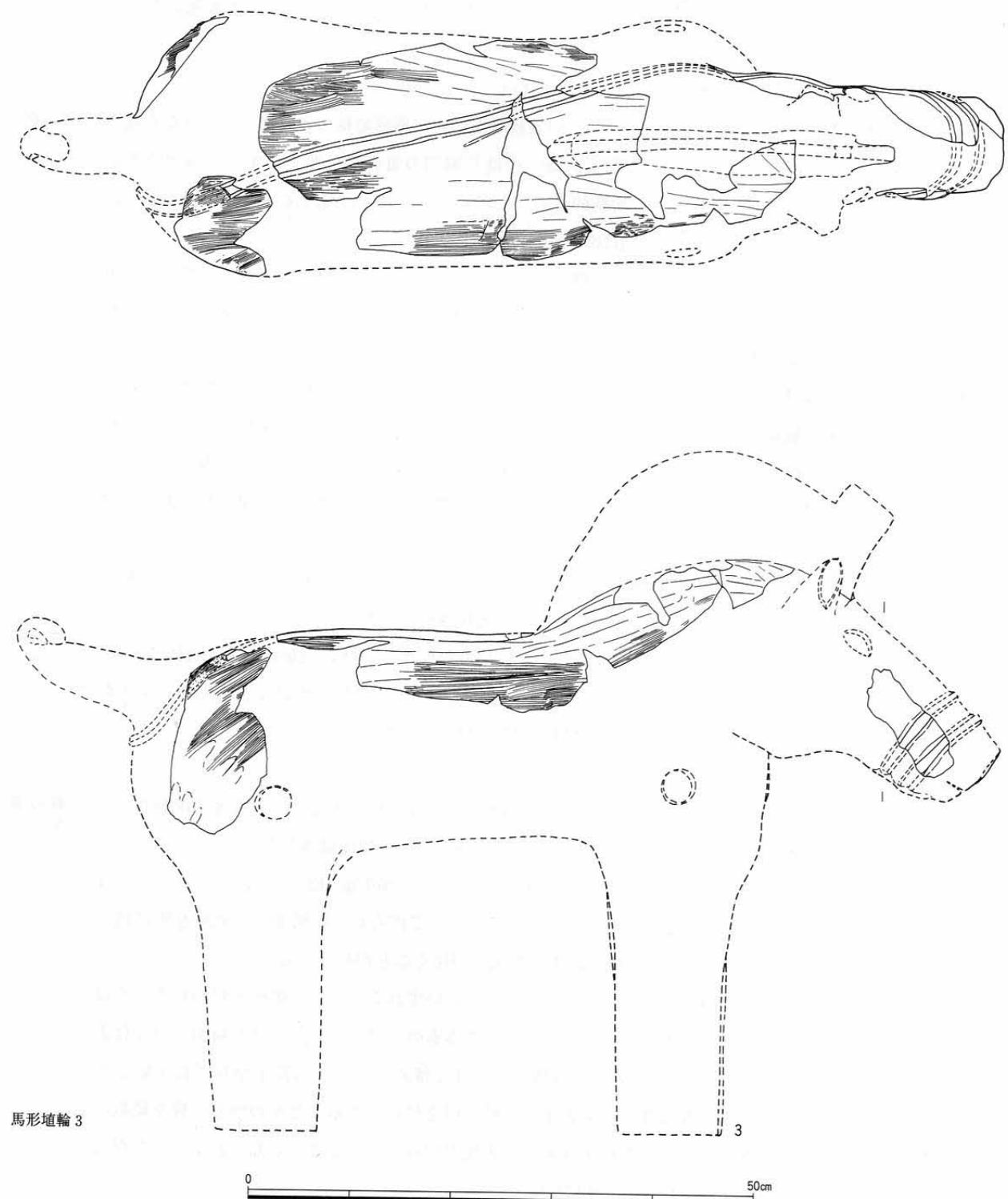


Fig. 40 音乘谷古墳 馬形埴輪 (6) 1:6

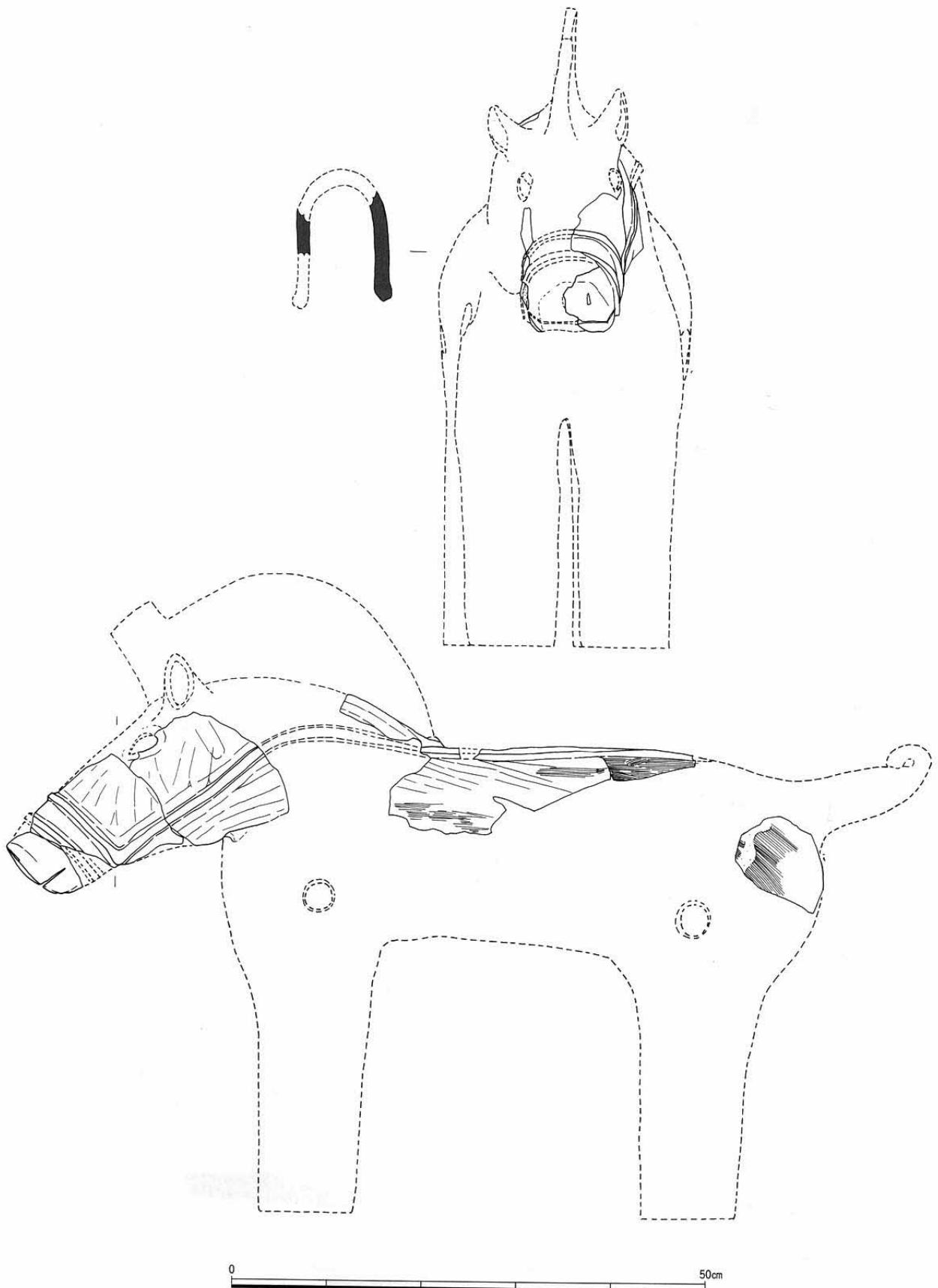


Fig. 41 音乘谷古墳 馬形埴輪 (7) 1:6

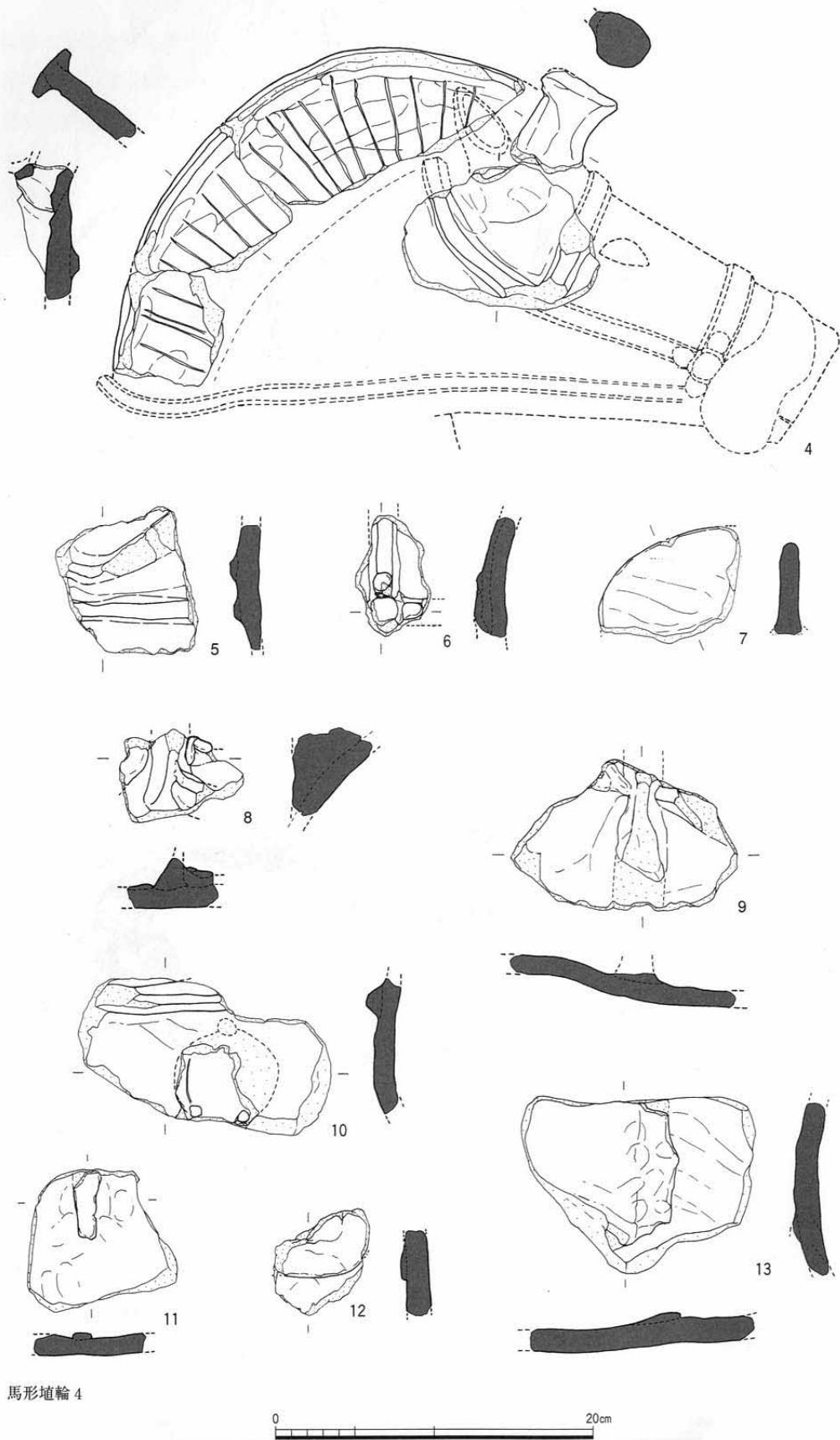
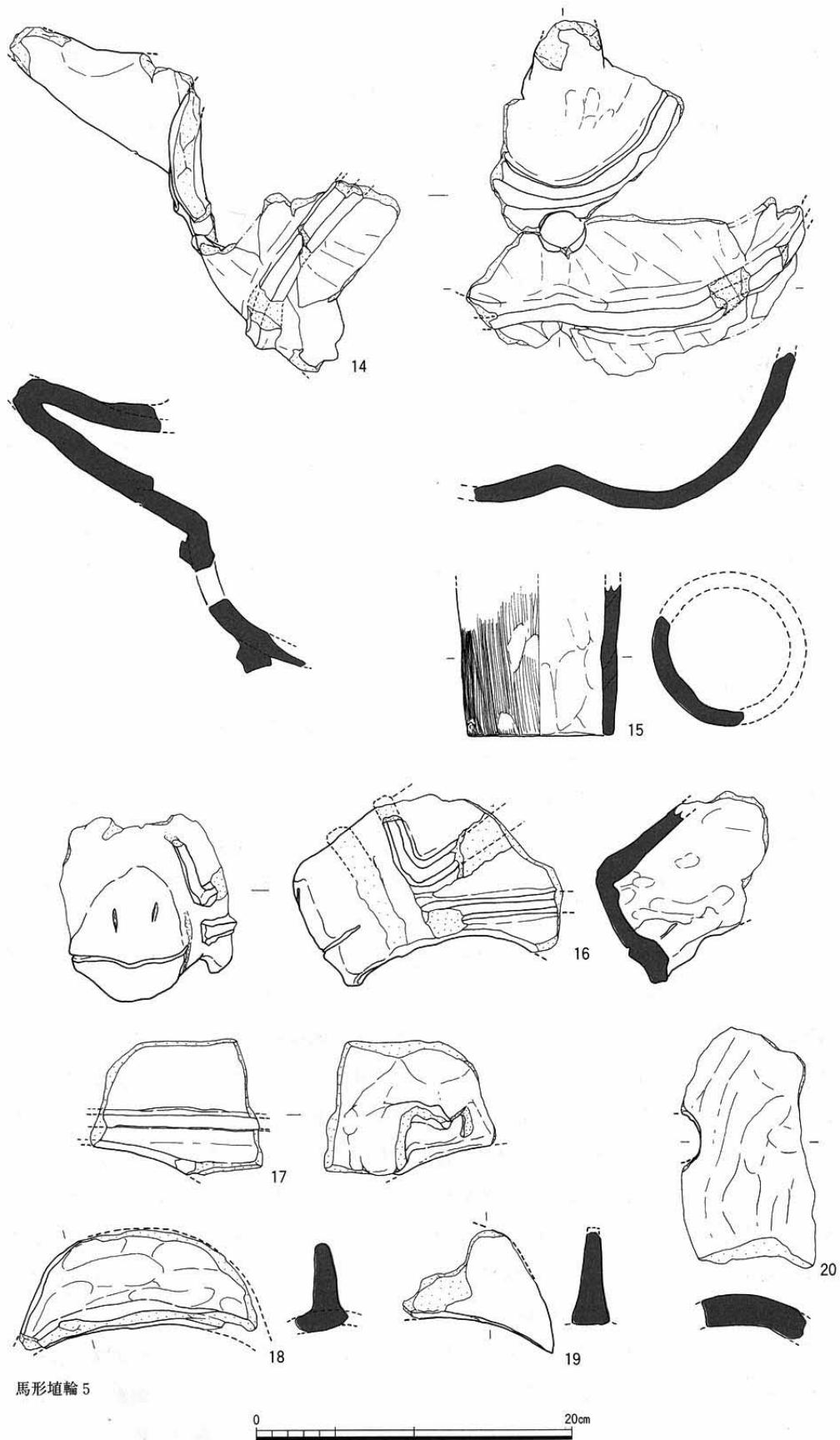


Fig. 42 音乘谷古墳 馬形埴輪 (8) 1:4



馬形埴輪 5

Fig. 43 音乘谷古墳 馬形埴輪 (9) 1:4

つぼう、8と9はともに後輪の根元部分で、8が左側、9が右側のはば対称箇所の破片と見られる。8は前方には鞍轡が粘土を厚く貼り足すことによって表現してあり、後方へは、尻繫の2条の帶が延びている。両帶は延びる方向が異なり、上側の帶の延長には馬の背中央の雲珠が想定される。なお、その付け根には脚と責金具状の造形が加えられている。いっぽう、下方の帶は尻の下を巻くものになると思われる。これに対して、9は後方の雲珠へ延びる尻繫の1本が残存しているだけで、後輪も剥落している。いっぽう、尻繫の馬装と見られるのが10である。尻繫の帶の下に円板を貼り付け、その上面に粘土粒を貼り付け、周囲に沈線をめぐらしている。これは鈴付きであることを示すのではなく、鉄と縁金具を表したものと思われるが、鉄頭の粘土粒は剥がれたままである。下半がまったくわからないが、剣菱形杏葉の上半部と解される。

11は障泥の左上端付近の破片である。障泥を吊り下げる紐が4cmほど残っているが、その先の状況については摩滅のためはっきりしない。残っている長さ以上に紐は延びなかつたように見える。障泥自身は胴体に板状の粘土を貼り付けて垂下されたものであることを表現していると思われるが、その周縁は粘土をさらに貼り足して、1段厚くしている。13は端が脚部に接続しているから、右体側の障泥上端の破片と見られる。12は鞍轡の端部の表現と見られる。鞍轡全体を厚く貼り足すのではなく、障泥の端部の表現同様、周縁にだけ断面三角形の粘土を貼り付け、形態を模写している。

#### 二重の尻繫

14の特徴から尻繫は馬形埴輪1と異なり、尻尾の下にあけられている円孔の下側にもう1条の尻繫が回るより豪華な馬装であることが知られる。先の8とよく対応する。ここでも帶の断面形は台形で、全体を平滑にナデで仕上げてある。

尻尾はその他すべての馬形埴輪同様、差込式になっているが、先端を失い本来の全体像はわからない。胴部からある程度延ばしてきたところで差し込みをおこなっている。

15は馬4の脚とほぼ認定できるものである。底面径10cmで寸胴な形状を呈する。外面にタテハケメが顕著に残る。内面にはナデが施されている。

馬形埴輪4は色調がピンクがかった橙褐色であることから、同一個体を識別しやすい。焼成はやや甘い。赤色顔料が塗布されている可能性がある。

#### 手綱と鞍のある馬

**馬形埴輪5 (Fig. 43-16~20, PL. 23)** 頭部は左側面が比較的残りがよく、16と17の2片からおよそ復元可能である。16に見るよう鼻先は他の個体と比べて短い。面繫は剥離等のためわかれにくくなっているが、馬形埴輪3同様、口元に2条の突帶を回すだけで、鏡板や辻金具などの馬具表現はもっていない。その2条の帶のうち後方の帶から体側にかけて帶が2条延びている。そのうち上側の突帶は、おそらく斜めに上がっていき耳の後方で巻いてタテガミの下で収束する頭絡であろう。これに対して、下側の突帶は下頸のラインとほぼ平行に後方へと続く手綱を表現したものと見られる。17がその一部となるのであろう。またその裏側を見れば他の馬形埴輪同様、胸前面の延長部分が前へ折れ、下が開放となった頭部であることがわかる。

馬5には小さく表現された18・19の鞍が載ると見られる。これまでのその他の鞍では側面がほぼ垂直になるようなしっかりとした形のものであったのに比べて、著しく簡素な半月状のものとなっている。騎乗用ではない鞍を模しているせいかもしれない。鞍の存在と頭絡の存在が関係するならば、馬形埴輪2にも頭絡があった可能性があろう。

20は右前足の付け根から胴部にかけての破片と見られる。側面の円孔が一部残っている。21

(PL. 23) は前脚、後脚どちらかわからないが、脚上端をつなぐに際し、厚い粘土塊を用いて丁寧に固定していることがわかる。焼成はやや甘く、黄褐色でナデ調整の顕著な個体として比較的容易に識別できる。

**小型動物** (Fig. 44~46, PL. 24・25) 22は左後方部の破片が比較的多く残っていたため、ほぼ同一個体と認定できる破片を用いて全形を復元した小型動物である。南掘割りからまとまって出土した。後脚の股間は接合しておらず、前脚の胴体との接合角度は胸側からのラインを重視して決めた。耳やツノの復元はすべて24の個体から推測した。

復元された全長56.8cm、高さ39cm。前脚は股間までの長さ17cmを計る。成形は粘土紐を積み上げて作った上開き気味の四脚を腹でつなぎ、そこから粘土板を順に積み上げて尻の方から胴体を作っていたと思われる。そして、最後に頭部の成形にかかり、口のところで閉じて全体の成形を終えているようである。耳やツノの付加はその後であろう。

胴体は馬形埴輪よりも厚く、脚の付け根は内面に縦方向の強いナデを加えている。胴部側面の4個の円形透かしは、胴部中位にまで上がっている。尻尾はここでも柄を用いた接合をおこなっているが、後ろから見て左に寄っている。また、尻の穿孔は尻尾の接合をおこなったあとに実施されていることがわかる。尻尾自身は欠損している。

前脚から胸へと進んだ前方の成形はそのまま下顎へと進むが、本例は胸と顎の間に断面が三角形になる粘土塊を貼り付けて、首の皮のたるみを表現しているところに特徴がある。頭部は円形に削り抜かれた目から先の部分しか残っていない。鼻先は著しくすぼまるが、摩滅のため鼻の穴の表現の有無は不明で、前面にヘラで刻まれた口の表現を残すだけである。

外面全体に丁寧なナデを施しており、ハケメの残る箇所はない。色調は白っぽいベージュ色で、赤色顔料の付着と見られる部位もある。焼成も堅緻だが全体に作りは厚い。

23は頭部から胸にかけて残る小型動物埴輪片である。鼻先にかけて著しくすぼまる形状で、目を大きく円形に削り抜いている。鼻先には刺突による鼻の穴1対に加え、やや開いた形の口の造形が見られる。断面を見ると、頭部が非常に厚くなっているのは、全体の成形の最後に開口部を塞ぐように頭部を作るためであろう。

ここでも、顎から胸にかけての部分に断面三角形の大きな粘土の貼り付けがあり、首のたるみを表現している。外面全体をナデで仕上げている。

24が22の復元のもとになった小型動物の頭部上半の破片である。これも南掘割り出土。右目が円形にあけられ、さらに耳を取り付けた孔がある上に、小さな突起が耳の付け根の上に貼り付いている。断言はしづらいが、この突起は鹿の角のように長いものが欠けたのではなく、現状でほとんど残っている状態と見ることが妥当である。目の部分は輪郭に多少膨らみを持たせている。

このツノの特徴と、先の22と23に見られた首の造形から、いずれも鹿の埴輪と見るよりも、牛と見る方が正しいように思われる。

これらとは異なる種類であるが同じく小型動物に属する破片がある。25と26がそれである。26は左端に目を表す円孔の一部が残り、その後ろに耳の付け根が残っている。耳はあらかじめ開けておいた孔に柄状部分を差し込み固定している点では、本古墳出土のその他多くの動物埴輪と同じであるが、その柄状部分と外に突出した耳が板状を呈することが大きく異なる。また、

首の皮  
のたるみ

牛

犬

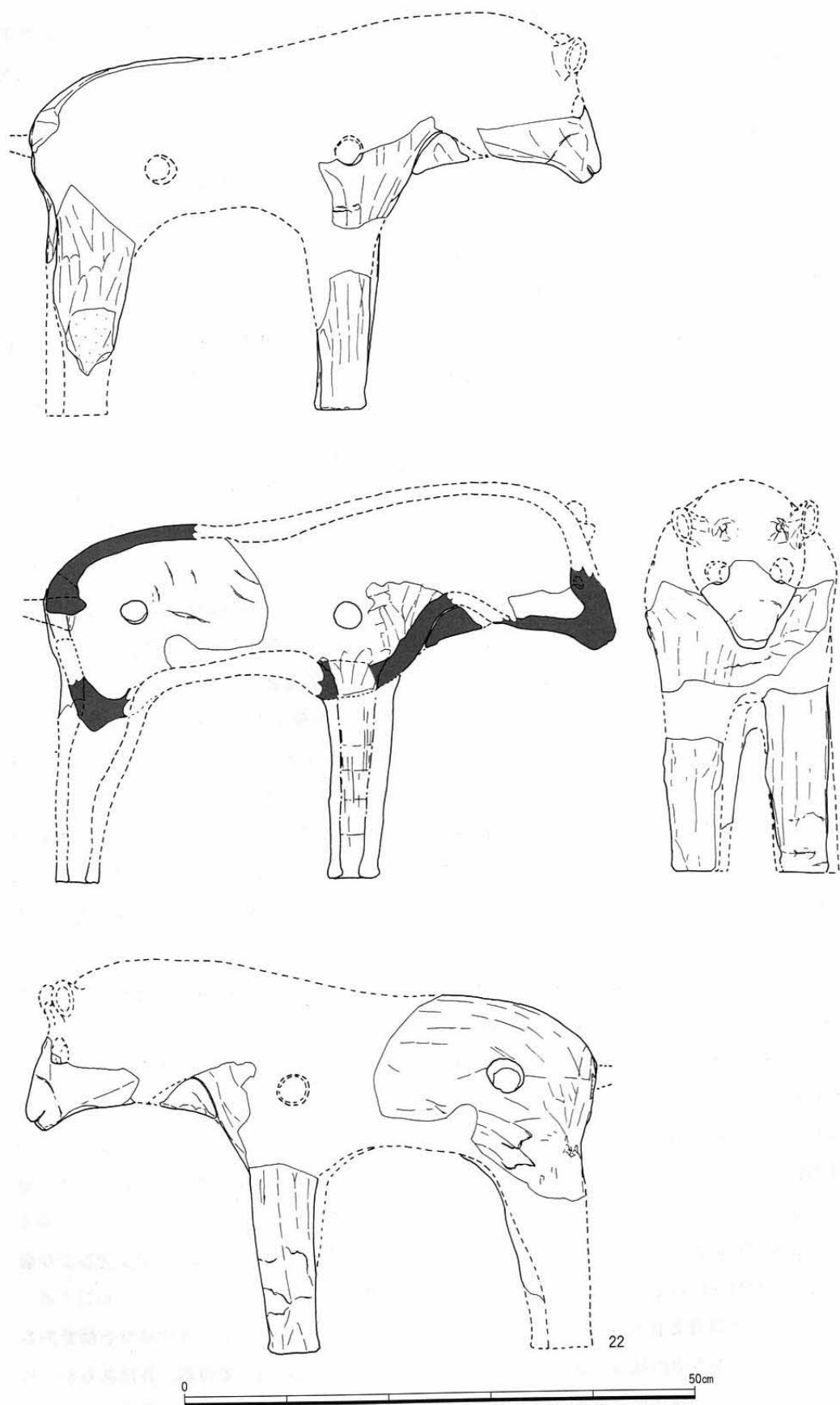


Fig. 44 音乘谷古墳 動物埴輪 (1) 1:6

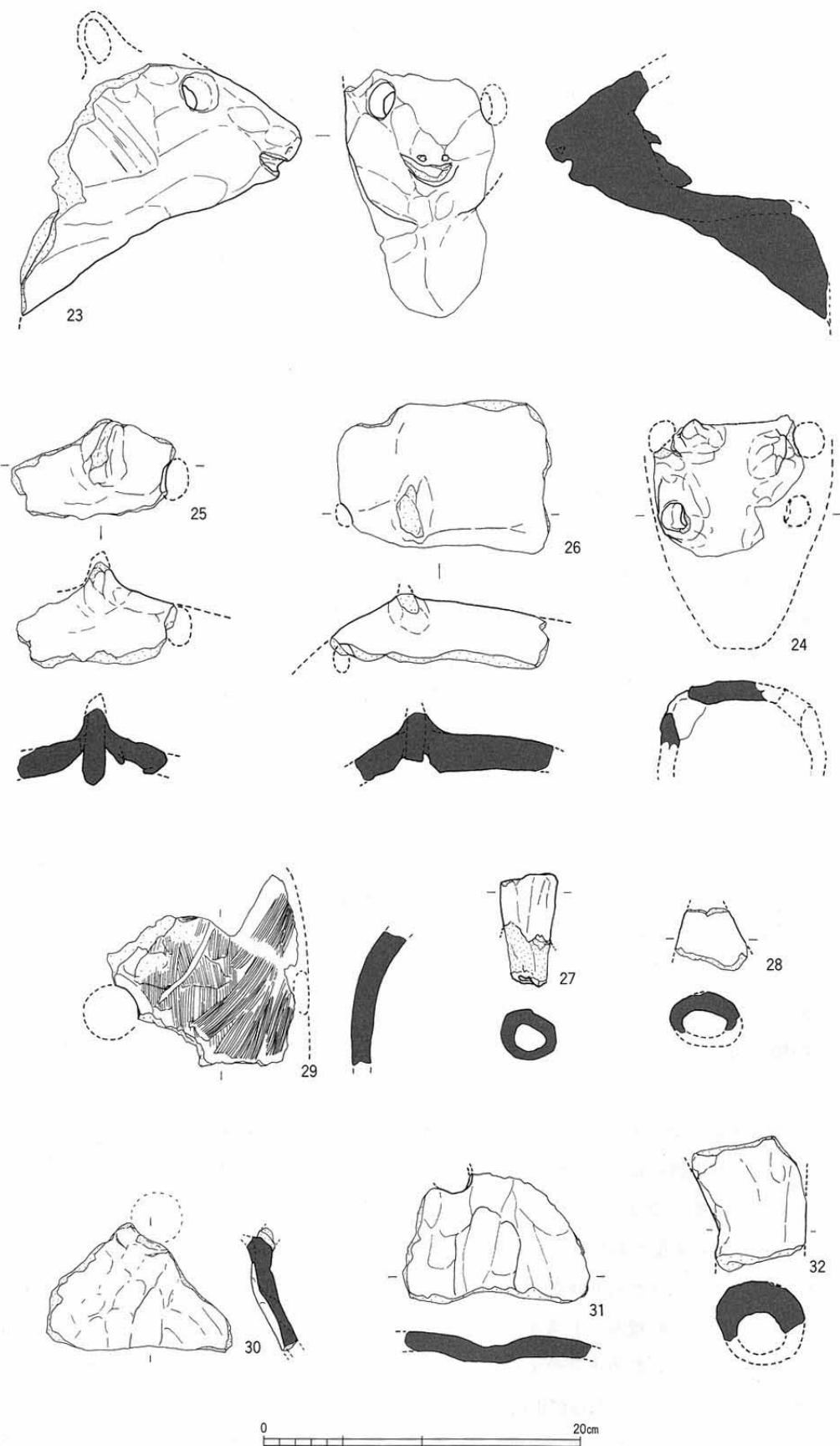


Fig. 45 音乗谷古墳 動物埴輪 (2) 1:4

ツノの表現もないことから、犬形埴輪であろうと思われる。25も同様に平たい柄状部分を差し込んであり、図右側には目の円孔が一部残る。本破片はかなり深くまで柄状部分が入っている。

**耳**  
27以後は種別の同定の難しい各破片である。27は一端が頭部に挿入されていたことのわかるもので、反対の一端は斜めに切られたように端面をなし、外面は丁寧なナデで仕上げられている。挿入部を含め全長7.2cmと短いことからすると、馬以外の埴輪の耳と考えざるをえないし、犬でもない。

28は先端が尖る動物埴輪の耳であるが、馬か小型動物かも含めて同定不能である。類似の破片は少なくない。

29は動物の尻で右側の破片である。尻尾が破片左上に付くこと、そしてすぐ下に円孔があくことがわかる。表面にハケメが密に施されており、焼成は堅緻である。尻繋が残っていないが、馬形埴輪1に同定できる可能性も捨てきれない。

30、31も尻から股間にかけての破片である。これらは基本的にナデ仕上げとなっている。

**脚**  
32は大きさからみて小型動物の脚と見て間違いない。これもナデ調整で仕上げている。

33は馬の脚だが同定できない。底径7cmで上方に向かってやや広がる。内外面ナデ調整である。これに対して、34は外面にハケメが残るが同じく馬形埴輪の脚部破片であろう。

これら筒状の脚に対して、逆漏斗状の破片で同じく動物の脚になりそうな破片がいくつかある。このうち2点のみ図化した。35は接地する面を意識した端部の処理をおこなっているのに対し、36は端部が四角く単純に終わる。ともに外面にハケメが残る。おそらく図の天地と逆方向に粘土紐を積み上げて作ったものであろう。脚とは関係なく、特殊な器財あるいは高杯や器台などの土器を形象化した埴輪片かもしれない。

**鳥**  
**鳥形埴輪** (Fig. 46、PL. 25-右上) 37は鳥形埴輪と見られる。中空で首が長く内面にナデの痕跡が縦位につくことから輪積み成形と考えられる。首の成形を終えてから、円錐形の嘴をつけている。摩滅が著しく嘴に線刻が認められる以外は何ら具体的な造形は残っていない。

鶏冠や肉垂がついていたかはわからないが、首の長さや頭の小ささからすると鶏を表現したものでなくて水鳥を表現したものと考えられる。

南掘割りから出土している。

**人物埴輪** (Fig. 46、PL. 26) 数ある動物と比べると、人物埴輪と見られる破片はきわめて限られる。

38は復元するとやや上すぼまりの円筒状になる破片で、上端が斜めに切られたように仕上げられている。粘土紐の輪積みで成形されており、外面には一部縦に剥離痕が残り、その位置の頂部がもっとも高くなる。それ以外の外面には縦方向のハケメがよく残っている。これらの特徴から、後頭部の垂髪が剥離した男子人物頭部と推測する。南掘割りから出土。

39は鼓形の残存部分から人物埴輪の肩から首の部分の破片と考えられる。輪積みによって肩をすぼめてそのまま輪積みで上開きの頭部の成形に移っていったことが観察できる。内面には粘土紐の継ぎ目とその際のナデやオサエの痕跡がよく残る。残存部位には顔面や衣装、装身具の痕跡は残っておらず、どちらが正面であるかも不明である。南掘割りから出土している。

40は、先端が詰まった中空棒状の破片で、やや反り返った表現となっている。反対側は柄状に差し込むようにして何かに取り付けられていたことがわかり、矮小気味の人物の腕の表現で

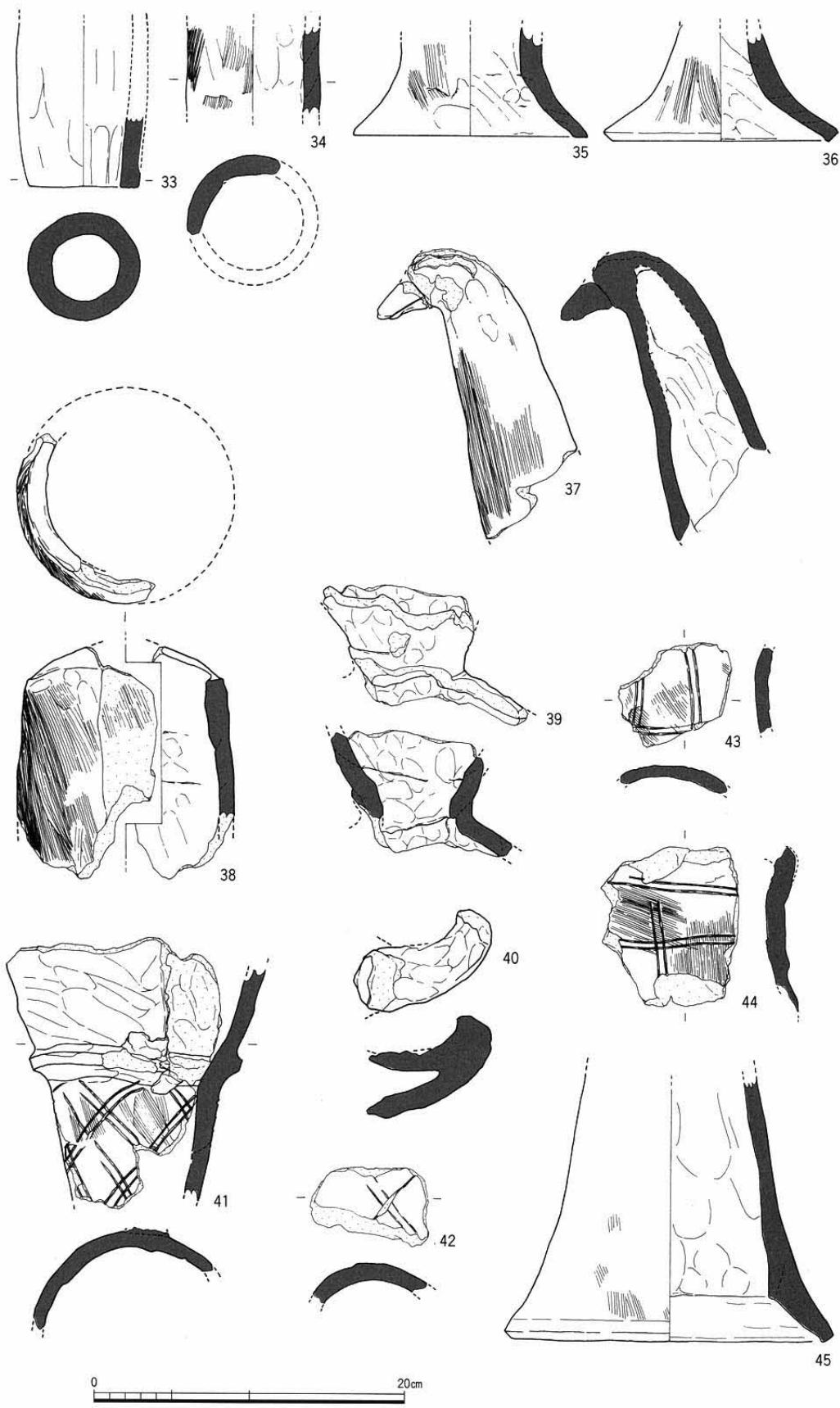


Fig. 46 音乘谷古墳 動物・人物埴輪 1:4

馬子 あろうと思われる。衣装や指の表現はない。これも南掘割りから出土しており、どの馬形埴輪にともなうかはわからないが馬子の片腕と考えることができよう。

45は、裾開きの形状をした破片で、裾の径は21.2cmを計る。裾近くの内面にはっきりとした稜がつく。外面は摩滅が著しいがハケメ仕上げと見られる。欠損している上部で何か別の部品と接合していたとすると、人物埴輪の上衣の裾かとも思われるが、あるいは裳かもしれない。そのどちらにしても、内側に円筒形台部があったとするならば、造形上これほど長い裾は不自然である。茨城県周辺に見られる上下分離式の人物埴輪にでもなりそうな破片である。しかし、出土位置は南掘割りではなく墳丘北西斜面であることから、人物埴輪と見ること自体できないかもしれない。

41から44は2本一組の沈線で文様を刻んだ破片である。41は人物埴輪の足の部分と思われる。中ほどに断面台形の突帯がめぐり、それより上では何かが剥がれた跡が縦方向に観察される。突帯より下では2本一組の沈線で斜格子文が充填されている。突帯は足結とも見られ、突帯より下はゲートル状のはきものの表現かもしれない。しかし、上方の剥離部分に付いていたものは想像できない。なお、赤色顔料の塗布を考慮すると、天地を逆に考え、大刀形埴輪の柄と鞘の連接部分の造形とも受け止められなくもない。墳丘東南斜面黄褐色土からの出土であり、掘割り出土の一群からそれほど離れていない。

42は横方向にのみ緩やかな湾曲をもっているが沈線の施し方から41と同一個体の破片になる可能性が高く、出土位置も同じである。

武人 43と44は2本一組の沈線が格子状に施されている破片である。何を模しているのか判断がつかないが、43は上下左右に湾曲した薄い破片で、内面は下半のみヨコハケメが強くかけられているのに対して、上にすぼまるせいで内面上半にはハケメがなく、ユビナデ調整となっている。この様子から、胄のような頭部表現と思われる。これも墳丘東南斜面からの出土。

これに対して44は図の上端に円形の首様のものが続くことがわかるもので、人物の肩や胸の一部分と思われる。沈線の形態は挂甲や肩甲の表現であろうか。表面にはタテハケメが比較的残るのに対して、内面はナデやユビオサエの痕が顯著である。43と同一個体かもしれないが、盗掘坑内から出土している。

**円形輪郭の  
双脚輪状文**  
双脚輪状文形埴輪 (Fig. 47、PL. 27) Fig. 47には双脚輪状文形埴輪を載せている。縮尺は46のみ6分の1、他は4分の1である。46はもっとも残りがよく形象部分を完形に復元できた。南掘割りから出土したものである。左右の長さは約37.8cm、盤状部の上下の径は約27.5cmである。向かって左側に上下対称形の蕨手状部分をつけた円盤状の造形で、中心に径9.6cmの円形の孔をあけ、前面にのみ線刻文様を施す。形象部分は板状の形象部をほぼ作り終えてから、円筒部に接合したのではなく、円筒部から連続的にかたち作っていったように観察される。そのため、形象部分は下半が断面円形の本体に鰐状の張り出しを付け加えた形となるのに対して、上半は背面から盤状形象部を支える形となっている。なお円筒部はまったく残っていない。

表面の模様は、円孔とΩ形の外側輪郭に沿って平行する2本線の間を短い刻線で埋めた梯子状文様を施し、その間を三角文様で満たすものとなっている。そして円盤部分のみ内向きの三角文様の内部を頂点に集まる縦線で充填する。そのうち、隣り合う三角文が接して有軸の綾杉状表現に見えるところもある。

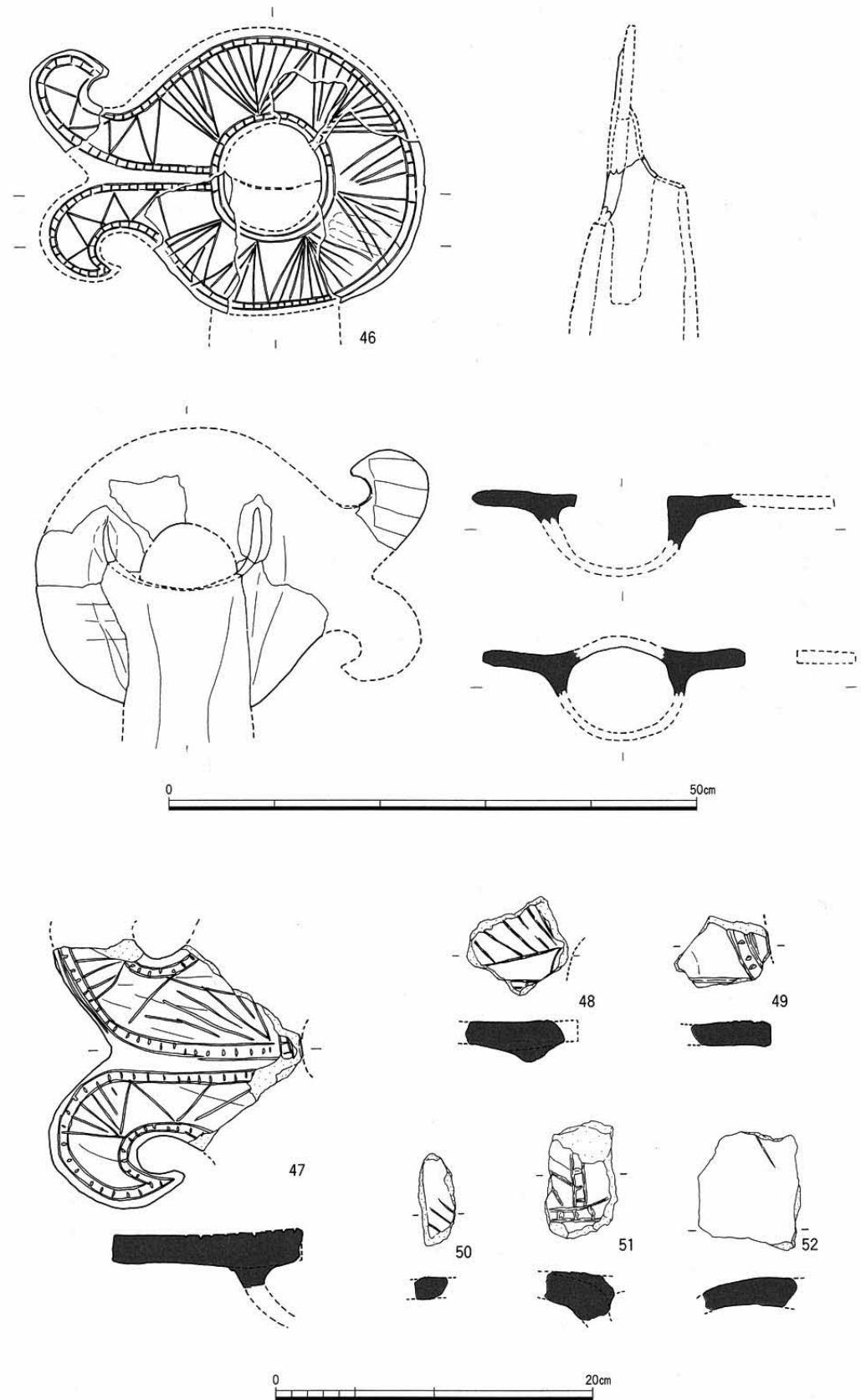


Fig. 47 音乘谷古墳 双脚輪状文形埴輪 (46. 1:6 47~52. 1:4)

## 双脚輪状文の配置

47は46とは別個体の双脚輪状文形埴輪である。右端にからうじて円孔の一部分が残る。輪郭は46同様、梯子状文様で縁取るが、短い刻みは刺突状になっている。梯子状文様で挟まれた内部は連続三角文様で満たしていることは変わらないが、盤状部と双脚部での鋸歯表現の違いは46ほど明瞭でなく、内部を充填する三角文様は双脚部にも及んでいる。石室盗掘坑の中から出土した。

48は双脚部と盤状部との接点付近の破片で、円孔の縁取りの一部と、双脚部付け根の縁取り、そしてそれらに接する平行線を充填した三角文様が残る。これらの特徴により、上述2者とは異なる個体であることが判明する。南掘割りから出土している。47とよく似ている。49もほぼ同様の破片であり、右端に円孔の一部が残る。図の下端に残る沈線は三角文様の一辺と見られる。これも南掘割りからの出土である。50は部位を特定できないが、51は背面の円筒部の接続状況から盤状部右下部分の破片と見られる。表面には梯子状文様が直交している表現が残り、左には内部を充填した三角文様の一部が見られる。墳丘北西斜面から出土している。

以上の破片のうち、47と49は同一個体である可能性もあるので、音乗谷古墳出土の双脚輪状文形埴輪は46に類するものが最低3個体、それらと異なる梯子状文様の直交する51を加えて4個体は存在したと考えられる。いずれも、橙褐色の胎土で他の形象埴輪とは区別される。

52は橙褐色の胎土から46や47と同一個体になる可能性がある円筒部破片である。表面にハケメが残っていない。上端に斜めの線刻が1本あるが、文様の一部かどうかはわからない。墳丘北西斜面からの出土である。

**玉 杖** 玉杖形埴輪 (Fig. 48~50, PL. 28~30) 従来、石見型盾形埴輪、あるいは、石見型埴輪と呼ばれてきたものを本書では玉杖形埴輪として扱う。その意味では円筒部もいくらかは棒状の杖部分を象っていると考えられるが、便宜上、左右に板状に広がった上半部に対して形象部と呼称する。音乗谷古墳からは大型品と小型品の大別2種類の玉杖形埴輪が出土している。このうち前者は1点、後者は2点形象部を復元した。

**大 型 品** 53が大型品で円筒部もある程度復元できた個体である。復元された全高は99.8cmを計る。

形象部は小型品と比べると相対的に幅広く、下縁背面に補強のための突帯がつく。形象部の長さ71.5~72.0cm、上辺幅46.5cmを計る。両側縁の半円形削り込みを挟み小さく鰐状の突出をもつ中間の帶状部分は、2本一組の沈線により上下と分けられ、全体で3段構成となっている。ただし、鰐状突出部分はほとんど残存していない。頂辺中央はツノ状の突起をもち、その間をU字形に抉る。また、輪郭を縁取る2本一組の沈線は中間の段にはない。

円筒部は形象部との境に突帯をもち、そのさらに約12cm下にも1条突帯を回すが、それより下の部分にはこれと同じ間隔では突帯が回らないことがわかる。円筒部のハケメが向かって左上から右下に斜めに走ることからすると、本製品が円筒部を先に作ったのち、天地をさかさまにして形象部の成形に及ぶ倒立技法を用いていることは明らかである。

形象部表面は円筒状の中央部を除いてほぼ全面にナデが丁寧に施されていて、板状の部分にはハケメはほとんど見えない。これに対して、円筒部のハケメは消そうとした痕跡がない。

この種の製品によく見られる小孔は、両側縁に沿って4個ずつ、そして中央にそれらと位置をずらして3個上下に配されていると復元できる。中には貫通していないものもあるが、断面形は方形で、斜め下向きにあけられている。

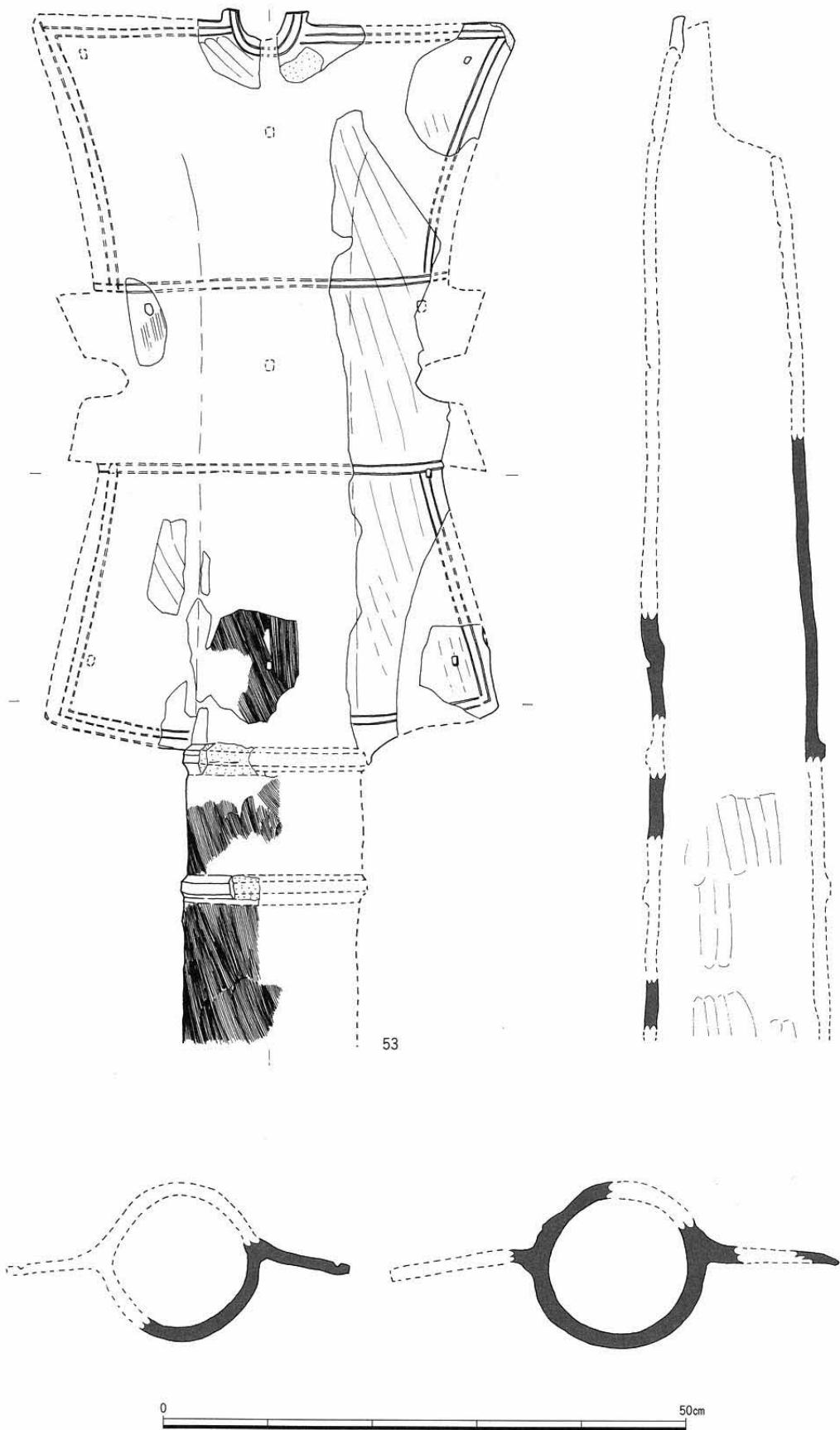


Fig. 48 音乗谷古墳 玉杖形埴輪 (1) 1:6

色調は全体にやや黄味がかったベージュ色で表面に赤色顔料が残存している。焼成はやや甘い。南掘割りからの出土である。

**小型品** 54は小型品である。C区の墳頂で円筒埴輪とともに出土した個体である。大型品に比べると形象部中段の鰐状突出部分が相対的に大きく表現されている。暗赤褐色の色調と硬質の焼成が特徴で、盾面上半の残りは比較的よいものの、下半は両翼部が残存しているにすぎない。そのうち左側の下端隅角は斜めに切り落とされている。断面形によく現れているように、形象部は円筒の両側に水平に粘土板を貼り付け、それと円筒部の前面で形成されている。頂辺のツノ状突起部分にはU字形の粘土帯を貼り付け、指で押圧して表面に変化をもたせている。このほか、盾面中央のU字形削り込みを挟むように上下2段の沈線の帯が水平に刻まれている。粘土帯と沈線以外には盾面の装飾はなく、斜め方向のナデが全面に施されている。ただし、円筒部はハケメが比較的よく残っており、ナデはあまり丁寧におこなわれていない。内面は上半では縦方向のナデが顕著。背面の円筒部上端はU字形となっている。

小孔は両側縁に沿った位置では中段で確認できるが、下半の板状部には明らかに認められない。ただし、残存はしていないが、おそらく上半の左右板状部にはあったと考えられる。一方、中軸沿いではまず上段に1個確認できるが、中段以下は残存していないので不明である。あつても、あとひとつくらいであろう。小孔の形は方形である。

円筒部はまったく不明である。法量は形象部の長さ56.0cm、上辺幅39.0cmを計る。

55も54同様の小型品である。形象部周囲の残りは比較的よいが、それ以外はほとんど残っていない。頂辺のツノ状突起部分にU字形に粘土帯を貼り付け、指で凹凸を付けていることが唯一の装飾と言えるもので、翼状部下端の隅角は左側を見るとやはり小さく切り落としてある。形象部は全面ナデで仕上げている。小孔は両側に3個ずつあけられていることがわかるが、中央にどれだけの小孔があったかはまったく不明である。この小孔も断面は方形である。形象部の長さ57.5~59.5cm、上辺幅38.9cmを計る。

出土地点は南掘割りである。表面に赤色顔料が残存している。

Fig. 50には復元しえなかった玉杖形埴輪の各部破片を掲載した。67を除きいずれも小型品に属する。形象部の破片はどれも表面にナデの痕跡がよく残っており、裏面もナデによって仕上げられている。

56と57はともに頂辺の残る破片である。56はツノ状突起に粘土帯を重ね指で押圧しており、54・55の2点と共に通する表現であるが、その左右の頂辺に沿って2本一組の沈線を刻んでいる点が異なる。この沈線は側縁には続かない。これも長方形の小孔が残る。左右対称として復元すれば、形象部上辺の幅は40cmとなる。B区からの出土で、表面に赤色顔料を塗布する。

57はツノ状突起上端が斜めに切られていて、半円形の削り込みに沿うU字形の粘土帯の貼り付けはない。かわって、頂辺に沿って梯子状文様を刻んでいる。削り込みは8cmにも及ぶ深いものとなっている。ナナメナデが丁寧に施された表面に長方形の小孔が1個認められる。焼成は比較的堅緻で、橙褐色を呈する。復元すれば形象部上辺の幅は32.8cmくらいになるだろう。石室盗掘坑から出土している。

58も頂辺の残る板状部の破片と見られる。57同様梯子状文様を水平に刻むが、短い刻線は57と反対に右に傾く。なお、残存部位には小孔は残っていない。南掘割りから出土している。

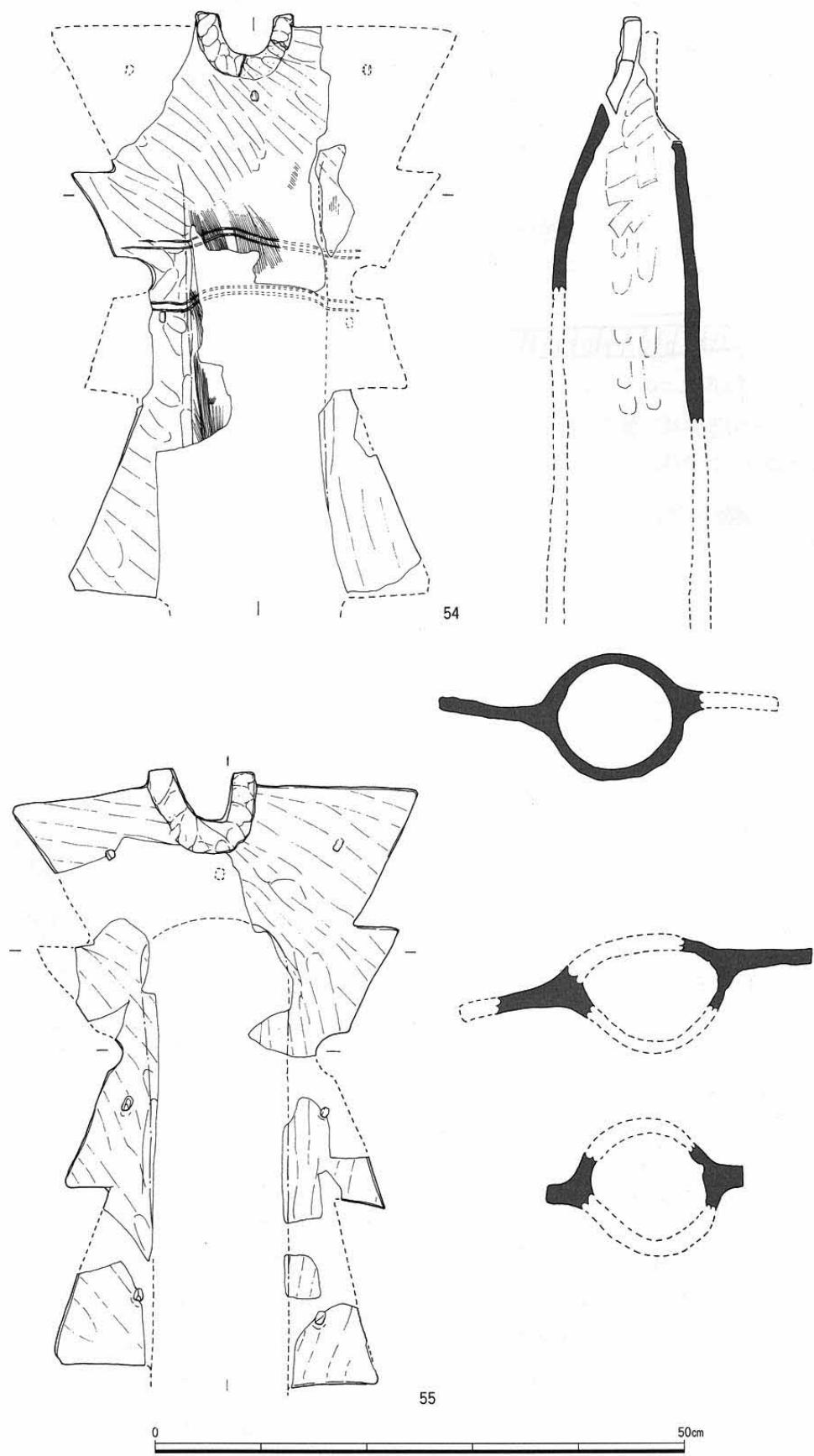


Fig. 49 音乘谷古墳 玉杖形埴輪 (2) 1:6

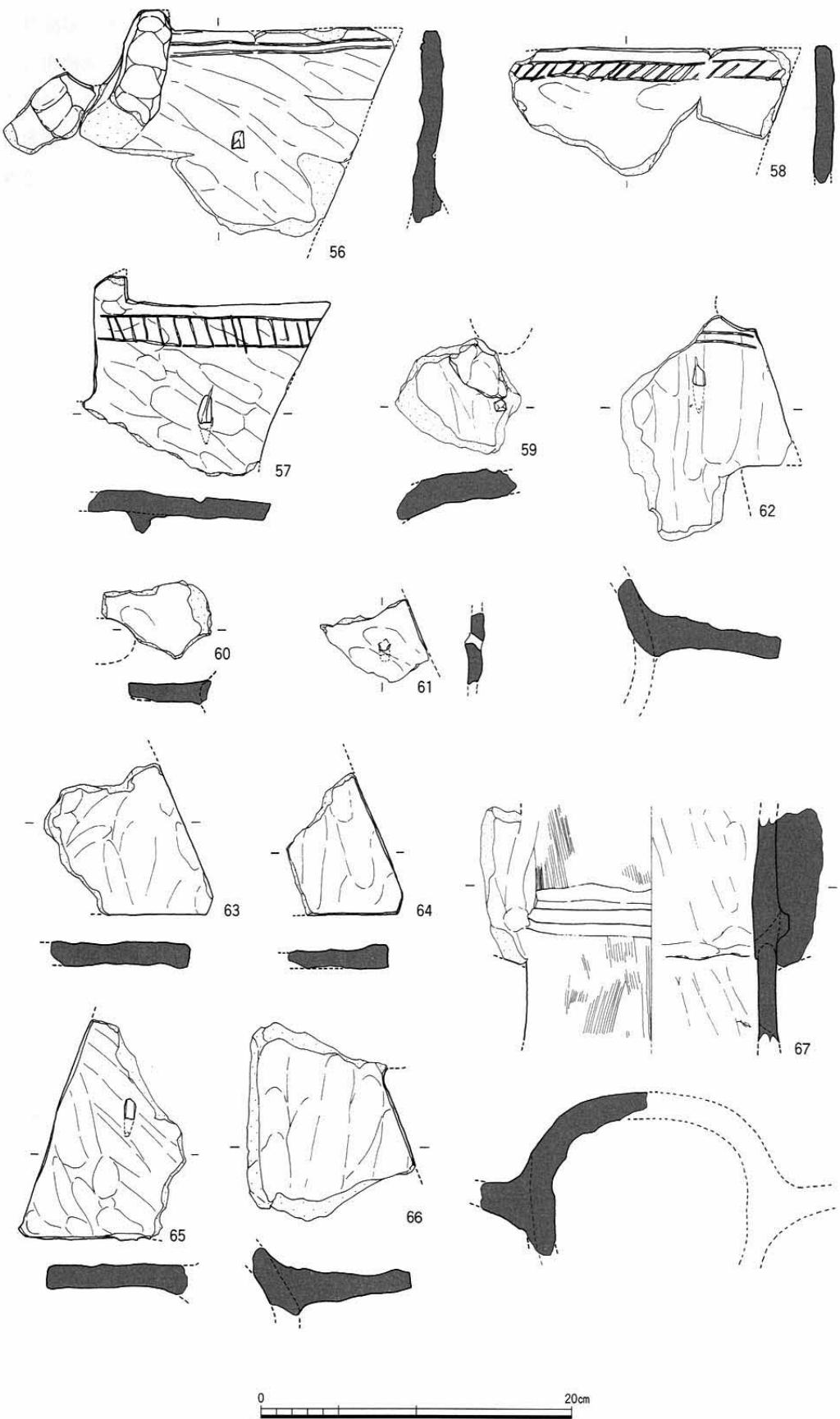


Fig. 50 音乘谷古墳 玉杖形埴輪 (3) 1:4

59は56と同一個体ではないがほぼ同工のU字形削り込みが部分的に残る破片である。粘土帶の貼り付けがもっとも下がった部分の直下に方形の小孔が認められる。

60と61は小片だが形象部中央付近の破片と思われる。ただし、天地は不明。60には左端に削り込みが一部残る。また、61は小孔が残るもので、右側側縁との距離が短いことから中段の破片と判断しうる。

62は中段右側縁の削り込みの一部とそれから続く鰐状突起を残す破片である。表面に2本一組の沈線を刻むことは54や56と同じである。この沈線のすぐ下に小孔が残る。B区から出土している。表面に赤色顔料が残っている。

63～66は形象部下端の翼状部片である。63と65も赤色顔料を塗布しており、65が長方形の穿孔を1個残すのに対して、63はこの部分に穿孔がないことが明らかである。前者が55に対応し、後者は54に対応することがわかる。いずれも表面には丁寧なナデの痕跡が観察され、65の隅角はわずかではあるが小さく切り落としていると見られる。63と64はともに翼状部分右側下端の破片であり、これらも、隅角を小さく切り落としている。

67は形象部から円筒部にかけての破片である。大きさと器壁の厚さから大型品の基部と思われる。残存状況が悪く、背面から見た実測図を復元的に載せた。円筒部上端の復元径は16cmである。

円筒に取り付けた形象部の残りはわずかである。円筒部断面及び内面の観察から突帯の直下あたりにもともとの基底部があり、基部完成後天地を逆にして、その上に上半の粘土を積んでいったことが知られる。突帯はその際の強化の役割も担っていることがわかる。外面にはハケメがよく残り、焼成は甘く、淡褐色を呈する。南掘割りから出土している。赤色顔料残存。

以上の各破片のうち、60・61・64・66は砂粒を多く含み、サーモンピンクの色調を帯びていることが共通し、いずれもB区より出土していて同一個体の可能性がある。

これに対し67は南掘割りからの出土で、53とともに、大型品は人物、動物埴輪群とともに使用された特別なものであったことが推測される。これに対して小型品は墳頂各所に樹立されたのであろう。

**蓋形埴輪 (Fig. 51・52、PL. 31・32-上)** 蓋形埴輪には大別2者があり、68だけが大きく異なる。

68は破片から復元的に図化したものである。いずれも同一個体の各部である保証はない。立ち飾りは文様にあわせて長方形の透かしを1枚につき2個ずつあけたもので、周囲につく鰐状飾りは線刻をもたない。4枚の羽根は受け部からの剥離面を下面にもっており、そこには接着を強化するためのヘラによる刻みが確認できる。傘部に差し込む心棒やその先端に付く受け皿部はまったく残っておらず、傘部の破片も見当たらない。台部は円孔の一部が残り、内外面ともにナナメナデにより仕上げられている。各破片とも、表面に赤色顔料が残存している。

5世紀の蓋

これは立ち飾りの特徴や全体的な形状から見て、5世紀前半の蓋形埴輪と見られる。遺物への細かな注記がなく、保管中に混入した可能性が高いと見られるが、古い時期の埴輪が新しい古墳へ持ち込まれる例もないわけではないので、掲載しておく。

69～73が音乗谷古墳から出土したことが確かな蓋形埴輪の各部破片である。69～72がすべて立ち飾りの破片である。68に比べかなり立ち飾りの形状がくずれたもので、立ち飾り本体と外側上部の鰐状飾りが一体化して大きくなつたものに内側の鰐状飾りが小さく表現される形であ

6世紀の蓋

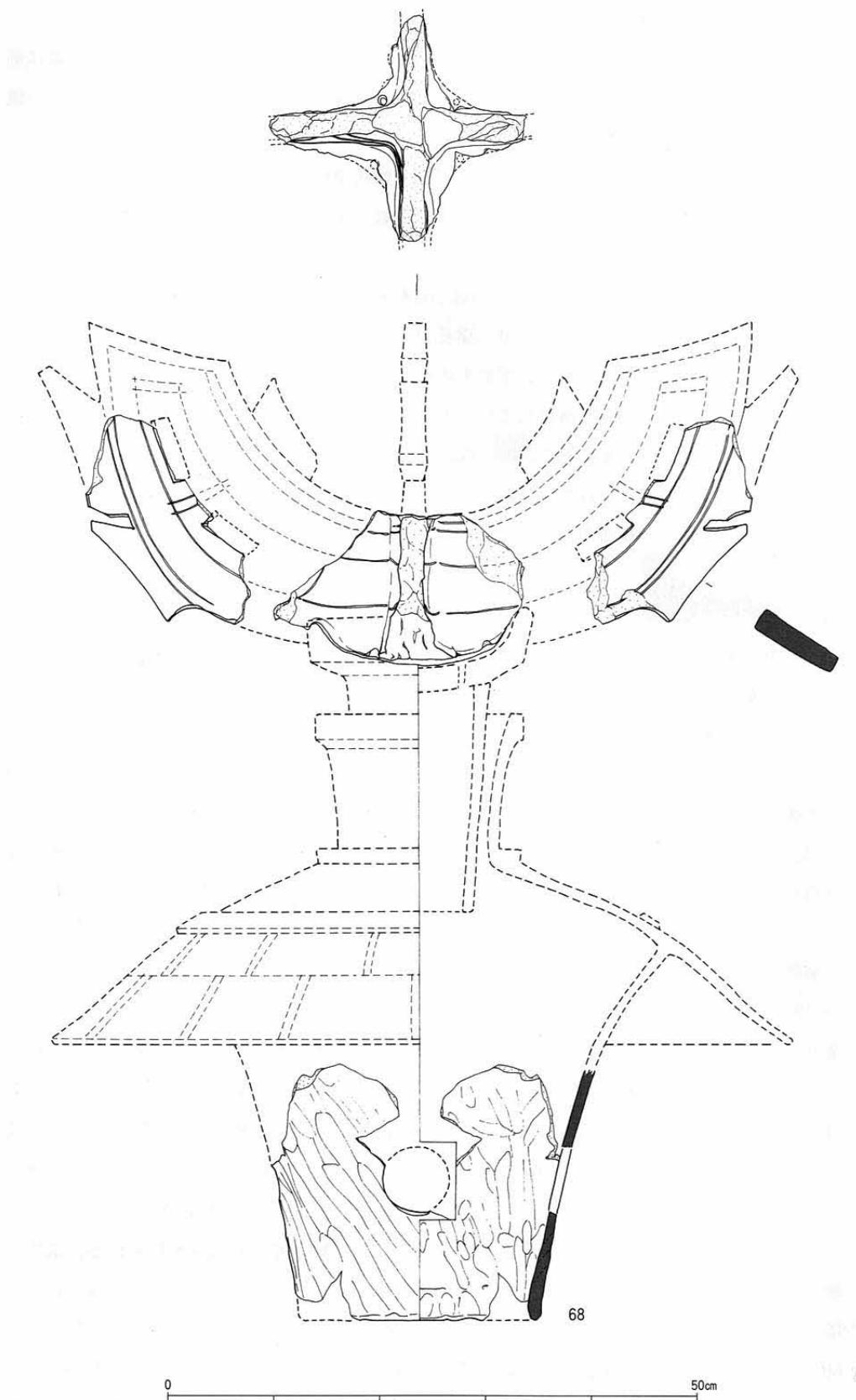


Fig. 51 音乘谷古墳 蓋形埴輪 (1) 1:6

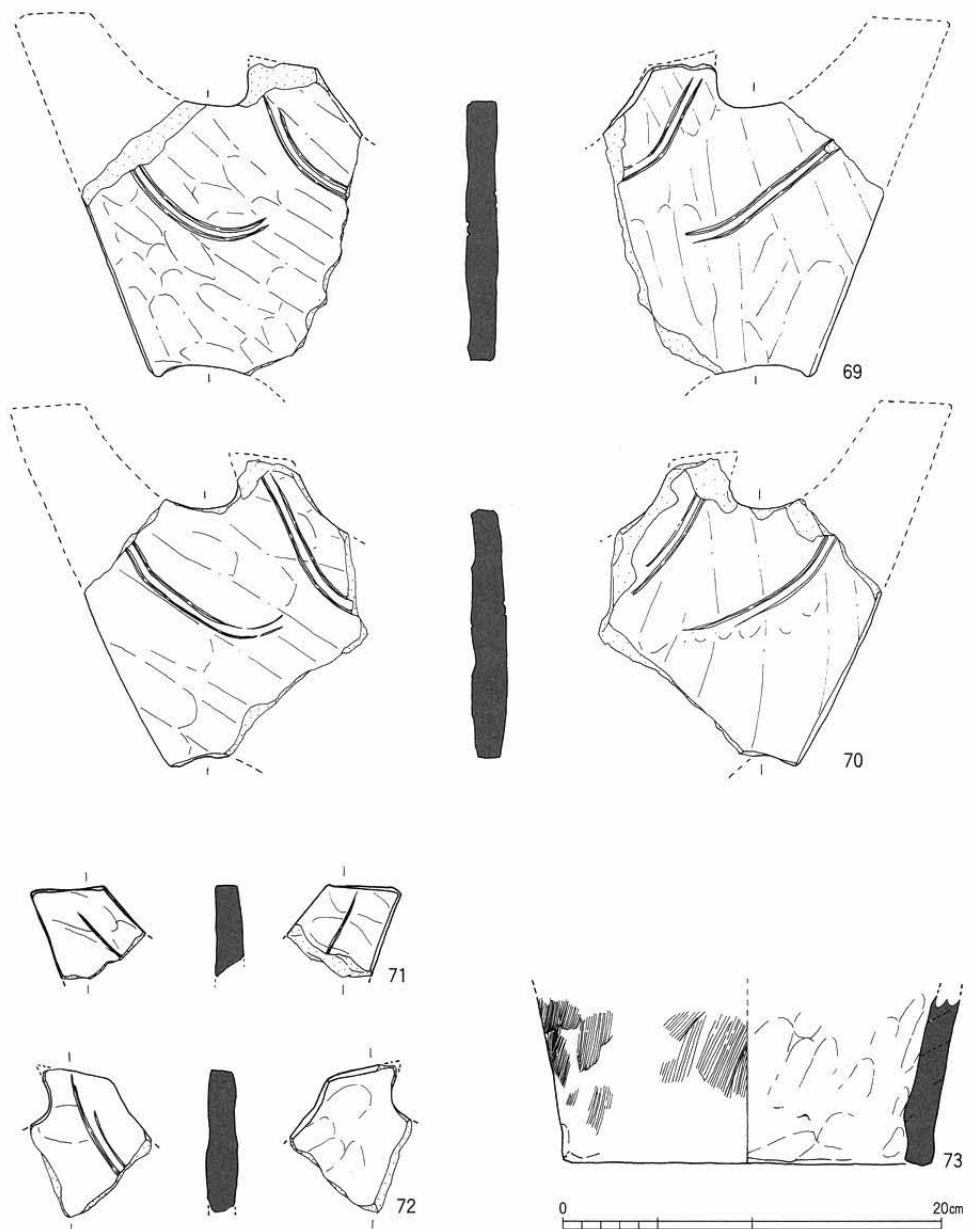


Fig. 52 音乘谷古墳 蓋形埴輪 (2) 1:4

る。線刻も2本一組の弧線が2組ずつ付けられているだけで、71ではそれが1本線に、そして72では片側だけに残っている。それでもそれぞれ表面は丁寧なナデ調整が施されている。色調は灰橙褐色である。

この種の立ち飾りにともなうと考えられる台部が73である。表面に不定方向のハケメが残り、内面にはナデやユビオサエの跡が顕著に残る。これ以外の傘部や受け部の破片はまったく採取されていない。

これらはB区からも出土しており、小型の玉杖形埴輪同様、各所に置かれたものと推測できる。その場合、円筒埴輪に載せてあったことも十分考えられる。

**家形埴輪** (Fig. 53, PL. 32-下) 74~78が家形埴輪の破片と認められるものである。74を除くいずれも同一個体である可能性が高い。

74は垂直の壁面状のものに斜めに貼り付けていた部位がはずれた形をしており、あえて言うなら家形埴輪の軒の部分と考えられる。しかし、沈線の施し方はあまり例を見ないものである。少なくとも、以下の75~78とは胎土、焼成においても明確に異なるものであり、注記もなく混入の可能性も捨てきれない。

75~78が隅丸方形の平面形の家形埴輪軸部の破片である。暗灰褐色を呈し焼成は良好である。どれも、底面より3cmほど上がったところに断面低台形の突帯を外側にめぐらす。75には沈線で縁取られた長方形透かしが突帯のすぐ上にわずかに認められ、入口部分の表現と見られる。77は隅部分の破片であろう。いずれも斜めないし縦方向の不規則なハケメが外面によく残っている。また、内面の基底付近は指による押圧が顕著におこなわれている。78も図左端がコーナーに近いことが観察される。いずれもB区からの出土であり、A区南掘割りから出土した大量の形象埴輪とは異なる地点、墳頂での使用がまさきに考えられるものである。

**家の配置**  
鞠形埴輪 (Fig. 53、PL. 33-上) 79~81が鞠形埴輪の破片である。古墳時代後期に通有の奴廻形の鞠の埴輪である。79と80は矢印状に表現された矢が板状破片に刻まれたもので、79は鎌が計5本描かれている。長頸鎌を模していることはほぼ確かであろう。表面にはハケメがよく残る。これに対して、80は表面の摩滅が著しく鎌の線刻も消えかけている。

81がこれらの板状の鎌表現部分を挟む翼状部分の破片のうち、左側の破片と思われる。斜めの刻みを入れた覆輪状の表現で縁取り、その中を上向きの弧線で充填している。この翼状部分と鎌表現部分とがどのように接続するのか不明であるが、鎌表現部分は残存する範囲ではきわめて平坦なことから、矢筒本体を構成する円筒の前面が上端でそのまま翼状部分へとつながっていくのに対して、板状の鎌表現部分は円筒部をまたぐように左右の翼状部分の間に固定するしくみであったと思われる。79と81がB区からの出土であり、やはり墳頂にあったものと見られる。これらはともに焼成が良好で、色調もよく似ている。

**5世紀の盾**  
盾形埴輪 (Fig. 53、PL. 27-右下) 82は灰褐色でその他の埴輪と比べるとひと目で胎土が異なっていることわかる破片で、蓋形埴輪68同様、長い間の保管期間に混入してしまった可能性が高いものである。盾形埴輪盾面の一部で、裏に一部円筒部が残る。盾面の輪郭と相似形の無文の内区を2本線で囲み同じく2本線からなる外側の区画との間に鋸歯文を充填した盾形埴輪である。鋸歯文は有軸の綾杉文を充填するものである。鋸歯文の向きが反対であるが、宮崎県西都原171号墳出土の盾形埴輪と共に通する特徴が多いことから、68同様、5世紀前半の製品と見た方がよい（高橋1993）。乳白褐色で焼成はやや軟質である。

**器種不明 墳**  
**埴輪** これに対して、83はA区から出土したことが確かで、胎土も文様とともに双脚輪状文形埴輪と類似している。ただし、直線的な一辺が残り、直交する梯子状文様も双脚輪状文形埴輪には比定しにくい特徴と言え、ここでは盾形埴輪の隅の破片として報告する。内側には内部を線で充填した鋸歯文が刻まれている。もちろん、盾形埴輪に比定できる以上、盾持人一部である可能性もあることになる。南掘割りからの出土である。

84以後の破片は器種の同定ができない器財埴輪の破片である。84は2本の並行する沈線が残るも、残存する端部の形状からは何の埴輪かわからない。85は無文で鰐状の外形をもつが、天地を含めかたちを復元できない。

86はナデで調整したやや湾曲のある破片に粘土を帶状に貼り足し、その上を指で連続的に押

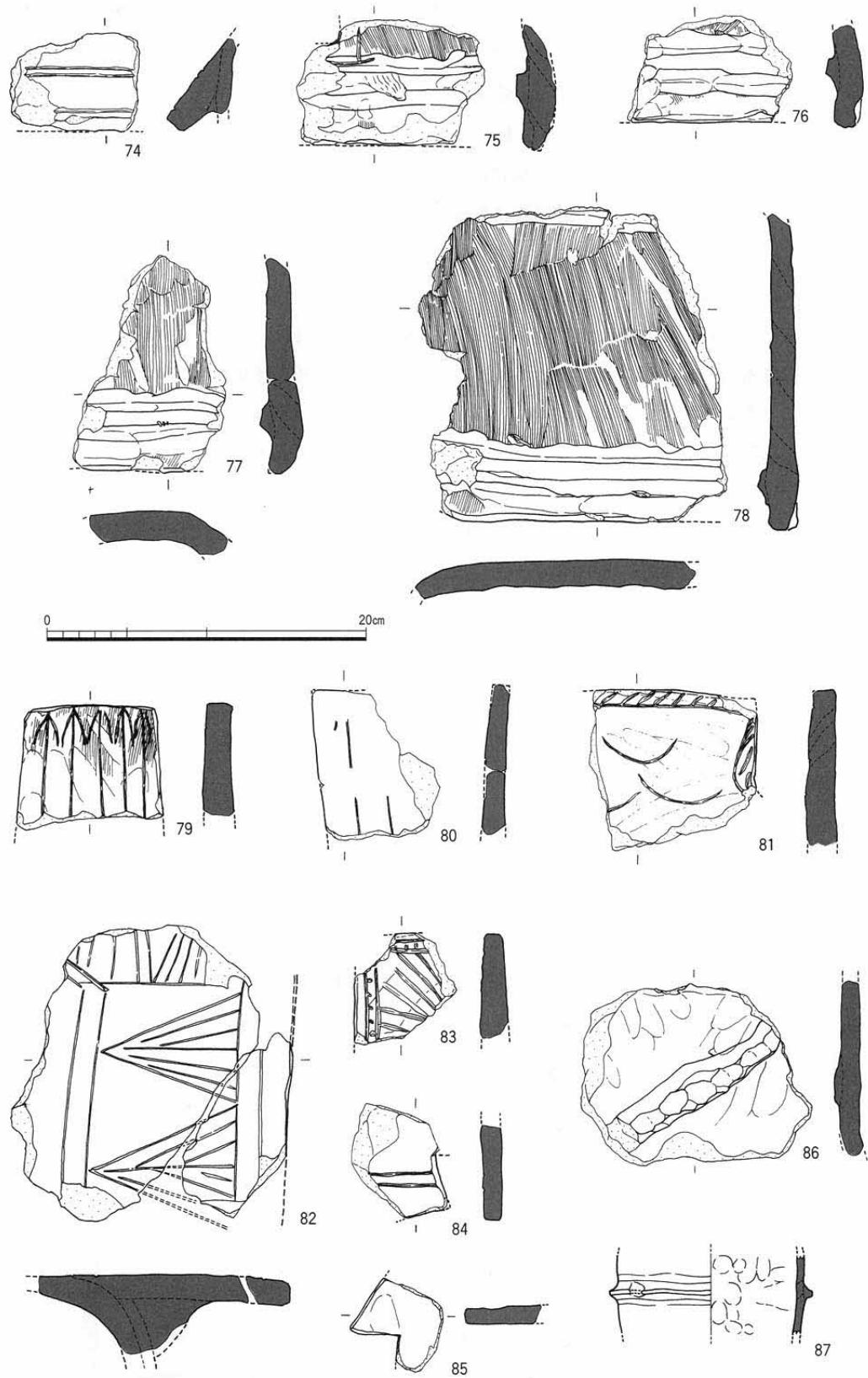


Fig. 53 音乘谷古墳 その他の形象埴輪 1:4

えたものである。13の馬形埴輪の障泥に用いられた貼り足し方に似るが、ユビオサエの有無が大きく異なり、器種を同定できない。出土地点も不明である。87は円筒埴輪に似るが、器壁が薄く、径も11.8cmと著しく小さく、外面にはハケメが残らない。丁寧なナデが施されていることから形象埴輪の一部と理解した。B区からの出土で、墳頂での使用が想定される。

**倒立技法** **円筒部 (Fig. 54, PL. 33-下)** Fig. 54には形象埴輪の円筒部を集めた。どれも倒立技法によって作られており、いずれかの器財埴輪になると思われる。88は突帯を2条残すもっとも残りが良いもので、両突帯間は心心で23cmと長く、下側の突帯に近い位置に径の小さい円孔を開ける。おそらく上部の突帯のところが形象部との境で、もっとも狭くなった円筒部の径は12.8cm。小型の玉杖形埴輪の基部であろう。黄白褐色で焼成は甘いが、表面に赤色顔料が残る。B区出土。

89~91は基部の破片である。89と90は88と同じく小型で、89が径19.0cm、90が径18.4cmに復元できる。ともに基部が外側に広がっている。89は幅の広い粘土帶上の押圧はあまり顕著でない。橙褐色で双脚輪状文形埴輪の基部の可能性がある。盜掘坑内から出土している。これに対して、90は粘土帶が狭く、押圧は比較的はっきり凹凸を見せている。また、内面に横方向のハケメを施している。ベージュ色を呈し、小型の玉杖形埴輪の基部にあたると見てよい。D区からの出土で焼成は堅緻。これらに対して91は径が22cmと大きく、また裾が広がらず、別種類の埴輪の基部と見られる。ただし、これも端部には薄く粘土帶を貼り付け、一押しづつ押圧をおこなっている。焼成はやや甘く、ベージュ色を呈す。B区出土であることを評価するなら、大型玉杖形埴輪が人物、動物埴輪樹立区に限定される可能性から、それとは別種の埴輪と見る方がよい。

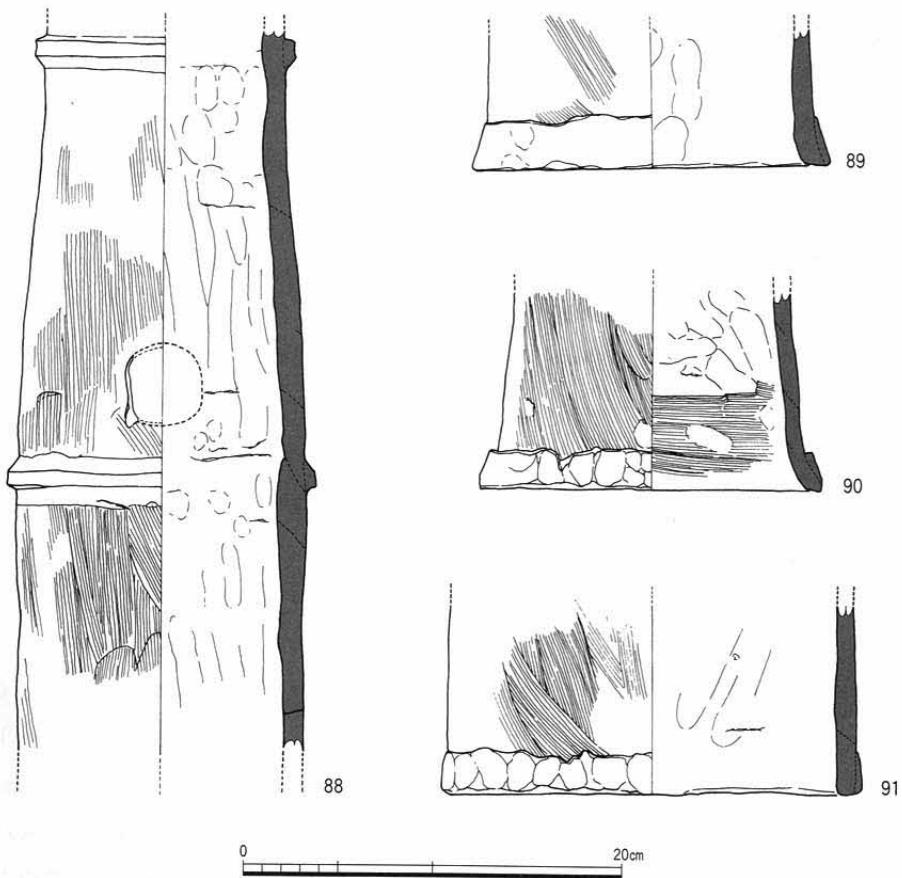


Fig. 54 音乗谷古墳 形象埴輪円筒部 1:4

かもしれない。

#### (2)円筒埴輪 (Fig. 55・56, PL. 34~36)

音乗谷古墳から出土した円筒埴輪はすべて普通円筒に属するもので、朝顔形埴輪は1点も存在しないことが注すべき特質となっている。図化したものは21点であるが、C区の埴輪集中域にあった92を除き、原位置に立っていたものはない。

はじめに全体的な特徴を説明し、その後で、目立つ一群の抽出を試みたい。

**形態** すべて4条突帯5段構成に作られていると復元できる。底部からほぼ一様な傾きで上に向かって開いていく。全長がわかるものは92・94・99・106の4点であるが、ばらつきも大きく平均で54.6cm。口縁部径は平均23.9cm、底部径16.5cmとなる。

透かしは第2、3、4段に2孔ずつ上下で直交する向きに穿つのを典型とするが、106のように第3段には省略しているものもある。透かしの径は比較的大きい。

突帯は台形断面で大ぶりなものが目立ち、とくに上側の稜が突出する。ただし、貼り付けにあたって何ら貼り付け位置の目印を付けていないせいか、大きくなれるようにナデ付けられているものも少なくなく、ナデ付けのひとたでひとたでが良く見えるものもある。

割付をおこなっていないため、突帯の間隔も個体内でさえまちまちであり、100に見るように口縁部のラインの水平が重視されていることがわかる。

口縁は基本的に断面コ字形の単純な仕上げとなっている。端面を整える最終のヨコナデではあまり強い力を入れておらず、端部際までハケメが明瞭に残る個体が多い。

**外面調整** 外面調整は粘土紐の積み上げ後、直接縦位のハケメを下から上にかけて、下部から徐々に仕上げていき、口縁部のハケメを最終的にかけて終わっている。そして、突帯の貼り付けは口縁まで作ってからおこなっていると考えられる。音乗谷古墳出土の円筒埴輪の外面調整には以下のようにいくつか注意される点がある。

まず、最初に施されるタテハケメが、基部の端からきっちり施されている個体があるいっぽう、112のようにハケメのかかっていない外面が広く残るものも見られる。一方、ハケメ自身は開始点をらせん状にずらしながら効率よく下から上に順に進んでいるように見えるものもあるが、多くは92や93のように開始点が不規則に並んでいることが観察されるものである。

また、この中にハケメの傾きが上に向かって右に傾いているものが少数ある。これは左手で下から搔き上げる所作によるもので、比率から見ても左利きの工人の手になるものであることは明白である。

**内面調整** 内面調整は相対的に丁寧で、粘土紐の痕跡はナデやユビオサエで消されほとんど残っていない。口縁部付近にのみいずれも横方向にハケメを施しているが、それ以外のところへのハケメの施し方にはばらつきがある。

**底部調整** 底部に特別な調整を施した個体はわずかしかない。しかし、107と108は痕跡としては微かであるが、板状のもので抑えたために、ハケメが消え、断面もやや薄くなっている。これらを除くと、底部は外面に一次タテハケメ調整を施すだけである。

**群別** それでは、音乗谷古墳の円筒埴輪の中で特徴的な群についていくつか説明を加えることにしよう。

Fig. 55の92~98が上に掲げた各項目においてもよくまとまりを見せる一群である。これらを

朝顔不在

円筒埴輪  
の特徴

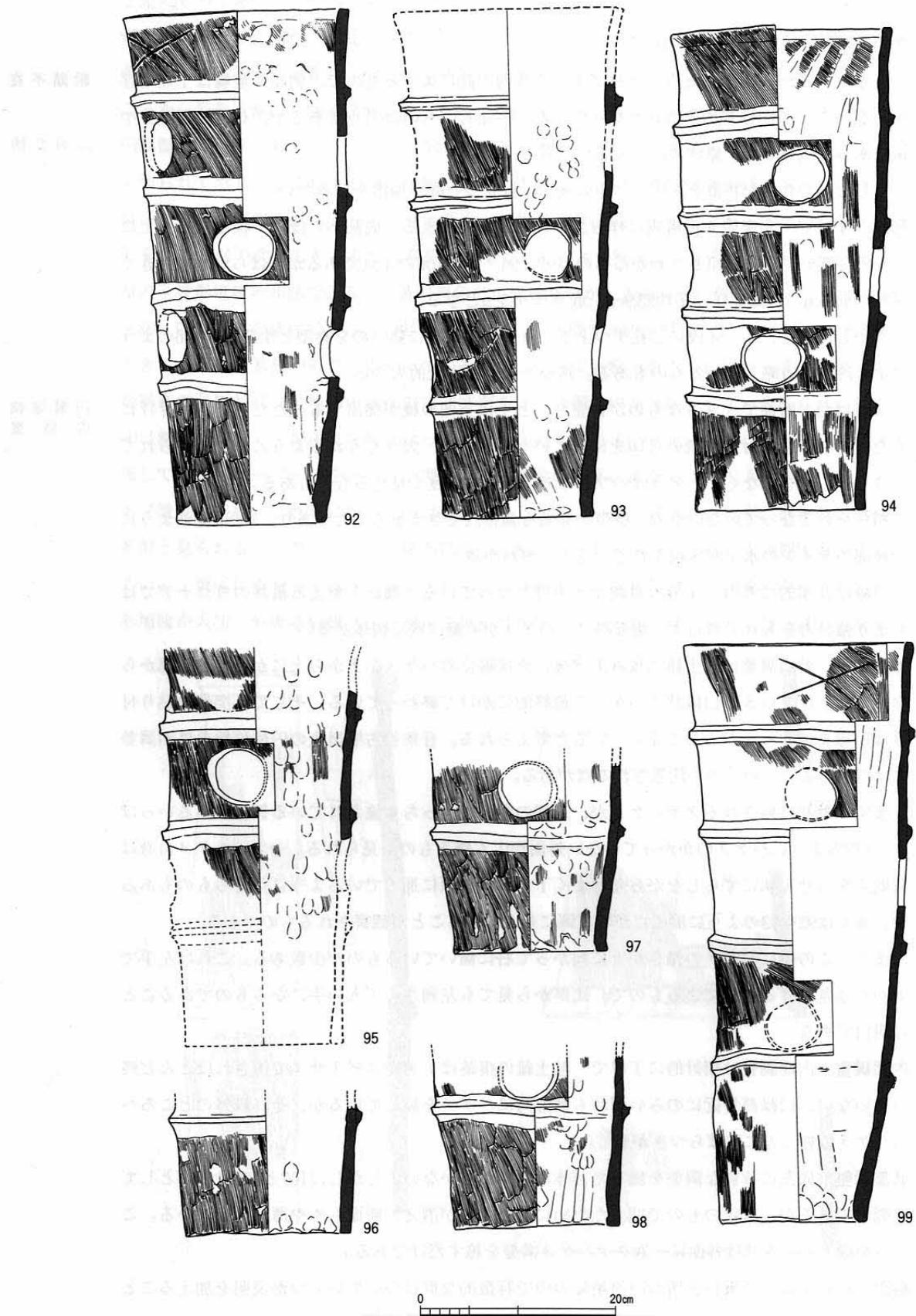


Fig. 55 音乘谷古墳 円筒埴輪 (1) 1:6

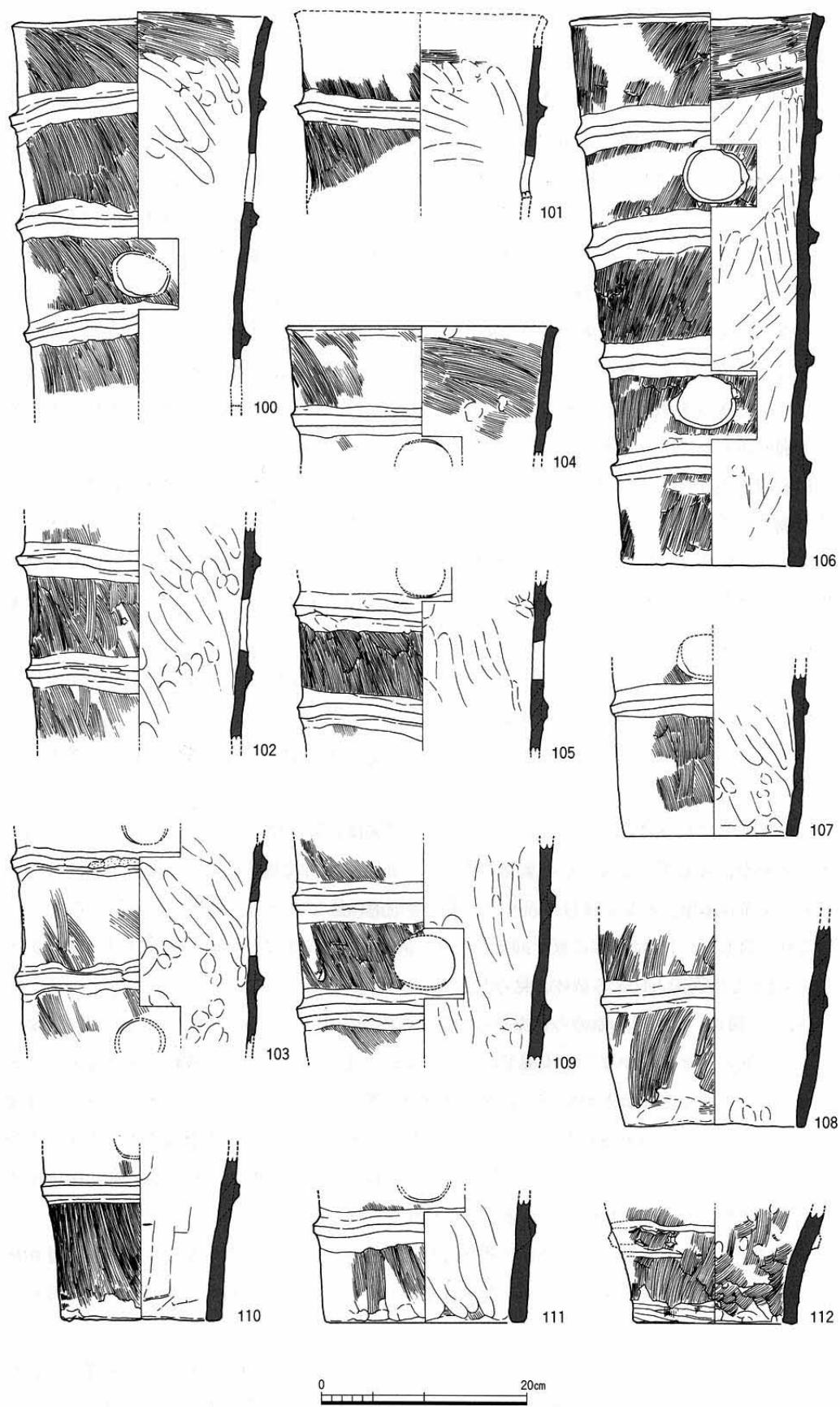


Fig. 56 音乘谷古墳 円筒埴輪 (2) 1:6

- 円筒埴輪群  
1 群 1群と称する。それは、以下の特徴を共有し、洗練された感がある。目の細かいハケメ (PL. 36-左下) を外面に丁寧に何度も施し、さらに内面にも縦方向のハケメを施す。内面のハケメは縦方向に適宜施されているが、その後のユビによる調整でほとんどが消されている。色調は淡褐色でややピンクないし紫がかるものもあるが、焼成が堅緻な仕上がりを見せる。胎土に角閃石と見られる黒色粒子が目立って含まれる。突帯は突出の大きなシャープなもので、あまりぶれのない端正な貼り付けがなされている。なお、92に見える×印のヘラ記号は図示したその他の個体には見られないが、同じ群に属すると思われる別の破片にも同様に施されている。大きさは底径15.5cm～17.6cm、口縁径は92と94ともに22.8cm、高さは92が52.8cm、94が50.6cmを計る。
- ヘラ記号を重視すると、99は形態が若干異なるが、同じ群に含めることも可能かもしれない。しかし、焼成は甘く、胎土中の黒色粒子が少ない。また、内面には口縁部以外縦方向のハケメがなく、大きさも第1段がかなり高く、全高も60.4cmと高い。突帯の突出度がやや弱いことからも別の群としておく。底径は14.9cm、口縁径は23.7cmを計る。
- 2 群 Fig. 56の100～103が1群について個体数の多いもので、紫褐色～橙褐色を呈し、焼成は良好で堅緻な仕上がりとなっている。これらを2群としよう。突帯も大ぶりで突出度の高いものであるが、突帯の貼り付けはかなりいびつでうねっている。透かしは小ぶりで、ハケメは目の粗いものを使用し、外面タテハケメはかなり斜行し (PL. 36-右下)、内面は口縁部付近のみほぼ水平に近く斜めに施している。100の口径は約26cmを計る。
- 3 群 104・105は突帯が低くて平らなことが大きな特徴で、明橙褐色の軟質に焼きあがっている。3群とする。104の口縁径は約31.0cmを計り、大きい。
- 以上の3群以外は1個体あたりの情報が少ないか、あるいは同じ群に属する個体が少ないのでこれ以上の群別呼称は控えたい。
- 106・108・112が左利き工人の手になる製品で、106は完形に復元した。106は最上段外面に赤色顔料が付着している橙褐色の個体である。下から3段目に透かしをもたないという特徴がある。突帯は重厚。ハケメは目が粗く、比較的規則的に施している。器壁は1.1cm平均で厚い。
- これに対して、108は底部に板で抑えたような調整が認められる上、ハケメもあまり規則的でなく、106とは別工人による個体と見られる。
- 112は上掲のいずれにも認められなかった第1段内面のナナメハケメがもっとも大きな特徴である。外面のハケメもかなり不規則で、かつ底面近くまで施そうとする意識が希薄である。そのため、底面から2cmほどの外面には粘土紐を作る際に押し当てられた台の木目が付いたままとなっている。下から8cmほどのところに貼り付けられていた外面の突帯は本古墳出土品の中では珍しくはざれている。16.2cmの底径で上開きの器形や調整の特徴はそれが円筒埴輪の中では異質な部類に属し、形象埴輪の一部である可能性も残っている。
- 107は108と同様、外面ハケメ調整が基底部付近で消されているところからも、底部調整が施されたことが確認できる個体である。突帯は小ぶりで、高さ13cmと高い位置に貼り付けられている。
- 109～111にも類型化しにくいが比較的残りのよいものを掲げた。109は基部、口縁部とともになく、暗褐色で焼成は良好。突帯はやや低い。110は器壁が厚く白褐色のもの。突帯は低い。底径15.4cmを計る。111は第1段部分での器壁が1.5cmを計るもっとも厚手の円筒埴輪で、外面のハケ

メと内面のナデの及ばない調整前の粘土肌が露出しているところが目立つ。突帶は低い。淡褐色で焼成は良好。底径は19.7cmに復元でき、径ももっとも大きい部類に属する。

**樹立位置との関係** 以上に紹介した円筒埴輪の群別と出土位置とはいかなる関係にあるのだろうか。墳頂出土品を除くと、樹立位置が限定できるものはないのであるが、掘割りや斜面から出土しているものも本来の樹立位置をある程度保っていると考えて、やや詳しく検討したい。

Fig. 28と29に円筒埴輪の番号を付記したように、本古墳からもっとも多く出土している1群の埴輪は、C区とD区の埴輪集中地点で出土した円筒埴輪の大半を占めている。また、C区とD区の埴輪同士が接合した93のような存在がある。99が1群と近いものであると述べたが、それを加えてもよければ、少なくとも墳頂の北側半分の円筒埴輪はすべて一つの工人集団ないし一人の工人によってまかなわれていた可能性が指摘しうる。製作の段階であらかじめ、配置する地点まで決められていたのであろう。

それ以外の類型は、ほとんどが掘割りを中心にA区からの出土であり、A区出土品には墳頂と比べると多様さが目立つ。これは、墳頂に並べる埴輪は裾に並べるものに比べて重要視されていたことを示すのかもしれない。1群に見られる洗練された特徴がその想定を支持する。

これに対して、群別できなかつた多くの円筒埴輪が形象埴輪の一群とともに南掘割りから出土した。裾にめぐらしたであろう円筒埴輪はあまり重視されていなかつたのか、配列の仕方があまり厳格なものでなかつたことを示しているのだろうか。

それでも、2群や3群のように比較的量のまとまるものがあり、これらが形象埴輪集中樹立区に付随するものであったかもしれない。それ以外があちこちからの流れ込みであったとすれば音乗谷古墳の円筒埴輪は基本的に群別と樹立位置に相関があったと見られよう。

## (2) 須恵器 (Fig. 57~58, PL. 37)

須恵器はその多くが本来石室内に納められたものと考えられるが、それ以外にも墳頂その他、墳丘での祭祀に用いられたものもあったと思われる。そこで、盜掘坑内から出土したものと墳丘から出土したものに分けて図示する。

**盜掘坑内出土須恵器 (Fig. 57)** 1が有蓋高杯の蓋である。環状に近いつまみがつき、肩には弱く稜がつき口縁端部に面をもつ。内面天井部に同心円状の当て具痕跡がある。口径15.7cm、高さ5.5cmを計る。2もおそらく1と同様有蓋高杯の蓋と見られるが、つまみの有無は不明。外面の稜の下にはっきりと凹線がめぐり、1よりも箱形の形状であることが知られる。復元口径は14.2cm。3は無蓋高杯の身の部分。外面に2条の突帶がめぐり、その間に櫛状工具による斜め刺突が密に施されている。復元口径は11.2cm。

4~8はすべて杯の身部であるが、4、5以外はいずれも有蓋高杯の身と考えられる。4の蓋杯は口縁部径12.9cm、高さ3.5cm。体部外面は全体の3分の2を削っている。受け部の短さや口縁部の短さ、杯部の浅さなどから他より型的に新しいことは明らかである。5も細片であるが、4とほぼ同様のものであろう。6~8は基本的に同型式に属する有蓋高杯と見られる。6は残存部端にかろうじて脚部の剥がれた跡が残っているが、長脚ではない可能性もある。

外面の削りの範囲は3分の2、立ち上がりは外反気味で、端面を丸く収める。形態的には陶邑のTK10型式期の特徴を有するが、6の口径は10cmに満たず、7は口径9.2cm、8は8.6cmとい

1 群 墳 は  
頂 用

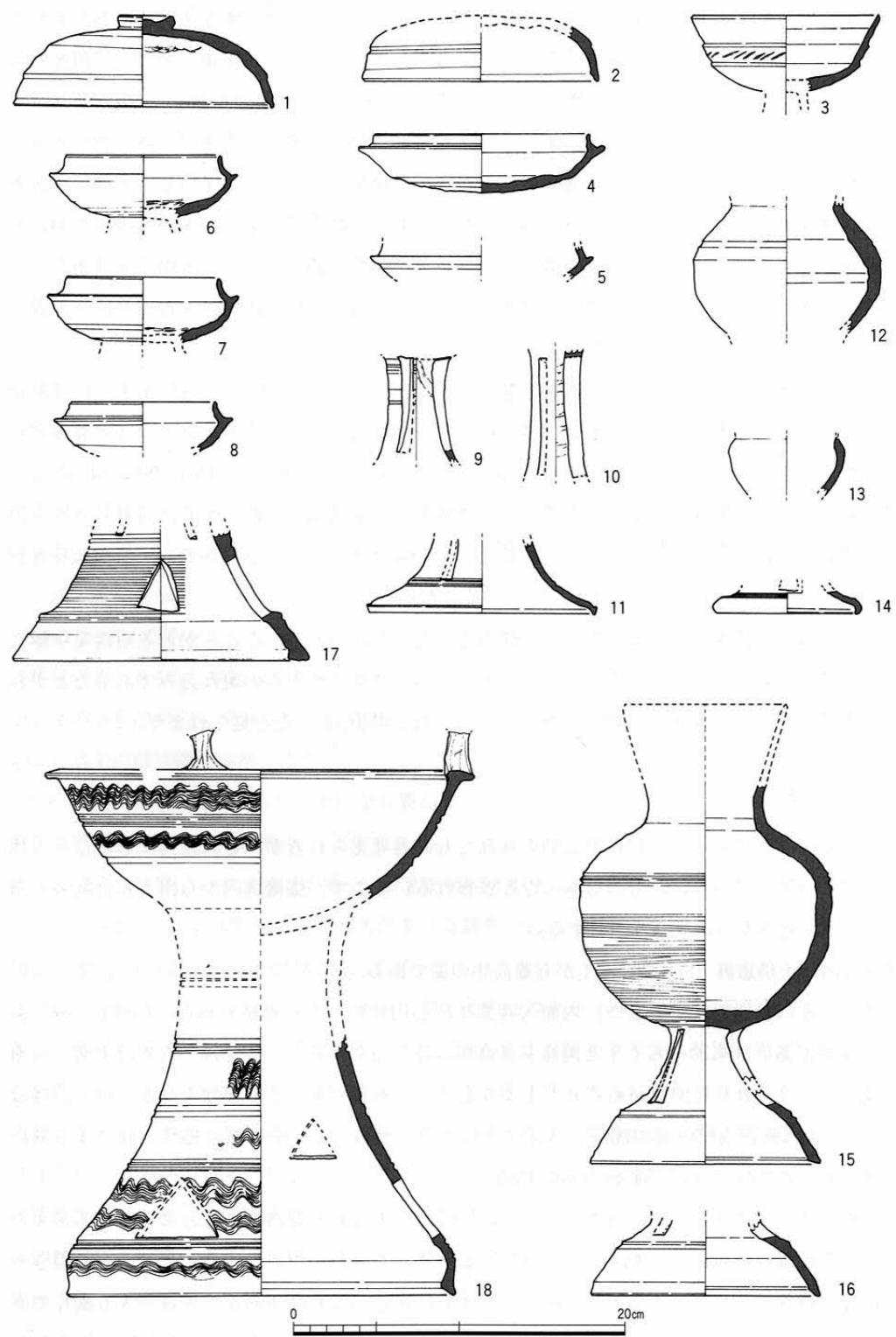


Fig. 57 音乘谷古墳 須恵器 (1) 1:4

ずれも小さい。6、7の杯部内面には当て具痕が見られる。

9～11が高杯脚部である。9、10はともに2段3方向透かしの脚部の上部であるが、明らかに型式学的に先後関係にあるものである。9には残存する範囲で2条一組の沈線が2段にめぐり、10にはそれがない。10の内面には絞り目が顕著に認められる。以上の特徴から9がTK10、10がTK43型式と見られる。おそらく9に対応する11は器壁が薄く、下段の透かしが残るもので、透かしの下縁に接して2条の沈線がめぐっている。脚端部は外側に面をもって、接地部分が下方に引き出されている。

12は球形の胴部をもつ壺の破片であるが、全形は窺い知れない。胴部上半の器壁がとくに厚く、肩部に沈線が1条めぐる。胴部最大径は11.4cmである。

13は胴部最大径7.0cmの小型で薄手の壺形態の破片であるが、これも全形はわからない。また、14も器種不明で長方形ないし三角形の透かしが入る小型の脚部の破片である。端部は丸く折り曲げ、脚部外面にはカキメが見られる。底径9.0cm。

15は台付壺。台部は胴部との接合部分が細くくびれ、そこから大きく広がりながら踏ん張る。上半に3方向の長方形透かしがあけられ、透かしの下で屈曲するところに沈線が1条めぐる。胴部はやや張る肩部に沈線が2条めぐり、下半はカキメがよく残る。口頸部はほとんど残っておらず、有蓋か無蓋かは不明。脚部の高さ8.3cm、復元全高28cm、胴部最大径15.2cmである。16は15とほぼ同形の破片である。上端に長方形透かしが一部残る。底径14.0cmを計る。

17は上端にわずかに長方形透かしの下辺が残っており、2段透かしの台部であることが知られる。器壁は0.9cmと厚く、脚端部は面をもって広がっている。下段の透かしは三角形で、上段ともに4方向で、それらを千鳥に配置している。三角形透かしの下で脚部は一度屈曲するが、その直下に沈線が1条めぐる。この屈曲部より上には外面にカキメをよく残している。底径18.0cmである。

18は同一個体に属するいくつかの破片から復元的に図化した装飾付器台である。いわゆる高杯形の器台で、身部と脚部からなる。鉢形の身部の口縁端部を水平に拡張し、そこに偶像を基部を介して貼り付けるようにしてある。ひとつの基部しか残っておらず、偶像本体の形は知りえない。表面は指で整えている。

身部は外面に上から2条、1条の沈線を施し、その間に波状文をめぐらせる。上段の波状文はかなり重複するように2重にめぐらせたものであるのに対して、下段は1重で済ませている。脚部はかなりのびて長くなった段階のものであり、端部近くにいたってほぼ直立するように踏ん張っている。脚端部は面をもつが、歪んだのか水平な接地面を形成していない。残存破片から推定して、おそらく図のように沈線によって6段に分割される形態であったと思われる。分割の沈線はいちばん下のものを除き、基本的に2条1組となっている。各区画には波状文を1ないし2周回し、その後三角形の3方向透かしを千鳥に配している。底径23.7cm、口縁径26.1cm、復元全高26.5cmである。

**墳丘出土須恵器 (Fig. 58)** 19は蓋杯の蓋の破片。天井部は丸みをもち、稜をもたず、口縁端部も丸く収めるだけである。先の4、5に対応する型式とみなせる。復元径14.8cm。20は蓋杯か高杯の身部の破片。立ち上がりは低く、復元される径も10.4cmとかなり小さい。21はナデで仕上げられた細頸の壺である。全体を推し測ることができないが、特異な器形のものと思われる。

装飾付器台

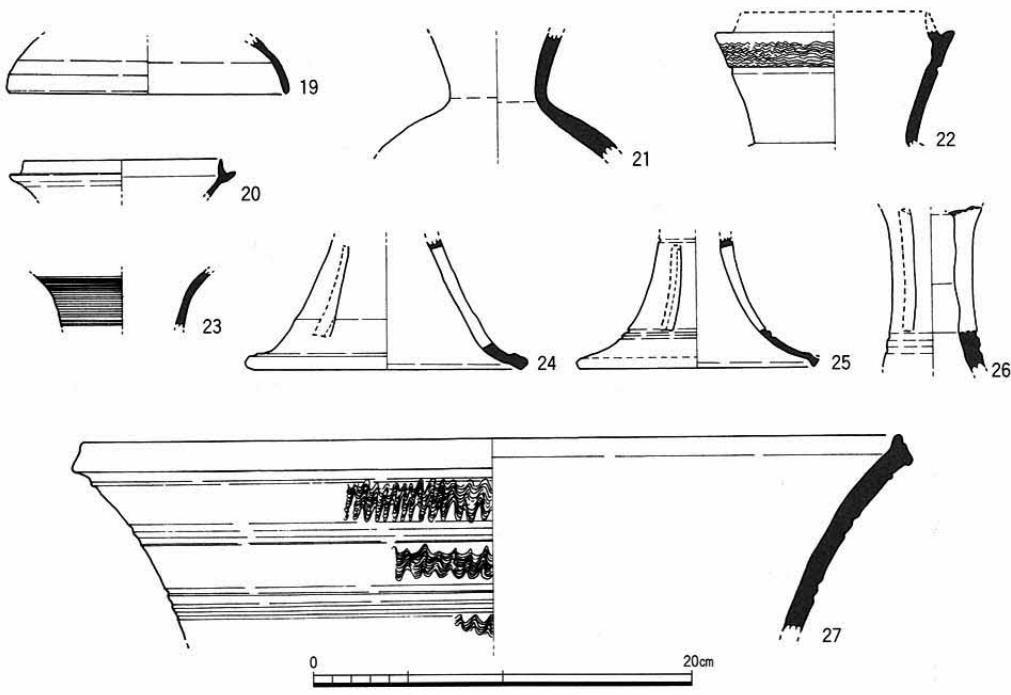


Fig. 58 音乗谷古墳 須恵器 (2) 1:4

22は有蓋台付壺の口頸部の破片である。下端は壺胴部との接点にあたる。口縁端部は欠損しているが、蓋受け部から立ち上がりがわずかに分岐していることがわかる。外面は上方に沈線を1条めぐらし、それより上に振幅の少ない波状文を1周めぐらしている。蓋受け部での径12.8cmを計る。

23は脛の頸部の破片と見られ、外面にカキメが残る黒褐色の硬質の破片である。TK10型式と見られる。24~26は高杯の脚である。24は器壁が厚く、裾広がりの脚部外面は下端から2.8cmのところで一度屈曲している。透かしは2段3方向の長方形透かしと思われるが、下段しか残っていない。復元底径14.2cm。25はFig. 57-11とほとんど同形に復元されるもので、3方向2段透かしのうち、下段の透かしが残っている。透かしの上下に沈線による区画がめぐる。復元径12.5cm。26は上段の透かし部分が残っている破片で下段透かしとの間に2条の沈線がめぐる。24がTK10、25・26がTK43型式とみなせる。27は甕の口縁である。外面を1条ないし2条の沈線で区画した中に、波状文を細かく施している。復元口径43.2cmである。

新旧型式の  
共存

以上の須恵器はその多くが本来石室内に副葬されていたものと考えてよい。ただし、27の大甕をはじめ、いくつかは墳丘頂部や裾部などに置かれていたものも含まれていると考えられ、とくに埋葬施設盗掘坑内から出土しているものの中には、もともと墳頂で用いられていたものが、盗掘によって落ち込んだものもあった可能性がある。また、TK10とTK43の新旧型式の共存も注意が必要である。

## (3) 金属製品・管玉 (Fig. 59・60、PL. 38)

副葬品のうち金属製品としては、鉄製武器と鉄製工具、そして金銅装馬具がある。Fig. 59には鉄製武器と工具を、そしてFig. 60には金銅装馬具とその関係の遺物を載せてある。

鉄鎌は大半が断片化しており、さらに錆化により原形がわからにくくなっていたが、接合とX線撮影などにより概報作成時に比べいくらかは形状が知られるようになった。鎌身部の残っ

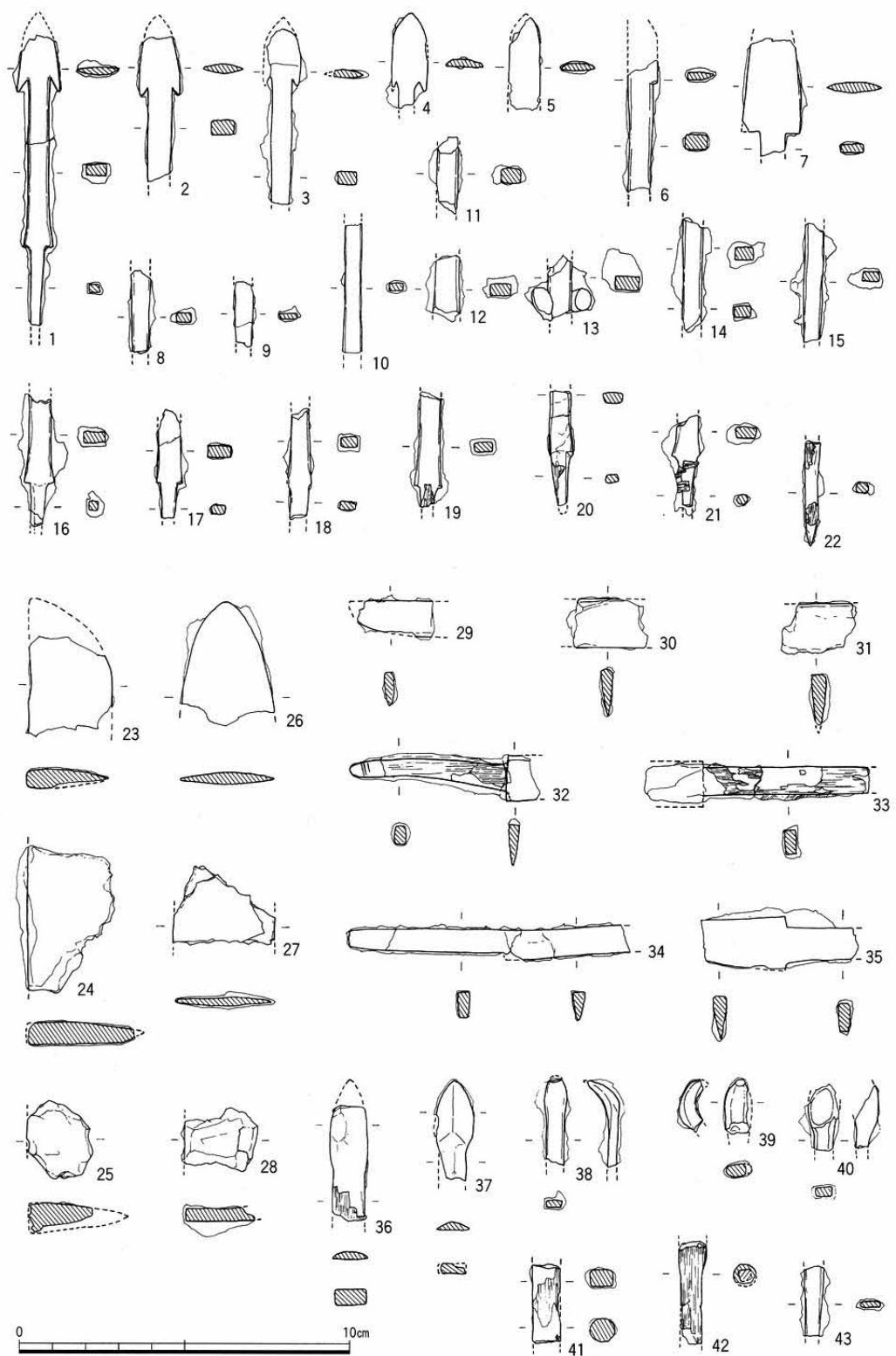


Fig. 59 音乗谷古墳 鉄製品 1:2

ているものを見ると、7の1点を除いて細根式の長頸鎌であることがわかる。その中でも左右両側に逆刺のつく柳葉形の長頸鎌がもっとも多く、1点のみ刀子形の鎌身をもつものがある。柳葉形のうち、1が唯一頸部の長さが知られるもので、5.4cmを計る。また、鎌身部の長さは先端から逆刺の先までで2.4cm程度を計る。5については1~4と形状が異なることは知られるが、逆刺も含め全体を予測できない。これらの頸部の断面は長方形である。それらに比べると平根式の7は頸部の断面がより平たく作られていることがわかる。7は鎌身部下端がまっすぐで逆刺はつかない。それでも、頸部は長頸鎌と同様な形態に作られていたであろうと思われる。

8~15は頸部の中間部分の破片と思われるが、中には工具の柄の破片が含まれているかもしれない。9・10は薄い作りであるが、4の鎌身とともに出土しており、これらは本来同一個体だったかもしれない。

16~22の7本が頸部から茎部にかけての破片である。いずれも関はやや外に張り出し、直角の段がつくものである。茎部の断面は隅丸方形であるが、末端に近づくにつれて円形になる。19~22には矢柄の木質が一部茎部の上に残っており、21はその上を巻いていたであろう樹皮もわずかに残っている。

22は16~21のいずれとも接合せず、1をあわせて茎部から鉄鎌は最低8本あったことになる。

**刀 剣** 23~28が大型の刀剣類の断片である。そのうち23~25は明らかに大刀の身の破片と認定できる。これに対して、26と27は剣の破片と思われ、大刀に比べて刃先が薄いことが知られる。28は角張った一端が残る厚みのある破片で、大刀や剣の柄の部分ではなかろうか。

**刀 子** 29~35が小刀、ないし刀子の各部の破片である。29~31は刃の部分で、29のような小型のものとそうでないものとに分かれれる。32~35の中で34がその小型の刃をもつもので、脊側には関がつかない。柄部分の長さは5.0cm、幅0.7cm、刃の幅は0.8cmである。これ以外は33が多少不鮮明であるが、いずれも脊側にも段のつく型式と見られる。32は柄の形が現状では湾曲しているが、

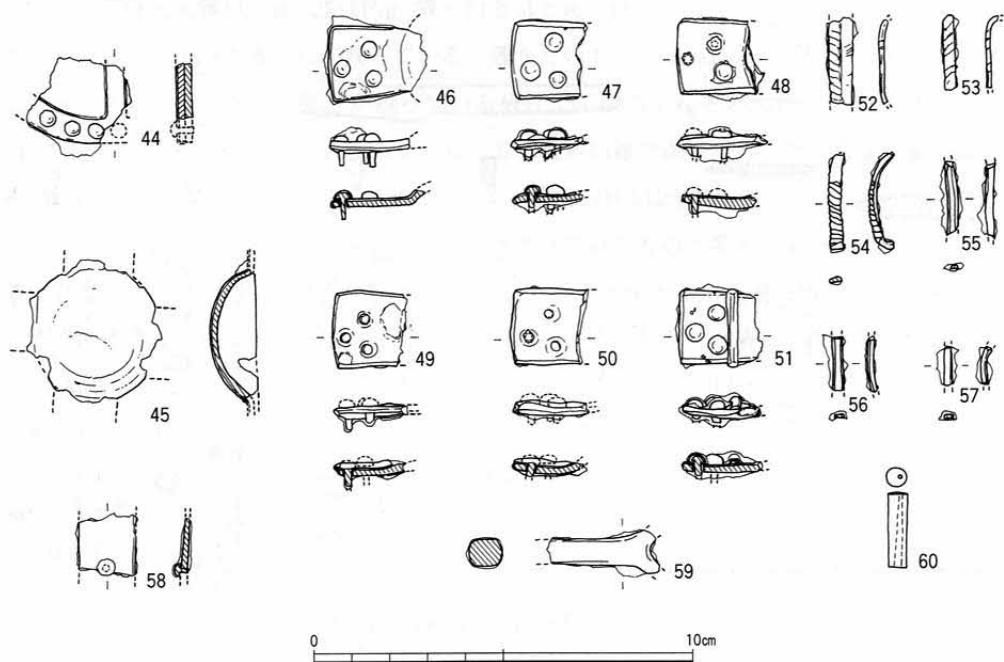


Fig. 60 音乗谷古墳 馬具・管玉 1:2

その上に残る柄の木目がそれにかかわりなく平行に走っているので、本来の形状を留めていると考えてよい。なお、柄尻に近い部分に有機質のものを巻いたような痕跡を残している。柄の幅は先細りで刃先の幅は1.4cmである。33も同様に柄の木質が付着しているもので、柄部分の長さは5.0cm以上、柄の幅は0.8cmを計る。

36～43が鉈を主とする工具類である。36と37が大型、そして38～40が小型の鉈と見られるが、認定に誤りがある可能性が残る。36は刃の近くまで木質が残っている。37は他のものに比べて 工 具 刀の形状がある程度明瞭に読み取れる。小型の3点はいずれも刃部が鉤状にめくれるものようである。

41～43は鉄製工具の柄と思われる。41は上側が断面長方形、下側ほど円形になっていて、周囲に木質が付着している。42も同様に木質が付着しているが、断面は細い。43は平たい断面形で鑿であろうか。

44は鉄地金銅張の十字文楕円形鏡板の破片と見られる。下画の縁と十字文の連接する部分で、馬 具 鉄製の縁金具と十字文を楕円形の鉄の地板に重ねた上から1枚の金銅板で覆う型式である。縁金具の上には現状で3個の鉈が密に打ってあり、鉈の頭には銀を被せてあるように観察される。これ以外の鏡板の破片やセットになる杏葉の破片はまったく採集されていない。

45が床面礫床上でいくつかの脚の破片とともに出土した辻金具の中心部分の破片である。半球形の伏鉢形を呈し、鉄地金銅張で作られている。四方に脚がつくものであるが、いずれもはずれている。伏鉢の高さ1.2cm、直径3.5cmである。46～51が2のような辻金具につく脚の破片である。いずれも3本ずつ鉈を打っており、それとその内側の責金具で三繋を留める仕組みになっている。脚の形状は46や51のように外側に広がるものと47や50のようにはぼ矩形のものとがあるが、その差は明らかでない。鉈はそれぞれ3本ずつあり、よく見ると、どれも同じようにいびつな配置であけられている。同工であることが示されている。鉈頭の取れたものも多いが、残っているものには銀被せの状態がわかるものがある。また、51は唯一責金具が1本だけ鋸着している。残存具合からすると最低2個体は辻金具があったと見られよう。

52～57にその責金具を図示したが、そのうち52～54のみ銀が被せられたまま残っていた。銀の表面には縄目状の凹凸が付けられていて、52からそれが綾杉状に見えるように2本一組で使用されていたことがわかる。55～57がその銀被せがはずれた鉄の芯部分の破片で、51に遺存しているものと共通である。

58は幅1.5cmの細長い鉄板に鉈が打ってある破片。馬具かどうかわからないが、吊金具の一種と見られる。金銅装、銀張は確認できない。59は断面円形に近い鉄棒のいっぽうの端が環状に二股になっているもの。轡か引手の一部と見られる。

60は碧玉製の管玉である。濃緑色で、表面は平滑である。長さ2cm、径0.5cmを計る。穿孔は 管 玉 片面からおこなっており、裏側での孔の位置はかなり端に寄っている。

#### 参考文献

- 高橋克壽1993「西都原171号墳の埴輪」『宮崎県史研究』第7号
- 田辺昭三1966『陶邑古窯址群I』研究論集第10号 平安学園考古学クラブ
- 奈良県教育委員会1973『奈良山 平城ニュータウン予定地内遺跡調査概報』